

米国世論の戦争に対する選好とジェンダー観念：  
『美しき魂－正義の戦士』のフレームが戦争の正当性に与える影響をめぐる一考察

一橋大学大学院法学研究科国際関係論専攻博士後期課程 JD141003 岸野幸枝

# 目次

第一章：イントロダクション.....	3
1.1. 本研究の概略.....	3
1.2. 問題視角.....	4
1.3. 軍事紛争.....	5
1.4. 『正義の戦士—美しき魂』のフレームと戦争.....	7
1.5. 全体の構成.....	8
第二章 戦争と世論.....	10
2.1. 世論と戦争に対する支持に関する先行研究.....	10
1.3.3. 戦場における出来事による影響.....	10
2.1.2 戦争に対する認識の仕方による影響.....	12
2.1.3 個人の性質の影響.....	14
2.2. 小括.....	16
第三章 『美しき魂—正義の戦士』のフレームと女性の軍事領域への進出.....	17
3.1. 『美しき魂—正義の戦士』と戦争.....	17
3.2. 女性の軍事領域への参入.....	21
3.3. 小括.....	23
第四章 『美しき魂—正義の戦士』と戦争の正当性をめぐる理論.....	25
4.1. フレーム理論.....	25
4.2. 『美しき魂—正義の戦士』のフレーム.....	30
4.3. 『美しき魂—正義の戦士』のフレームと世論の戦争に対する態度.....	30
4.3.1 戦争に対する関心への影響.....	31
4.3.2. 自国と相手国をめぐる世界観への影響.....	32
4.3.3. 政策選好に対する影響.....	34
4.3.4. 保護者と被保護者の性別の組み合わせによる効果.....	35
4.3.5. 個人レベルのジェンダー・ステレオタイプによる効果.....	36
4.4. 実験計画.....	37

4.5. サーベイの概略.....	38
第五章 『美しき魂－正義の戦士』のフレームと、戦争に対する関心・世界観・選好 .....	47
5.1. 本章の目的と仮説.....	47
5.2 変数 .....	47
5.3. 結果 .....	49
5.4. 小括 .....	57
第六章『美しき魂－正義の戦士』のフレームの影響力和ジェンダー・ステレオタイプ .....	80
6.1. 本章の目的と仮説.....	80
6.2 変数 .....	81
6.3 結果 .....	82
6.4. 小括 .....	91
第七章 総括.....	122
7.1. 本研究の概略.....	122
7.2. 本研究の分析結果とインプリケーション .....	124
7.3. 今後の展望.....	127
謝辞 .....	130
参照資料 .....	132
参照文献 .....	139

## 第一章：イントロダクション

### 1.1. 本研究の概略

人々はどのような条件下で、見ず知らずの他集団を敵として理解し、当該集団に対する武力攻撃を正当なものとして受け入れるのか。本研究では、米国世論の軍事派遣をめぐる選好を分析することで、上記の問いに答えることを目的とする。とりわけ、世論研究にジェンダー国際関係論の視座を導入することで、伝統的なジェンダー観念に沿って戦争を語ることが、軍事派遣の正当性につながることを明らかにすることを目指す。

具体的には、本研究は以下の二つの目的を持つ。第一に、「米国の勇敢な兵士が、無垢で脆弱な紛争地女性を敵から救う」という、『美しき魂－正義の戦士』<sup>1</sup>のフレーム<sup>2</sup>によって戦争を語ることが、米国世論の戦争に対する関心を高め、自国と他国をめぐる世界観を形

---

<sup>1</sup>第三章で詳述するが、『美しき魂－正義の戦士』をめぐる考えは、戦時に、自国の男性が脆弱な女性の保護を責務とすべきことを述べている。ジェンダー国際関係論者によれば、ここでの被保護者は、自国の女性、あるいは敵国の女性の双方の可能性がある。本研究では、米国の男性兵が紛争地の女性を保護するという文脈で、『美しい魂－正義の戦士』という用語を用いる。

<sup>2</sup>第四章で再掲するが、フレームは、事象を人々に伝える方法や、人々による事象のとらえ方を表す用語であり、幅広い分野において無数の定義づけをされている用語である。本研究でフレームの定義として用いるのは、政治学分野で非常に頻繁に引用される Entman (1993)による定義である。すなわち、本研究では、「知覚される現実の特定の側面を選び取り、その側面を強調してテキストを用いて伝え、その結果、問題の特定の定義・因果関係の解釈・（事象に対する）道徳的な評価・推薦される対処方法を（情報の受け手に対して）促す行為」（p. 52、括弧内は筆者が補足）としてフレームを定義づける。

この定義に基づいて、Entman (1993)は、コミュニケーションプロセスの中で、情報の伝達者、テキスト、文章の受容者、文化の四つのロケーションで、フレームが表れることに言及している (p. 52)。このフレーム理論は、事象の伝え方によって、人々の事象に対するとらえ方が変容することを明らかにしてきた(Nacos & Torres-Reyna, 2004; Schnell & Callaghan, 2005; Shah, Domke, & Wackman, 1996)。

本研究の中核となる『美しき魂－正義の戦士』という概念を用いた分析を行うのは、主にジェンダー国際関係論者であるが、同分野でフレームという用語を用いて分析が行われることはあまりない。だが、本研究では、『美しき魂－正義の戦士』をめぐる考え方が、Entman (1993)の提示する、物事の特定の側面に焦点を当て、事実を切り取り、一つの現実の見方を提示するフレーム理論の定義に当てはまると考えている。そして、フレーム理論が、情報が人々の政策態度に対して影響力を持つ条件を検討していることから、本研究では、『美しき魂－正義の戦士』をめぐる考え方が世論の戦争態度に対して持つ影響力を分析する上で、フレーム理論が有用であると考えられる。そのため、本研究では、『美しき魂－正義の戦士』をめぐる考え方をフレームの一種であると定義づけた上で、分析を行う。

成し、軍事政策に対する選好を高めることにつながることを、本研究では解明する。第二に、『美しき魂－正義の戦士』の影響力は、①救済者が男性であり被救済者が女性であること、および、②人々が伝統的なジェンダー観念を信じていることにも支えられたものであることについても検証を行う。分析の結果、一点目については概ねデータによる支持を受けたが、二点目については限定的にしかデータの支持を受けることができなかった。本研究では、二点目の実証が困難であった原因についても考察する。

## 1.2. 問題視角

第二章および第三章でも述べるが、本研究が議会や政党の動向などのハイ・ポリティクス（注）の動きに焦点を当てた世論分析を行うのではなく、日常生活に浸透した『美しき魂－正義の戦士』のフレームに着目した分析を行う背景には、以下の三点の理由がある。第一に、第二章でも指摘するように、人々の政策判断の基軸が、日常生活における基軸と全く異なるものであるとは考えにくいことが、本研究を行うモチベーションの一つとなっている。人々は家庭や職場の問題を処理することに日々手一杯で、日常生活と直接の関わりがない安全保障政策などの事象に対して注意を払う余力が十分にあるとは必ずしも言えない。こうした中で、人々の軍事政策をめぐる判断軸と、日常生活における判断軸が同一線上にあることが、パーソナリティや人種的ステレオタイプに焦点を当てた研究によって既に明らかにされている。一方で、これらの研究が、日常生活に浸透したジェンダー観念に着目することはほとんどなかった。本研究は、こうした研究群に貢献する形で、日常生活における判断軸と安全保障政策における判断軸をつなぐ社会観念として、ジェンダー観念に着目した研究を行う。

第二に、多様な日常生活における判断軸の中でも、ジェンダー観念に着目するのは、ジェンダー観念が安全保障領域でとりわけ顕在化しやすい社会観念であることによる。第三章で詳しく述べるように、安全保障領域においては、強さや権力志向といった男性性を備えた男性が主体となることが当然視されてきた。裏を返せば、この枠組みから外れた女性やマイノリティが主体となり、安全保障政策を担う場合には、社会の議論を呼ぶことが多かった。この暗黙の前提にも関わらず、興味深いことに、世論と戦争をめぐる研究領域では、ジェンダー観念やジェンダー・ステレオタイプに着目した研究が行われることはあまりなかった<sup>3</sup>。本研究を通して、安全保障領域と切り離せない関係にあるジェンダー観念が、人々の戦争に対する考え方にどのように影響してきたのかを解明することを目指す。

---

<sup>3</sup>第二章で詳述するが、Gartner (2008)は米国死傷兵の性別が米国世論に与える影響に着目した研究、また、Johns & Davies (2017)は、紛争地で死傷した市民の性別が米国世論に与える影響に着目した研究を行っている。

第三に、ジェンダー国際関係論者と他分野の研究者の間に断絶が横たわっていることが、本研究を行う動機づけになっている。詳細は第三章に譲るが、軍事行為や軍事力の正当性とジェンダー観念の繋がり、すでにジェンダー国際関係論研究者によって明らかにされている。だが、こうしたジェンダー国際関係論分野における知見と、戦争をめぐる世論研究分野における知見を融合したのは、ごく限られた世論研究者などに限られてきた<sup>4</sup>。地域や時代の文脈を重視し、言説分析や歴史分析といった手法に焦点を当ててきたジェンダー国際関係論と、事象の法則性を明らかにすることを目的とし、定量手法や実験手法を主に用いてきた世論研究との間で、話す言語が異なってきたことが、両者間の断絶の原因の一つであろう<sup>5</sup>。本研究では、ジェンダー国際関係論の視角を導入しながらも、伝統的な世論研究で用いられてきた手法を用いることで、両分野を架橋することを目指す。

### 1.3. 軍事紛争

本研究の根底には、人が死ぬ戦争は望ましくないとする社会規範にも関わらず、現実の世界では軍事紛争が珍しくないという二つの事実のギャップに対する興味がある(Butler, 2012を参照)。実際、軍事紛争の数は、1940年代半ばから1960年代にかけて20前後以下を推移していたのに対し、1970年代半ばから2017年までの間は常に30を超えている<sup>6</sup>。1400年から2000年に至るまでの紛争をグラフに表した以下の図からも、その様子は優に見てとれよう。一つ一つの赤い円は紛争を表しており、円の大きさは死者数を表している。y軸は10万人当たりの死者数、x軸は年度を表している。そして、赤い線は合計の死者の割合、青い線は戦闘による死者の割合を表している。もちろん、人口自体も急増しているため、このグラフに対する解釈は限定的なものとなりうるが、今日においても紛争が珍しくないことを示す一つの目安にはなる。

図1：

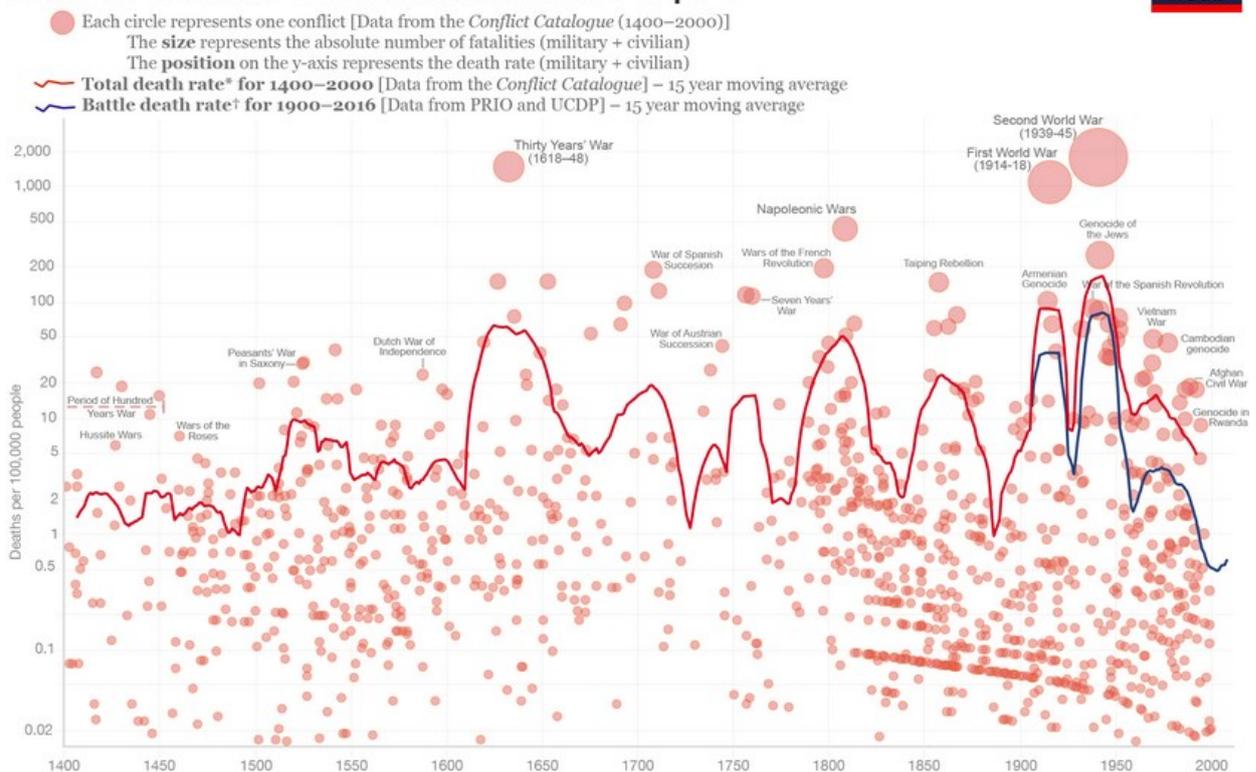
---

<sup>4</sup>すでに述べたように、Gartner (2008)やJohns & Davies (2017)は、米国兵や紛争地市民の性別に焦点を当てた分析を行っている。

<sup>5</sup>ジェンダー国際関係論者であるCaprioli (2004)は、ジェンダー国際関係論と、定量手法等を用いる伝統的な国際関係論の間には、深い断絶が横たわっていること、および、この断絶を乗り越えることが重要であることに言及している。

<sup>6</sup>Dupuy, Kendra & Siri Aas Rustad (2018) Trends in Armed Conflict, 1946–2017, Conflict Trends, 5. Oslo: PRIO. (<https://www.google.com/url?sa=t&rct=j&q=&esrc=s&source=web&cd=4&cad=rja&uact=8&ved=2ahUKEwi60d6EueLfAhUngK0KHbccBXqQFjAdeqQIChAC&url=https%3A%2F%2Freliefweb.int%2Fsites%2Freliefweb.int%2Ffiles%2Fresources%2FDupuy%252C%2520Rustad-%2520Trends%2520in%2520Armed%2520Conflict%252C%25201946%252E%2580%25932017%252C%2520Conflict%2520Trends%25205-2018.pdf&usq=AOvVawOAj1T-iyvKF34DhdhOrGMS>)。ここで挙げた軍事紛争は、armed conflict の訳であり、extra state, interstate, intrastate, internationalized の armed conflict を合計したもののことを指す。

# Global deaths in conflicts since 1400



(Our World in Data, Max Roser: <https://ourworldindata.org/war-and-peace>)

興味深いことに、戦争を否定する社会規範にも関わらず、こうした軍事紛争は、時に米国世論の高い支持を呼んできた。たとえば、21世紀のイラク戦争を正しい選択であったとする人々は、2003年に米国の回答者の71%を占めていた。そして、2003年から2008年にかけて同割合は急落したものの、2008年前後から2018年にかけてはほぼ横ばいで、2018年時点で、約43%の人びとがイラク戦争を正しい選択であったと答えている<sup>7</sup>。また、2003年から2008年にかけて、米国はイラクに軍隊を維持すべきか否かという問いに対し、2003年時点では全体の約64%、2008年時点でも全体の約47%の人びとが、イラクに軍事力を維持すべであると回答している<sup>8</sup>。同様の傾向は、アフガン戦争についても読み取れる。2009年時点で、アフガニスタンにおける成功を予想した人々は、米国の回答者の約62%であったが、この割合は2012年前後から下落を始めたものの、2014年頃から2018年頃にかけては、安定して30%代後半の回答者が、アフガニスタンでの状況は成功であったと回答している<sup>9</sup>。

<sup>7</sup> <https://www.pewresearch.org/fact-tank/2018/03/19/iraq-war-continues-to-divide-u-s-public-15-years-after-it-began/>

<sup>8</sup> <https://www.pewresearch.org/2008/03/19/public-attitudes-toward-the-war-in-iraq-20032008/>

<sup>9</sup> <https://www.pewresearch.org/fact-tank/2018/10/05/after-17-years-of-war-in-afghanistan-more-say-u-s-has-failed-than-succeeded-in-achieving-its-goals/>

#### 1.4. 『正義の戦士—美しき魂』のフレームと戦争

このように、戦争は依然として珍しい対外政策の選択肢ではない(Butler, 2012)。一方で、今日の世界では、戦争を本来的には望ましくない事象として語る事が多く、戦争の正当性を否定する考え方は、社会規範として普及している(Butler, 2012)。多数の死者が発生する戦争という選択肢は本来は望ましくないけれども、やむにやまれず軍事力を行使するというのが、多くの戦争の正当性を担保する語りであろう。

戦争は望ましくないものとして考えられることが多い一方で、生と死、正義と悪といった、人々の心の琴線に訴える魅力的なテーマに溢れる戦争は、古今東西において、無数の感動的な語りを生み出してきた(see Elshtain, 1987)。とりわけ、戦争は、男性を国家暴力の行使者として描き、女性を男性に対峙するものとして象徴的に描くことで、人々を魅了してきた(Elshtain, 1987)。ギリシャ神話から、第二次大戦時の『カサブランカ』といった映画に至るまで、戦争をめぐる語りは多くの人々の生活に染み込んできたし、今日の世界においても、戦争は多くの感動的な語りを生み出してきた。9・11時にビルにいた人々の命を自らの命と引き換えに救った人々、戦地で母国の自由のために命を落とした兵士など、9・11後の一連の戦争をめぐる感動的な語りは、枚挙にいとまがない<sup>10</sup>。

戦争をめぐる感動的な語りの中でも、とりわけ女性を保護するという大義が、軍事力の正当性に対して持つ影響力が、ジェンダー国際関係論者によって指摘されてきた(Elshtain, 1987; Sjoberg, 2010; J. A. Tickner, 2002)。具体的には、英雄的な男性が、無垢で脆弱な女性を悪の手から救うという語りが、戦争を正当化してきたことが指摘されている(Elshtain, 1987; Sjoberg, 2010; J. A. Tickner, 2002)。これらの先行研究を踏まえて、本研究では、『美しき魂—正義の戦士』によって戦争をフレームすることが、①世論の戦争に対する関心を高め、自国と他国をめぐる世論の世界観を形成し、さらには、軍事政策に対する世論の選好を高めたことを明らかにすることを目的とする。さらに、本研究では、②『美しき魂—正義の戦士』をめぐるフレームが、保護者が男性であり、被保護者が女性であるという、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに沿うことでより強い影響力を持つこと、また、フレームの影響力が、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに対する個人レベルの共感の強さに影響されることについても検証を行う。

---

<sup>10</sup> <https://www.wrbl.com/news/local-news/auburn-firefighters-climbing-3-world-trade-center-honoring-911-heroes/1970817691>  
<https://spectrumlocalnews.com/nc/charlotte/news/2019/04/28/hundreds-come-out-to-charlotte-climb-to-honor-9-11-heroes>  
<https://www.news-leader.com/story/news/education/2019/04/23/college-of-the-ozarks-memorial-global-war-terrorism-afghanistan/3310503002/>

## 1.5. 全体の構成

本研究では、まず、世論研究とジェンダー国際関係論研究の先行研究を振り返る。その上で、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、世論の戦争に対する関心、世論の自国と他国をめぐる世界観、世論の軍事派遣に対する選好に与えた影響をめぐる理論と仮説を提示する。加えて、フレームの影響力が、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに支えられてきたことをめぐる理論と仮説も提示する。その上で、『美しき魂－正義の戦士』をめぐる理論と仮説を、オンライン・サーベイ実験によって収集したデータを用いて実証する。

次章では、世論と戦争をめぐる先行研究を振り返る。戦争を人びとがなぜ支持してきたのかという問いは、多くの研究者の関心を集めてきた。定量的データを用いて実証を行った先行研究は、戦場で起こっている事柄、戦争をめぐる人々の認識、個々人が元来有する性質が、人々の戦争に対する支持に影響してきたことを解明してきた。第二章では、これらの先行研究を概観した後に、先行研究では説明しきれていない点について言及する。

第三章は、ジェンダー国際関係論分野の先行研究を振り返ることを目的とする。ジェンダー国際関係論は、勇敢な男性が無垢で脆弱な女性を救うという、『美しき魂－正義の戦士』をめぐる考え方が、戦争の正当性につながってきたことを明らみに出してきた。また、女性の軍隊への参入が、伝統的なジェンダー観念を覆すものとして、脅威をもって受け入れられたこともジェンダー国際関係論によって明らかにされてきた。第三章では、ジェンダー国際関係論の分析を概観した後に、ジェンダー国際関係論の限界と、本研究の意義に言及する。

第四章では、最初に、本研究で用いるフレーム理論をめぐる先行研究を概観する。その上で、ジェンダー国際関係論とフレーム理論の見地から、勇敢な男性が無垢で脆弱な女性を救うという『美しき魂－正義の戦士』と、軍事力の正当性の関係性をめぐる理論と仮説を提示する。最後に、本研究で利用するサーベイ実験の手法およびデータについても説明を行う。

第五章では、第四章で提示した理論と仮説を、オリジナルなサーベイ実験データを用いることで実証していく。第五章の目的は三つに分けられる。第一に、戦争に対する世論の関心の高まりに、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが貢献してきたことの解明を目指す。第二に、『美しき魂－正義の戦士』のフレームによって、味方である自国と敵である相手国を二項対立的にとらえる世界観が形成されやすくなったことを明らみに出すことを試みる。第三に、『美しき魂－正義の戦士』のフレームによって、世論が戦争に対し、より強い選好を見せるようになったことを明らかにする。検証の結果、後半の二点についてはデータの支持が得られた。一方で、戦争に対する関心という点ではデータの支持を受けられなかった。この原因についても考察する。

第六章では、「勇敢な男性が脆弱な女性を救う」というフレームの影響力が、保護者が男性であり、被保護者が女性であるとする、伝統的なジェンダー・ステレオタイプによって支えられてきたことを検証することを試みた。この過程で、本章では、二つの視座からジェンダー・ステレオタイプに影響力を観察した。第一に、フレームの中で描かれる保護者（兵

士)・被保護者(紛争地市民)の性別の組み合わせによって、フレームの影響力が変動するか否かを検討した。すなわち、保護者が男性であり、被保護者が女性であるという、社会に浸透したジェンダー・ステレオタイプに沿う形で戦争が語られることで、『美しき魂-正義の戦士』のフレームの世論に対する影響力が強くなるのか否かを検討した。第二に、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに対して強い共感を表す個人の間で、女性の保護をめぐるフレームの影響力がより強く見られやすいか否かを検証した。本章で扱った仮説は、一部を除きデータによる支持を受けることができなかった。その上で、本章では、仮説が実証されなかった原因についても言及を行う。

なお、本研究では有意性が見られなかった結果についても積極的に発表するが、これは、都合のいい結果のみを扱って仮説を実証することで、結論の科学的客観性や妥当性を損なうという事態を避けるためである。有意性が見られた結果のみを基準に論文投稿・査読を行い、有意差の出ない結果を発表しないことで、有意性が確認された結果の重要性が過大視されるという問題は、アメリカの政治学でしばしば議論の俎上に上がるテーマである。日本においても、都合のいい結果が出るまで分析を続けることの問題性、データの中の都合の良い部分のみを扱って有意差を導き出すことがデータの改ざんにつながる可能性をはらむこと、さらに、統計分析を行う以上は、有意性が見られない結果、すなわち仮説を実証できない結果についても受け入れる必要があることが、指摘されている<sup>11</sup>。データによって仮説が支持されなかった事実を受け止め、仮説を実証できなかった原因を究明し、今後の研究につなげていくプロセスを通して、本研究は先行研究に貢献することを目指す。

第七章では、第六章までの内容を総括する。その上で、本研究の今後の課題と展望を述べる。

---

<sup>11</sup> <http://www.hituzi.co.jp/hituzigusa/2018/04/02/toukei-2/>

## 第二章 戦争と世論

本章では、世論の軍事政策に対する選好の形成要因を分析してきた先行研究を振り返る。その上で、本章では、先行研究の限界と、本研究が、あえてジェンダー国際関係論の視角を導入する理由に言及する。ジェンダー国際関係論の先行研究については、次章で説明を行う。

### 2.1. 世論と戦争に対する支持に関する先行研究

世論が自身の選好を反映した形で政策選好を形成するの点については、研究者の間で意見が分かれてきた。Holsti (1992)は、第二次大戦後の世論研究の間では、①揮発性の高い世論、②構造と一貫性を欠いた世論、③対外政策に対し非常に限定的な影響力しか持たない世論、という、世論に対する見方をめぐってコンセンサスが形成されてきたことに言及している。その上で、Holsti (1992)は、このような世論の重要性を限定的なものであるとしてきた研究群に対して疑問を投げかける先行研究が近年増えてきたことを指摘している。そして、近年の研究により、世論が外交政策に対して影響力を持つことが明らかにされつつある (Baum, 2004; Baum & Potter, 2008; Foyle, 2006; Holsti, 1992; 観衆費用をめぐる議論については Miller, 2016 や Tomz, 2007 等を参照)。

こうした研究の後押しもあり、数多の世論研究者が、世論がどのようにして戦争に対する選好を形成するのかを追究してきた。これらの先行研究は、オンライン・サーベイ実験の実行や既にある世論調査の利用などによってデータを収集し、分析を行うことが主流であった。こうしたデータを用いた先行研究は、1. 戦場で実際に起こった出来事、2. 戦争の性質に対する人々の理解、3. 個人が元来持つ性質が、人々の戦争に対する選好に影響することを解明してきた。

#### 1.3.3. 戦場における出来事による影響

Mueller (2011)は、戦争は、『人類の最も理解が困難でない現象』<sup>12</sup>であると形容した。その上で、Mueller (2011)は、人々が、戦争に対して関心を払い、戦争をめぐる出来事を理解し、戦争をめぐる利害を評価していることに言及している。このように、戦争に対する世論

---

<sup>12</sup> humanity's least subtle phenomenon (p. 675)の筆者訳。

の一定の関心や理解を前提としたうえで、先行研究は、戦場で起こっている観察可能な事象が、世論の戦争に対する選好に影響してきたことを明らかにしてきた。

現実には戦場の出来事に焦点を当てた先行研究の中でも、半世紀近くにはわたって研究者の関心を集めてきたのは、Mueller (1973)が提示した死傷者仮説である。Mueller (1973)は、戦場における米国兵の死傷者数の対数と、世論の戦争に対する支持や反対が、正の相関関係を持つことを、朝鮮戦争とベトナム戦争の事例について示した。

この Mueller (1973)による自国の死傷者兵が世論に与える影響をめぐる死傷者仮説をベースとして、多くの先行研究が蓄積されてきた。たとえば、国内地域間あるいは階級間の死傷者の数の格差の度合い (Kriner & Shen, 2014)、(実際の死傷者数ではなく)死傷者の数に対する認識 (Myers & Hayes, 2010)、近年の死傷者および死傷者の数の増減の傾向 (Scott Sigmund Gartner, 2008b)、戦争における死傷者に対する個人的な関係性の有無 (Scott Sigmund Gartner, 2008c)、死傷者の数の増減の度合い (Scott Sigmund Gartner & Segura, 1998)、死傷者が自身の居住地域から派兵されたか否か (Scott Sigmund Gartner, Segura, & Wilkening, 1997; A. F. Hayes & Myers, 2009; Kriner & Shen, 2012)、死傷者に係るコストをどのようにフレームするか (Boettcher & Cobb, 2006, 2009)が、世論の対外派遣に対する支持に影響してきたことが明らかにされてきた。

とりわけ、Johns & Davies(2017) および Scott Sigmund Gartner (2008a) は、紛争地もしくは自国兵の死傷者の性別によって、世論の戦争に対する考え方が変わることを示した点で、重要な意義を持つ。Johns & Davies (2017)は、自国ではなく相手国の市民の死傷者の存在が、戦争の正当性に与える影響を明らかにしている。興味深いことに、Johns & Davies (2017)は、相手国の死傷者が、35 歳男性、35 歳女性、2 歳子どもの三つのカテゴリーのいずれかに属する場合、35 歳女性のカテゴリーが、世論の戦争に対する当惑を最も高めやすいことに言及している。言い換えれば、傷ついた紛争地の成人女性は、傷ついた紛争地の 2 歳の子どもの以上に、戦争の正当性に対する認識に影響を与えやすいことを、Johns & Davies (2017)は示唆している。また、Scott Sigmund Gartner (2008a) は、米国死傷兵が女性であることが、人々が注意を向けるに値する顕著な情報となる可能性に言及している。そして、その上で、毎月の死傷者の数がランダムであり、死傷者が増えているとも減っているとも言えない状況下において、死傷兵が女性であることが、世論の軍事介入に対する支持を低下させることにつながることを明らかにしている。

これらの先行研究は、戦場で起こった事象、もしくは死傷者数の認識などの戦場で起こったと思われる事象が、人々の対外政策をめぐる選好に影響を与えてきたことを確認している。一方で、これらの先行研究は、世論が、死傷者に関する情報に一定程度の関心を持ち、自国の死傷者数の概数を把握した上で、選好を形成することを前提としている。だが、世論の政治一般、とりわけ外交政策に対する関心の低さが、すでに多くの研究者によって指摘されている。Bennett & Flickinger (2009)は、2004 年から 2008 年にかけてのイラク戦争におい

ては、第二次世界大戦・朝鮮戦争・ベトナム戦争時と比べて、アメリカ人の自国兵死傷者をめぐる知識が、より正確になっていることを指摘している。だが、死傷者をめぐる知識が高まったとされるイラク戦争時においてさえも、死傷者の概数を正確に答えられたのは、全回答者の 50%から 60%に過ぎない(Bennett & Flickinger, 2009b)ことには注意が必要である。

Berinsky (2007, 2009)が指摘するように、世論の軍事紛争に関する知識は限られたものでしかないのである。また、Berinsky (2007)らが述べるように、世論の政治に対する関心の中でも、対外政策に対する関心がとりわけ低いことも看過できない。さらに、Gelpi, Feaver, & Reifler (2009)は、実験的手法を用いて戦争に対する支持を分析する中で、死傷者数をあらかじめ被験者に提示せずに実験を行った場合に、死傷者数に対する期待値は、世論の戦争に対する支持に影響を与えないことを明らかにしている。こうしたことから、本節の第三項でも述べるように、死傷者をめぐる知識という枠組みを超えた要素が、世論の戦争をめぐる選好に影響を与えた可能性を検討することの意義が浮かび上がってこよう。

また、Gartner (2008)や Johns & Davies (2017)は、兵士や紛争地市民の性別が、世論の態度に影響を与えたことを指摘している点で、著者の研究と関心が重なるものである。だが、本研究における関心は、アクターの性別にとどまらず、女性を保護するべきであるという社会の観念や、個人レベルのジェンダー・ステレオタイプにまで及ぶ。次章および次々章で詳しく述べるが、ジェンダーをめぐるより広い観念を分析の対象とした点に、本研究の意義を求めることができよう。

## 2.1.2 戦争に対する認識の仕方による影響

戦場での出来事による影響に焦点を当てた先行研究に対し、人々の戦争に対する認識が、戦争をめぐる選好に影響を与えてきたことを検証した先行研究が存在する。これらの先行研究は、①戦争の目的や性質に対する理解、②戦争をめぐる情報をどのように提供するか、③戦争をめぐる他アクターがどのような立場をとっているかという三点が、世論の対外政策に対する選好に影響することを示してきた。

第一に、戦争の目的や性質をどのように理解するのかによって政策選好が異なることを明らかにしてきた先行研究群が存在する。戦争の目的が、攻撃的な国家に対して外交上の抑制を行使することにあるのか、それとも相手国の内部体制の変容を促すものであるのか (Jentleson, 1992)、戦争の目的が、人道的介入・相手国の内部体制の変容・制約的外交政策のいずれかであるか (Jentleson & Britton, 1998; Oneal, Lian, & Joyner, 1996)、戦争が成功であると認識されるか否か (Gelpi, 2010; Gelpi, Feaver, & Reifler, 2006; Gelpi, Reifler, & Feaver, 2007; Gelpi & Reifler, 2008)、戦争の目的が損失を防ぐものであるか、あるいは新たに何かを獲得しようとするものであるか (Perla, 2011)、軍事力を撤退することに係るコストがどの程度

なものなのか (Sullivan, 2008) が、対外軍事派遣に対する支持に影響を与えることを明らかにしてきた。

とりわけ、Gelpi, Feaver, & Reifler (2009)は、軍事行動が成功しそうであり、かつ、軍事行動の開始が正当なものとして受け容れられたならば、戦争における死傷者を受け入れやすくなるとした点で、それまでの死傷者数を中心に置いた仮説とは一線を画す。さらに、Gelpi, Feaver, & Reifler (2009)は、軍事行動の正当性は、軍事派遣開始以前の事柄に対する個人の信念によって決定づけられていること、また、成功という概念は、将来に対する個人の予測によって定義づけられており、それまでの死傷者数とは独立した概念であることに言及している。

第二に、世論の戦争に対する理解が、戦争をめぐる情報がどのような形で世論に提供されるかという点に左右されることも、先行研究によって指摘されてきた。とりわけ、従来の政治的関心の低い層の、政治的関心(Baum, 2002, 2005)や政治的知識の高まり(Baum, 2003)、政治的態度や政策選好(Baum, 2005)に貢献したニュースの形態として、ソフト・ニュース<sup>13</sup>の重要性に焦点を当てた一連の研究がおこなわれている。これらの研究は、伝統的なニュース媒体に対して、オプラ・ウィンフリー<sup>14</sup>によって提供された情報に代表されるように、センセーショナルで理解の容易な形でフレームされた情報が、政治的関心の低い層の政治的知識や政治的関心の構築に貢献したことを指摘している。

また、前節でも指摘したように、戦時の死傷者のフレームの仕方が、世論の戦争に対する支持に影響することも指摘されている(Boettcher & Cobb, 2009)。たとえば、自国兵の死傷を「投資」としてフレームするか否か<sup>15</sup>によって、自国の死傷兵の数に対する耐性の度合いや金銭的成本に対する受容の度合いが変容することが指摘されている(Boettcher & Cobb, 2009)。

第三に、他アクターが戦争をどのようにとらえるのかによって、世論の選好が変容することを指摘する先行研究が存在する。たとえば、国連や同盟国といった国外のアクター

---

<sup>13</sup> ソフト・ニュースは、「情報と娯楽の境を曖昧にするジャーナリズムのスタイルやジャンル」であり、「個人に焦点を当てた広範囲におよぶメディアのアウトレット」であり、「個人的な感情や経験に焦点を当てたストーリーや著名人に焦点を当てる」ものであるとされる。これに対してハード・ニュースは、「最近の事象や出来事を、ローカル・リージョナル・ナショナル・インターナショナルな重要性を持つものとして位置付ける」ことが指摘されている (Encyclopedia Britannica: <https://www.britannica.com/topic/soft-news>)。

<sup>14</sup> 1986年から2011年にかけて、The Oprah Winfrey Showにおいて、Oprah Winfreyは、トークショーのクイーンとして、様々なファッションやライフスタイルを人々に伝えた (<https://www.investopedia.com/terms/o/oprah-effect.asp> / <https://www.biography.com/media-figure/oprah-winfrey>)。

<sup>15</sup> 同研究は、「死者を称え、彼らの死を無駄にしないこと (p. 685)」を目的として戦争を続けることを説明するフレームを通して、投資フレームの効果を明らかにしている。

(Brooks & Valentino, 2011; Guardino & Hayes, 2017; D. Hayes & Guardino, 2011)、社会的な同胞 (social peers; Kertzer & Zeitzoff, 2017)、政党(Baum & Groeling, 2009; Guardino & Hayes, 2017)の動向や、政治的リーダーの間にコンセンサスが存在するか否か(Berinsky, 2007; Larson, 1996)が、世論の対外軍事派遣に対する支持に影響を与えてきた。とりわけ、Berinsky (2007)は、世論が自身の性向を把握しているという前提の下で、個人が戦争に関する世論を形成するために、エリートの立ち位置を参照点として利用していることに言及している。

これらの先行研究は、戦場で実際に起きた出来事にとどまらず、戦争をめぐる人々の理解が、戦争に対する選好を形成してきたことを指摘した点で重要な意義を持つ。一方で、Baum (2002, 2003, 2005)が、世論が日常的に関心を持つセンセーショナルなニュース媒体によって、世論の政治的知識や関心に変容することに言及しているものの<sup>16</sup>、戦争をめぐる理解に焦点を当てた先行研究は、多くの場合、戦争の目的や戦争に対するコストといった概念が、どのように人々の文化的背景と関係しているのかという点については、関心の外に置いている。だが、前節でも言及したように、政治的知識に限りがある世論の選好を、政治的事象に対する選好という枠内のみで分析することには限界がある。次章で詳述するジェンダー国際関係論も述べるように、軍事力をめぐる人々の認識と社会における観念は、複雑に絡み合ったものであるためである。このことから、社会観念が、世論の戦争に対する考え方にどのように影響したのかを明らかにする重要性が浮かび上がってくる。

### 2.1.3 個人の性質の影響

戦場での出来事や戦争がどのようなものとして捉えられるのかといった、個人と個人に外在する事象の関係性に焦点を当ててきた先行研究に対し、個人が元来有する性質が、対外政策に対する選好に影響を与えてきたことを数多くの先行研究が明るみに出してきた。たとえば、リスク選好型であるか否か (Eckles & Schaffner, 2011; Kertzer, 2016)、孤立主義と国際主義のどちらの立場をとるか (Herrmann, Tetlock, & Visser, 1999)、保守主義性向、開放性、セルフ・エンハンスメント性、セルフ・トランセンダンス性であるか否か (Rathbun, Kertzer, Reifler, Goren, & Scotto, 2016)といった個人の性質、名誉指向性 (Kertzer, 2016)、自己制御指向性 (Kertzer, 2016)、神経症傾向・外交性・開放性・協調性・誠実性で構成されるビッグ・ファイブ (Schoen, 2007)、不安性 (Huddy, Feldman, Taber, & Lahav, 2005)、権威指向性 (Gelpi, Roselle, & Barnett, 2013; Hetherington & Suhay, 2011)、党派性(Aday, 2010)といった要素が、個々人の対外軍事派遣に対する支持の程度に影響することを解明している。

---

<sup>16</sup> 本研究では、Baumらの先行研究に焦点を当てた理論構築を行うが、これらの先行研究については、第四章でフレーム理論について述べる際に詳説する。

さらに、個人レベルの性質と、戦争に関する外部からの情報の間の双方の要素によって、個人が戦争をめぐる選好を形成してきたことを、先行研究は明らかにしてきた。たとえば、軍事主義や軍隊に対するイメージ (Scott S. Gartner, 2011)、権威主義的な傾向と脅威認識 (Hetherington & Suhay, 2011)、個人的な性向と地政学的な文脈 (Herrmann et al., 1999)、左翼・右翼の軸に基づいた権威主義的傾向と愛国心に関するイメージ (Gelpi et al., 2013)、個人レベルの決意 (時間とリスク選好、名誉性向、自制傾向) と情況的要素 (戦うコスト、あるいは撤退するコスト) (Kertzer, 2016) などが、対外軍事派遣の支持に影響することが、確認されている。興味深いことに、他の領域の争点とは異なり、外交政策においては、党派性 (Baum, 2002) や自由-保守といった軸 (Herrmann et al., 1999) が大きな影響を及ぼさないとする研究結果がある。その一方で、Rathbun et al. (2016) は、保守的傾向が、外交政策態度に強い影響を及ぼすことを明らかにしている。

2.1.1 および 2.1.2 の両節で概観した先行研究が、対外政策をめぐる世論と対内政策をめぐる世論を切り分けて考える中で、Berinsky (2009) は、両者を同一軸で語る事が可能である点に言及している。この上で、人種的ステレオタイプの影響力に焦点を当てた研究 (Kam & Kinder, 2007; Sides & Gross, 2013) は、日常生活に普及した社会観念を個人が内面化することで、世論の政策選好に影響を与えたことを示した点で、非常に興味深い。また、Berinsky (2009) によれば、国内のグループに対する敵意や親しみやすさは、国内社会における政治的態度のみならず、戦時の外交政策をめぐる対外政策にも影響する。とりわけ、国家間対立の発生前から国内社会に存在する人種的ステレオタイプやアウト・グループに対する態度が、対立発生時における世論の対外政策選好に影響を与えたことが、すでに明らかにされている (Berinsky, 2009; Kam & Kinder, 2007)。すなわち、国内に存在する「我々対彼ら」 (例: 国内の自グループ対イタリア系移民) の構図が、諸外国を見る時の「我々対彼ら」 (例: アメリカ対イタリア) の構図に反映され、世論の「彼ら」 (他国) に対する政策選好に影響を与えることが明らかにされている。

これらの先行研究は、世論を一枚岩の存在としてとらえるのではなく、個人の性向や社会観念に焦点を当てた点で、よりニュアンスに富んだ世論の政策選好を描き出しているといえよう。とりわけ、人種的ステレオタイプをめぐる先行研究は、社会に普及した観念が、世論の戦争をめぐる選好に影響したことを指摘した点で、日常生活と戦争を同一線上で分析した興味深い先行研究であるといえよう。一方で、これらの先行研究は、人々の日常生活に浸透したジェンダー観念に対しては特段の関心を払ってこなかった。だが、次章でも述べるように、ジェンダー観念は、人々の日常生活に強力に浸透した社会観念の一つである。この潮流に与する形で、本研究では、今まで特段の注目を集めてこなかった、ジェンダー観念という、人々の日常生活に浸透した社会観念による影響を検討する。

## 2.2. 小括

先行研究は、戦場における出来事、戦争をめぐる世論の理解、個人の性向や社会観念が、世論の戦争をめぐる選好に影響を与えてきたことを明らかにしてきた。

2.1.1 および 2.1.2 の両節で概観した先行研究は、多くの場合、世論の政策選好と日常生活における選好を、別軸のものとしてとらえてきた。だが、多くの人々は通常、日常生活を送ることに忙しく、政治的事象に大きな関心を払わない。たとえ政治的事象に大きな関心を払う人々であったとしても、ハイポリティクスの事象が、自身の日常生活での出来事以上に、大きな関心事となることは非常に稀であろう。そして、個々人の利害に直結した、日々の家庭生活や仕事生活の中で起こる事柄が、ニュースの中の国会や戦争よりも身近で重要度の高い事柄となることは、ごく自然なことである。こうした中で、2.1.3 で見たように、個々人のパーソナリティや人種的ステレオタイプといった、個人の政治的生活という狭い枠組みを超えた、日常生活における判断の傾向に焦点を当てた選好研究は、日常生活における判断軸と政治生活における判断軸を、同一線上に置いた分析を行った点で、大きな意義を持つ。

このように、政治的領域、あるいは公的領域と私的領域の両領域における判断を同一軸で語る先行研究に、本研究は貢献することを目指す。そして、本研究では、日常生活に流布する多様な観念の中でも、先行研究ではあまり着目されてこなかった、男性性と女性性をめぐる観念、および勇敢な男性による女性の保護をめぐる社会観念に焦点を当てる。次章で詳細に述べるように、ジェンダー観念は、日常生活に色濃く浸透した観念であり、かつ、人々の軍事行為をめぐる認識と切っても切り離せない関係にあるためである。本研究を通して、日常生活の男性性と女性性をめぐる考え方や、女性の保護をめぐる考え方が、世論の戦争をめぐる考え方を変容させたのか否かを検証する。

### 第三章 『美しき魂－正義の戦士』のフレームと女性の軍事領域への進出

前章では、戦争をめぐる世論の選好の起源を究明してきた先行研究を概観した。本章では、世論研究とは異なる視角から、世論の選好を分析してきたジェンダー国際関係論に焦点を当てる。ジェンダー国際関係論は、社会に浸透したジェンダー観念が、戦争の正当性に影響を与えてきたことを指摘してきた研究分野である。

本章では、最初に、「勇敢な男性が脆弱な女性を保護する」という『美しき魂－正義の戦士』をめぐる考え方が、軍事力の正当性につながることを明らかにしてきた一連の研究を概観する。そして、その上で、女性軍人をめぐる一連の研究を概観し、女性の社会進出が進んだ今日においてもなお、男性兵士と女性兵士が異なる形で社会にとらえられていることに言及する。本章の内容を踏まえて、次章では、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、戦争の正当性を高めてきたこと、また、フレームの影響力が、保護者が男性であり被保護者が女性であることに支えられてきたことをめぐる理論と仮説を提示する。

#### 3.1. 『美しき魂－正義の戦士』<sup>17</sup>と戦争

数十年前と比べて、今日では、軍事対立における肉体的力の重要性が限定的となってきたことは、多くの人びとが賛同するところであろう。技術革新により、ロボットや人工知能など、非肉体的力による戦闘手段の重要性が以前と比べて高まりつつあるためである。だが、今日においても、古代と同様、依然として軍事領域が男性的な領域として人々に認識され、また、男性によって担われることが社会通念化しているかに見える。

軍事領域が当然のように男性的な領域としてとらえられていることを問題化したのが、ジェンダー国際関係論である。ジェンダー国際関係論は、男らしさや女らしさといった、日常生活に浸透した人々のジェンダー観が、軍事力の存在や軍事力行使の正当性と深いかかわりにあることを明らかにしてきた(Enloe, 1993, 2000; Tickner, 2010 等)。ジェンダー国際関係論によれば、軍隊が女性性を劣位に置くとともに男性性を凝縮させた組織であること、また、男性が女性を保護するべきであるとする大義が、軍隊や対外軍事派遣の正当性につながってきた(C. Enloe, 1993, 2000; J. A. Tickner, 1992)。そして、ジェンダー国際関係論は、この女性の保護をめぐる考え方の背景には、「無垢で脆弱な女性を勇敢な男性が救う」べきであるとする、『美しき魂－正義の戦士』(Elshain, 1987)をめぐる考え方が存在することを明らかにしてきた。

---

<sup>17</sup> ジーン・ベスキー・エルシュテイン著、小林史子・広川紀子訳(1994)『女性と戦争』法政大学出版局より訳を引用。原典では「Beautiful Souls/Just Warriors」と述べられている(Elshain, 1987)。

男性性と女性性をめぐる観念は、人々の幼少期からの日常生活に浸透した価値観であり、人々の政治的態度に強い影響を与えてきたとされる (McDermott, 2016)<sup>18</sup>。男性性と女性性をめぐる観念は、文化的・時代的な文脈に依存するものだが、西洋世界では総じて、男性性は、権威主義 (Cockburn, 2000)、闘争性 (Cockburn, 2000)、攻撃性 (McDermott, 2016)、競争性 (McDermott, 2016)、リスク傾向 (McDermott, 2016)、強制的傾向 (Cockburn, 2000)、身体的強さ (Goldstein, 2003)、忍耐力 (Goldstein, 2003)、強さ (Enloe, 2007; Goldstein, 2003; Tickner, 1992)、技術 (Goldstein, 2003)、名誉心 (Goldstein, 2003)、戦略的・合理的思考 (Enloe, 2007; Tickner, 1992; Tickner, 2002)、権力 (J. A. Tickner, 1992, 1997, 2002)、自律心 (J. A. Tickner, 1992, 1997, 2002)、独立性 (McDermott, 2016; J. A. Tickner, 1992)、積極性 (Tickner, 2002)、公的領域 (J. A. Tickner, 1997, 2002) といった要素とステレオタイプ的に結びつけられて考えられてきた。そして、こうした男性性と対峙される観念として、女性性は、弱さ (J. A. Tickner, 1997)、依存性 (J. A. Tickner, 1997)、感情 (J. A. Tickner, 1997)、私的領域 (J. A. Tickner, 1997)、従属性 (Cockburn, 2000)、支援性 (Cockburn, 2000)、養育 (Cockburn, 2000)、弱さ (Tickner, 1992; 2002)、恐れ (Tickner, 1992)、優柔不断性 (Tickner, 1992)、依存性 (Tickner, 1992; 2002)、感情 (Tickner, 2002)、消極性 (Tickner, 2002)、私的領域 (J. A. Tickner, 2002)、優しさ (McDermott, 2016)、情緒性 (McDermott, 2016)、同情性 (McDermott, 2016) といった要素と結びつけられてきた。こうした男性性と女性性の関係は相互依存的で、男性性という観念は女性性でないことによって担保され、また女性性という観念は男性性でないことによって担保されてきた (J. A. Tickner, 1997)。また、女性性と男性性は、決して価値中立的な観念ではなく、男性も女性もともに、女性性以上に男性性に対して肯定的な立場を示してきた (J. A. Tickner, 1997)。

こうした二項対立的なジェンダー観に基づき、西洋世界では、戦時において、女性と男性は全く異なるアクターであると考えられてきた。Elshtain (1987) は、Hegel が *The Phenomenology of Spirit* (1998) の中で言及した「美しき魂 (Beautiful Soul)」に着目した上で、『美しき魂』は、世界の在り方をめぐる、道徳的な拘束力を持つ純潔を生み出す役割を果たすと述べている<sup>19</sup>。この上で、Elshtain (1987) は、こうした『美しき魂』の概念は、西洋世界においては、とりわけ女性について当てはめて考えられてきたことを指摘している。Sjoberg (2010) によれば、この『美しき魂』をめぐるナラティブは、女性は男性以上に平和的であり、戦争の構築と戦争における戦闘<sup>20</sup>から遠ざけられた私的領域に属することを含意している。そして、Elshtain (1987) が詳細に述べているように、『命を与える者 (女性) ー

<sup>18</sup> 著者は国内政治を専門とする研究者だが、男性性と女性性が人々の政治的態度に与えた影響を明らかとした点で、本研究にとって示唆的である。

<sup>19</sup> *Elshtain (1987)*, p. 4.

<sup>20</sup> それぞれ war-making と war-fighting の訳。

命を奪う者（男性）』<sup>21</sup>という構図は、多くの戦争を特徴づけてきた。男性は暴力や戦争と結びつけられる一方で、『美しき魂』を持つとされる女性は、平和や養育といった要素と関連づけられてきた（Elshtain, 1987; Pettman, 1996; Yuval-Davis, 1997）。戦いと結びつけられるといっても、男性兵士は無目的に暴力をふるう存在として描かれてきたのではない。彼らは、節度のある正義を目的とした『正義の戦士』として描かれた（Elshtain, 1987）。同時に、『美しき魂』を持つ女性は、集合体としての文化を代表し、価値や伝統を伝える存在として、適切な振る舞いをするのが求められた（J. A. Tickner, 2002; Yuval-Davis, 1997）。

ジェンダーをめぐる多くの考え方のなかでも、戦争の正当性に大きく寄与してきたのが、女性を保護するという大義である（Elshtain, 1987; Pettman, 1996; Sjoberg, 2010; A. Tickner, 2010; J. A. Tickner, 2004; Wilcox, 2009; Young, 2003; Youngs, 2006）<sup>22</sup>。戦時には、『美しき魂－正義の戦士』という二項軸が顕著になり、戦うことを求められる男性と、闘いから遠ざけられた女性という考え方が顕著になってきた（Elshtain, 1987）。その結果、軍隊の主体はもっぱら男性であると同時に（Nantais & Lee, 1999）、戦争を担うのは男性であるという前提が当然視された（Sjoberg, 2014等）。他方で、女性は、自ら戦闘に参加するのではなく、戦地から離れた場所で無垢な『美しき魂』を守ることを期待された（Wilcox, 2009）。こうした女性は、戦争の理由（a reason to fight in war, p. 9）となってきた（Sjoberg, 2010）。そのため、今日に至るまで、『脆弱』で『無垢』であり、敵からの特別な保護を必要とする社会的集団として認識されてきた女性（Carpenter, 2003, 2016; Sjoberg, 2010等）を守るために、社会のほとんどを占める、本来は戦地へ赴きたくない男性は戦場へと向かい、『英雄的』に命を落としてきた（C. Enloe, 2000; Sjoberg, 2010; A. Tickner, 2010）。また、『脆弱』で『無垢』であるとされる女性（Elshtain, 1987; Sjoberg, 2010; Wilcox, 2009等）は、戦地で役割を果たすことを求められなかったが、その反面、女性の行為主体性は、戦争においてとるに足らない存在だとされてきた（Shekhawat, 2015）。（Elshtain, 1987）。『女子ども』という戦時によく利用されるフレーズは、女性と未成年者である子どもが、同等の犠牲者として同様にとらえられてきたことを象徴的に示そう（Kaufman, 2016）。

女性は脆弱で無垢な存在としてとらえられてきたが、伝統的なジェンダー観に沿った戦争は、男性のみによって支えられてきたわけではない。男女の役割分担に支えられた戦争は、女性を保護することを目的とした男性の英雄的行為を称える女性によっても支持されてきた（Elshtain, 1987; Goldstein, 2003; Young, 2003）。戦争における英雄は男性であり、犠牲者は女性であるという構図は、男女を問わない多くの人々に受け容れられ（Dowler, 2002;

---

<sup>21</sup> ジーン・ベスキー・エルシュテイン著、小林史子・広川紀子訳（1994）『女性と戦争』法政大学出版局より訳を引用。弧内は筆者が加筆したもの。

<sup>22</sup> Tickner (2010)は、「脆弱な」集団に属する女・子どもを守るという目的で戦争が行われるという「神話」にも関わらず、女・子どもは近年の死傷者のかなりの部分を占めていると指摘している（p. 49）。

Youngs, 2006)、戦争をめぐる人々の考え方を作り上げてきた。女性が直接戦場に赴くことは少ないかもしれないが、女性は、愛国主義的な母や妻として軍事化に貢献することで、第一級市民とまでとはいかないとしても、それなりの社会的地位を保ってきたのである(C. Enloe, 1993)。一方で、改めて言及するまでもなく、場合によっては、母親たちは息子の派兵や戦争に対して反対の立場を示した(C. Enloe, 2000)。こうした母親たちを懐柔し、息子である男性たちの入隊を促すために、第一次大戦下では兵士の母親に対して参政権が与えられた(C. Enloe, 2000)。

また、『美しい魂－正義の戦士』をめぐる考え方は、敵国の女性も保護の対象の「美しい魂」に含めて考えることで、自国と他国を味方と敵として考える、『我々対彼ら』<sup>23</sup>の世界観を強化する役割を果たしてきた。たとえば、1990年代初頭の湾岸戦争時において、米国の啓蒙された男性性(enlightened masculinity)とムスリム女性を抑圧する湾岸地域の対比は、「自己(self)」と「他者(other)」の区分を引いたうえで、自国を危険な世界における平和な場所として語る役割を果たした(Tickner, 2010)。さらに、Cloud (2004)は、2001年から2002年にかけてのアフガン戦争においても、アフガン女性を救うという「白人男性の責務(white man's burden)」が、現代的な西洋世界と野蛮なアフガニスタンなどの、相対する自己対他者という二分法を構築したことを指摘している。そして、アフガン戦争において、脆弱な女性を守るために戦争を行うという論理は、戦争の正当化につながったことが指摘されている(Cloud, 2004; Hunt, 2010)。

これらの先行研究は、それまでの世論研究でほとんどの場合看過されてきたジェンダー観念が、軍事力の正当性に与える影響を分析した点で、世論の戦争をめぐる選好を究明する研究群に新たな視座をもたらすものである。一方で、これらの先行研究の多くは、科学主義や客観主義に異議を唱え、個々の事象や時代、地域の文脈を踏まえた上での分析を重視してきたことから、言説分析や歴史分析といった手法による分析を行うことが多かった。その結果、異なる手法を用いて分析を行う伝統的な国際関係論研究との間に分断が起り、伝統的な国際関係論研究に対する貢献は限られたものとなってきた(Mary Caprioli, 2004)。本研究では、伝統的な世論研究で用いられてきた手法を用いて、『美しい魂－正義の戦士』をめぐる考え方が世論に与える影響を解明することで、ジェンダー国際関係論の視座を伝統的な国際関係論研究に導入することを目指す。

---

<sup>23</sup> 戦時に『我々対彼ら』という考え方が顕著になることは、ジェンダー国際関係論のみならず、さまざまな分野で指摘されている。Merskin (2004)は、9・11後に、G. W. Bushが、『我々対彼ら』という二分法的な考え方を利用したことに言及している。そして、Powell (2011)は、9・11後の『我々対彼ら』や『米国対イスラム』といった考え方が、テロに対する恐怖をムスリムとつなげることに寄与したことに言及している。

### 3.2. 女性の軍事領域への参入

次章で見るように、本研究では、女性の保護をめぐる観念が対外軍事派遣の正当性に与える影響を見ることに加えて、保護者は男性、被保護者は女性であるべきだとする伝統的なジェンダー・ステレオタイプにより、女性の保護をめぐる観念の影響力が変容する可能性にも目を向ける。本節では、伝統的に男性的領域とされてきた軍事領域に進出した女性が、人々にどのようなとらえられてきたのかを概観する。

女性保護の規範に即した戦時の性別役割分担のため、戦闘行為や暴力行為に関与した女性は、その数に見合わない大きな注目を集めてきた（女性自爆テロリストに対するメディアの注目については、Gonzalez-Perez (2011)、Speckhard (2008)、Yarchi (2014)を参照。イラク戦争における女性兵士に対するメディアの注目については、Sjoberg (2007)を参照)。たとえば、ニューヨーク・タイムズ誌では、イラク戦争時に捕虜となった女性兵であるジェシカ・リンチが、「ブッシュ政権のプロパガンダと、そのプロパガンダを買った報道の軽信の象徴」となったことが報道された(Rich, 2003)。また、同じくニューヨーク・タイムズ誌の中で、Moss, (2005)は、自爆テロによって米国の男性兵三名と女性兵三名がイラクで殺された際に、「三人の女性にとって地獄に終わったミッションに対する厳しい見方」と、女性兵に焦点を当てたタイトルをつけ、本文でも女性兵に焦点を当てている。

学術界でも、暴力行為に従ずる女性は、暴力行為に従ずる男性とは全く異なる形でメディアに語られてきたことが指摘されている。とりわけ、戦闘における女性の合理性や行為主体性は否定され、女性の戦闘行為は大多数の女性の生来の性質に反する奇異なものにとらえられるか、あるいは平和的で人道的な理由に基づくものだと考えられてきた (AAhäll, 2012; Sjoberg, 2007, 2010; Sjoberg & Gentry, 2007, 2008)。また、女性のテロリストや軍人将校に関するメディアの報道は、テロリストや将校のパーソナルな側面に焦点が当たる傾向にあったことが明らかにされている (Nacos, 2005; Sjoberg, 2007; Yarchi, 2014)。一方で、先行研究によって、女性も男性と同様に、合理的判断や行為主体性に基づいて、戦闘行為や暴力行為に従事してきたことが示されている (Brown, 2014; O'Rourke, 2009; Sjoberg & Gentry, 2007; Speckhard, 2008)。

女性戦闘員と男性戦闘員に対する社会の異なる評価は、国内社会における不平等なジェンダー関係の正当化につながってきた。国民国家の時代においては、国のために敵と戦って死ぬことが、第一級市民の地位を象徴的に示すと考えられてきたためである (C. Enloe, 2016; Sato, 2004; Snyder, 2003; J. A. Tickner, 2004)。裏を返せば、国家のために戦わない者は、二級市民の地位にとどまることを余儀なくされてきた(Elshtain, 1987; Steans, 2013; 佐藤, 2004)。こうした現状に異議を唱えるために、全米女性連盟は、女性が戦地で戦う権利を求めてきたのである (Steans, 2013)。そして、21世紀において、女性兵士は、自国のために死ぬことのできる『現代的な女性』として、象徴的な地位を占めるようになった (C. Enloe, 2016)。

近年の米国における女性の軍事領域の進出の背景には、男女平等という社会規範の浸透に加えて、1973年の徴兵制廃止<sup>24</sup>が存在する。徴兵制から志願制へ移行する中で、軍人の採用確保が困難となり、人材のプールを広げる必要が生じたことから、軍事領域への女性の進出の必要性が高まったのである（Carreiras, 2015; Eager, 2016）。<sup>25</sup>Quenqua (2008)は、ニューヨーク・タイムズの中で、長年の不人気な戦争によってリクルーティングに苦しむ海軍が、女性読者をターゲットとして、リクルーティングのマーケティングを行ったことに言及している。

しかし、軍隊における女性のニーズが高まったのにも関わらず、女性の軍事領域への参入は、従来の軍隊の男性性の在り方そのものを覆しうるものとして、非常に慎重に行われてきた(C. Enloe, 1993, 2000)。軍事領域への女性の参入が女性性の変容につながることへの懸念があった上に（C. Enloe, 1993）、従来の均質的な男性集団の結びつきが、軍隊の効率性につながってきたという認識があったためである（Carreiras, 2015; Eager, 2016; Haring, 2013; Segal & Hansen, 1992）。また、女性が戦争捕虜となる懸念も、女性の軍事領域への参入に反対する人の論拠となった(Nantais & Lee, 1999b)。自国の女性兵が戦争捕虜となることは、保護者が保護者としての役割を果たせなかったことを示し(Nantais & Lee, 1999b)、世論の戦争に対する支持を低下させることにつながるとされた(Nantais & Lee, 1999b)。

このような懸念にも関わらず、1991年の湾岸戦争では、女性兵が湾岸地域に派兵された。米国軍人の6.8%を女性が占めると同時に（Nantais & Lee, 1999）、13人の女性軍人が亡くなり（Jacinto & ABC.com, 2006）、米国は初めて女性兵の戦争捕虜を経験した(Nantais & Lee, 1999b)。しかし、湾岸戦争終了後は、戦争捕虜となるリスクから、女性軍人の戦闘領域からの排除が再び制度的に保証された(Nantais & Lee, 1999a)。近年、女性の参入が軍隊の効率性を害しないという議論もされているものの（Carreiras, 2015）、Defense Department Advisory Committee on Women in the Servicesが1989年にすでに推奨していた軍隊内女性へのすべての職域開放（Eager, 2016）が実現したのは、四半世紀後の2015年のことである(Rosenberg & Philipps, 2015)。そして、2016年時点においても、軍隊のActive soldierの約8割以上は、男性で占められている<sup>26</sup>。

軍隊への女性の進出をめぐるには非常に慎重な検討が行われてきたが、一方で、女性の軍事領域への進出が、軍事領域そのものの体質を変えたとする立場に対しては、否定的な見解が目立つ。軍隊に進出した女性は、イラク戦争時の文化支援部隊が行った情報収集の任務に代表されるように、女性的な役割を担うこと求められるか（Lemmon, 2015）、もしくは、男性と同等の価値を持つ『名誉男性』として扱われてきたためである（A. King, 2016; A. C.

---

<sup>24</sup> [https://www.army.mil/article/106813/july\\_marks\\_40th\\_anniversary\\_of\\_all\\_volunteer\\_army](https://www.army.mil/article/106813/july_marks_40th_anniversary_of_all_volunteer_army)

<sup>25</sup> Yuval-Davis (1997) は、米軍における女性の軍事領域への進出は、女性の市民権の向上の表れとなる以上に、軍事任務が、市民としての義務から職へと変容したことを示すことを指摘している。

<sup>26</sup> <https://www.cfr.org/article/demographics-us-military>

King, 2015; Sato, 2004)。言い換えれば、女性軍人は、既存のジェンダー関係を変革する以上に、軍隊の既存のジェンダー権力関係に吸収されてきた面が強かった (Sasson-Levy, 2003; Yuval-Davis, 1997)。湾岸戦争時に、女性兵は、兵士としてだけでなく、乳幼児に別れを告げて戦場に向かう母親兵士として描かれた(Pettman, 1996a)。イラク戦争時においても、戦争捕虜となったジェシカ・リンチをめぐる報道に代表されるように、たとえ戦地に赴いたとしても、女性軍人はあくまで、男性の保護を必要とし、女性的な性質を備えた存在として認識されてきた (Sjoberg, 2010)<sup>27</sup>。理想的な女性兵士とは、「タフでありながら暴力的ではない、勇敢でありながら防衛を必要とする、熟練していながら美しい」存在なのである (Sjoberg, 2007, p. 98)。

### 3.3. 小括

本章では、ジェンダー国際関係論の先行研究を、二つの視角から概観した。第一に、男性性および女性性という観念、とりわけ『美しき魂－正義の戦士』をめぐる考え方が、軍事力の正当性と絡み合ってきたことを概観した。第二に、伝統的な女性保護の観念から外れる女性兵士の存在が、軍隊の正当性にとって脅威となる可能性を持っていると考えられたことや、女性軍人の進出が進んだ今日においても、女性軍人は伝統的なジェンダー関係の語りに吸収されてきたことを見た。

『美しき魂－正義の戦士』をめぐる考え方が、軍事派遣の正当性に与えた影響は、すでにジェンダー国際関係論分野において議論が重ねられている。それにもかかわらず、本研究が、実験データを集め、定量分析を行うことで、同一の問いの検証を試みるのは、ジェンダー国際関係論と伝統的な国際関係論の間に横たわる分断を架橋することを目指すためである。すでに本章でも言及したように、ジェンダー国際関係論の『美しき魂－正義の戦士』をめぐる考え方に着目した研究は、時代や地域、事象毎の文脈を重視するという意図から、言説分析などの手法を用いることで示してきた。その結果、ジェンダー国際関係論は、戦争の正当性の起源を明らかにするという同様の目的を持ちながら、定量的な手法や実験的手法を用いた伝統的な世論研究との共通言語による対話は目的の外に置いていた<sup>28</sup>。

---

<sup>27</sup> 戦争報道におけるジェンダーを分析した Harp, Loke, & Bachmann (2011)は、女性の報道者が増加したのにも関わらず、女性の経験は報道に表れてこないことを指摘している。

<sup>28</sup> Caprioli (2005)は、フェミニスト国際関係論が、定量的手法を重視してこなかったことに言及した上で、伝統的な国際関係論とフェミニスト国際関係論の間には断絶が存在してきたことに言及している。その上で、著者は、両者が共通言語を用いて話すことの重要性を指摘している。

他方で、第二章ですで見たとように、世論研究分野では、ジェンダー観念に焦点を当てた分析が十分に行われてこなかった<sup>29</sup>。しかし、本章で振り返ったジェンダー国際関係論が繰り返し述べているように、戦時において、男性性や女性性をめぐる観念は、最も先鋭化する、もしくは顕在化する観念の一つと言えよう。本研究では、重要性が大きいとされてきたジェンダー観念に焦点を当てることで、世論研究に貢献することを目的とする。同時に、ジェンダー国際関係論分野でしばしば看過されてきた、実験手法・定量手法を用いることで、ジェンダー国際関係論の多様化と、ジェンダー国際関係論と既存の国際関係論の架橋を試みる。

本章で概観した先行研究の内容を踏まえて、次章では、『美しき魂ー正義の戦士』のフレームが、世論の戦争に対するとらえ方に影響してきたことをめぐる理論と仮説を提示する。

---

<sup>29</sup> すでに述べたように、[Gartner \(2008\)](#)が自国の死傷兵の性別により世論の反応が異なることを明らかにし、[Johns & Davies \(2017\)](#)が紛争地の死傷者の性別により世論の反応が異なることを明らかにした。これらの先行研究を踏まえた本研究の意義については第二章を参照。

## 第四章 『美しき魂－正義の戦士』と戦争の正当性をめぐる理論

本章の目的は、三つに分けられる。第一に、本章で後に述べる理論と仮説の構築時に用いるフレーム理論の説明を行う。第二に、第二章と第三章の先行研究を踏まえて、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、世論の戦争をめぐる態度に与えた影響を説明する理論と仮説を提示する。具体的には、「勇敢な男性兵士が脆弱な犠牲者である女性を救う」という『美しき魂－正義の戦士』に沿った形でフレームされることで、世論の戦争に対する関心、世界観や政策態度が変容することをめぐる理論と仮説を提示する。同時に、このフレームの正当性が、男性が保護者であり女性が被保護者であるとする伝統的なジェンダー・ステレオタイプに沿って描かれるか否かという点、および、こうしたジェンダー・ステレオタイプに対する個人レベルの信念の程度に支えられてきたことを明らかにする理論と仮説を提示する。第三に、本研究で用いる手法とデータの概要について述べる。第五章と第六章では、本章で提示した仮説の妥当性を、実験データを用いて検証する。

### 4.1. フレーム理論

フレームという概念には無数の定義が存在し(Nelson, Oxley, & Clawson, 1997)、その定義はしばしば読者や研究者の暗黙の理解に委ねられてきた(Entman, 1993)。フレームという概念は、社会学、心理学、政治学等の幅広い分野<sup>30</sup>で、互いに重なり合いながらも、少しずつ異なる意味と文脈で用いられてきた(Butler, 2012; Iyengar & Simon, 1993)。社会学では、社会運動を分析する文脈で、フレームの概念が頻繁に利用されてきた。代表的なフレーミング研究者である Goffman は、事象を支配する組織の原則と、その原則に対する受け手の主観的な関与の双方から構成される概念として、フレームを定義づけている(Goffman, 1974, 10-11)。Gitlin (2003)は、フレームを、「何が存在し、何が起こり、何が問題となっているのかということに対しての、わずかな無言の理論で構成される、選択・強調・提示に関する理論 (p. 6)」として位置付けている。こうした定義に基づき、社会学ではフレームそのものを生み出す要因を分析することが多かった(Butler, 2012)。<sup>31</sup>

社会学とは対照的に、心理学では、フレームによる効果に着目することが一般的である(Butler, 2012)。心理学で代表的なKahnemanとTverskyは、フレームを、同一の事象に対する選好の相違を説明する概念として描いている(Tversky & Kahneman, 1981)。たとえば、「600

---

<sup>30</sup> これらの分野は時に学際的で、とりわけ、コミュニケーション分野など、分類には複数の分類の可能性があり得るかもしれない。基本的には、著者のホームページや Google Scholar での分類、Wikipedia での描かれかたを参考に、分類を行った。

<sup>31</sup> 社会学がフレームの起源を分析することが多いというのは、相対的なものに過ぎないことに言及しておく。Gitlin (2003)は、メディア報道の結果についても分析の対象としている。

人のうち200人が救われるプログラム」と、「600人のうち、3分の1の確率で全員が救われ、3分の2の確率で全員が救われないプログラム」を比較した場合に、72%の人が前者を好むことを明らかにした実験は、今日に至るまで繰り返し引用されている。

政治学においては心理学の場合と同様、フレームによる効果に着目することが多い(Butler, 2012)。コミュニケーションの分野では、Reese, Gandy Jr, & Grant (2001)が、フレームを、「社会的に共有され、時間を超えて継続し、象徴的に機能する意味のある構造や社会世界に関する基本原則 (p. 11)」であると定義している。政治コミュニケーション分野では、Entman (1993)が、「知覚される現実の特定の側面を選び取り、その側面を強調してテキストを用いて伝え、その結果、問題の特定の定義・因果関係の解釈・(事象に対する)道徳的な評価・推薦される対処方法を(情報の受け手に対して)促す行為」としてフレームを定義している(p. 52、括弧内は筆者が補足)。また、情報の受け手側に焦点を当てながら、同じく政治学分野で、Chong & Druckman (2007)は、フレーミングを、「人々が事象を特定の形で概念化し、事象に対する考え方を再度方向付けるプロセス」として定義している(104)。同様に、Neuman, Just, & Crigler(1992)は、フレームを、「情報を伝え、解釈し、それに対する評価を下すために、メディアや個人が依拠する概念的道具(p. 60)」であると述べている。また、De Vreese (2001)は、「他の現実の側面を排除した上での、特定の現実の側面の選択・組織・強調 (p. 108)」が、フレームという概念の中核にあると述べている。

上記からも示されるように、フレーミングは、情報の提供者側の言説と、情報の受け手側の認知機能の両面から分析されてきたと言えよう(Druckman, 2001b; Kinder & Nelson, 2005; Kinder & Sanders, 1996; Nelson, 2011; D. A. Scheufele, 1999)。まず、個人に対し外在するフレームは、一般的に、言説に表れる主張や正当事由のことを指す(Kinder & Nelson, 2005)。ここで、主たる情報提供者は、職業的成功を目指すメディアおよびジャーナリスト(Entman, 2009)と、政治的生存を目指すエリート(Entman, 2009; Kinder & Sanders, 1996)である。そして、それぞれの利害や両者間の相互作用のアウトプットとして、フレームが形成される(Baum & Groeling, 2009b; Baum & Potter, 2008; Entman, 2009; Groeling & Baum, 2008)。このプロセスの中で、メディアは、時に対立するエリートと世論の要求に応える形で情報をフレームする(Baum & Potter, 2008)。また、マスメディアは、世論のイデオロギーをめぐる前提、態度、ムードを形成し、規定する役割を果たす(Gitlin, 2003, 9)。メディアは受動的なアクターではなく、能動的なアクターとして、世論が触れるレトリックや「現実」を構築していくのである(Baum & Groeling, 2009b)。

また、このフレームは、社会と切り離されて存在するものではなく、フレームを包摂する文化の色合いを帯びている(Schaefer, 2003)。たとえば、9・11後にブッシュ政権が採用した、各国を「友」と「敵」に分けて理解することを促した「対テロ戦争」というフレーム(Brewer, Aday, & Gross, 2003; Norris, Kern, & Just, 2003)は、戦争というハイポリティクスの事象を、二項対立的な「友」と「敵」という社会のわかりやすい言葉で表したフレームの一例として挙げられよう。このように、9・11におけるテロ行為を、悪である敵が引き起こした

戦争として、わかりやすく感情的な形でフレームすることで、ブッシュ大統領は議会・メディア・世論の支持を獲得することに成功したことが指摘されている(Entman, 2009)。

個人に外在するフレームに対し、個人に内在する認知面のフレームは、特定の事象に意味づけをする(Lau & Schlesinger, 2005)。このフレームのダイナミズムであるフレーミングは、情報の受け手である個人が、頭の中で外部の情報を頭の中で整理・解釈し、特定の側面を強調し、意味を与える過程でもある(B. Scheufele, 2004)。個人に外在するフレームと同様に、個人に内在するフレームも、個人が属する文化の中で形成される(Medrano, 2010)。そして、複数のフレームは、社会規範を反映する形で形成され、一個人の内面に併存する(Lau & Schlesinger, 2005)。一方で、政策評価を下す際に参照する、特定のフレームを選び取る上で用いられるのは、個人レベルのパーソナルな経験である(Lau & Schlesinger, 2005)。また、個人は、自身の過去の経験や外部の情報、他者とのディスカッション等を通して、事象に対する態度を形成する(Chong & Druckman, 2011, 172)。

言説に表れるフレームは、事象に関するエリートの言説と、一般の人々の事象に対する理解を橋渡しする役割を果たしてきた(Nelson et al., 1997, 224)。メディアやエリートにより形成されるフレームが、世論の対象をめぐる認識(Nacos & Torres-Reyna, 2004)、事象に対する解釈(Shah, Domke, & Wackman, 1996)や事象に対する重要度の認識(Shah et al., 1996)、政策選好(Schnell & Callaghan, 2005)、投票行動(Shah et al., 1996)に影響を与えることは、すでに明らかにされている。一方で、世論は、無条件でメディアやエリートが発したフレームを受け入れる存在ではない。世論に渡った情報は、一部のみ世論のアクセスの対象となり、世論の評価に影響を与える可能性をもつ(Chong & Druckman, 2007a)。すなわち、世論は、与えられた事象に関する情報に対して、選択的に解釈を行うのだ(Entman, 2009)。たとえば、信頼度の低いニュース源から得た情報は、世論の政策選好や事象に対する理解に影響をおよぼさないことが確認されている(Druckman, 2001a)。そのため、エリートは、情報を提供する仕方に心を砕いてきた(Nelson et al., 1997)。

Iyengar (1994)は、エピソード型フレームとテーマ型フレームという概念を導入している。Iyengar, (1994)によれば、事象に焦点を当て、公的な事柄を具体的な事例の観点から描くフレームが、エピソード型フレームである。エピソード型フレームの描き方とは対照的に、テーマ型フレームは、公的な事柄を、全体的・抽象的な文脈の中に位置づけ、一般的な結果や条件に焦点を当てる(Iyengar, 1994, 14)。エピソード型フレームにより事象(例：貧困など)が説明された場合には渦中の個人(例：貧困者など)に事象の責任が課せられやすいのに対し、テーマ型フレームにより事象が説明された場合には、社会に事象の責任が課せられやすいことが指摘されている(Iyengar, 1994)。とりわけ9・11後のイラク戦争では、戦争の初期にはエピソード型フレームが支配的であり、戦争が進むにつれてテーマ型フレームへと軸足が移っていったことが指摘されている(Dimitrova, 2006)。

フレームが人々の争点に対する認識に影響を与えることも明らかにされている。De Vreese (2004)は、ニュースが紛争のフレームによって提供された場合、紛争に関する考えが刺激されやすくなり、ニュースが経済のフレームにより提供された場合には、経済に関する考えが刺激されやすくなることに言及している。また、「機会」等のポジティブな形でフレームされたニュースを受け取った場合は政策を支持しやすく、逆に、「リスク」等のネガティブな形でフレームされたニュースを受け取った場合は政策への支持が低下しやすいことも指摘されている(De Vreese & Boomgaarden, 2003; Schuck & De Vreese, 2006)。

さらに、フレームの効用をめぐっては、フレームが、聴衆の内面にすでに存在する価値に訴えかけることで、人々の政治的態度が変容することが、すでに示されている(Nelson, 2004)。とりわけ、フレームは、聴衆の文化に「共鳴(resonance) (Snow & Benford, 1988)」することで、強い影響力を持つ(Entman, 2009)。ある文化において、「気づかれやすく、理解されやすく、記憶に残りやすく、感情面に訴えかける」言葉やイメージで構成されたフレームは、聴衆と共鳴しやすい(Entman, 2009, p. 6)。聴衆に対して情報が影響力を持つためには、聴衆のバック・グラウンドに合致する形で情報が提供されることが重要となるのである(Butler, 2012)。また、Benford & Snow (2000)は、フレームの共鳴の程度を決めるのは、フレームのクレディビリティと、相対的な顕著性であると述べている。その上で、フレームのクレディビリティは、一貫性、経験的なクレディビリティ、フレームの発信者のクレディビリティに分けられると述べている(Benford & Snow, 2000)。さらに、相対的な顕著性を左右する要素として、フレームにまつわる信念や価値、観念がどのように肝要であるか、フレームが聴衆のパーソナルで日常的な経験に訴えかけるものであるか、また、フレームがどの程度文化的に共鳴するものであるか、を挙げている (p. 620)。加えて、Snow & Benford (2000)は、フレームは、集団に基づいた社会的相互作用を基盤としていることに言及している。

こうした中で、Baum (2002, 2005)は、チープ・フレーミング (cheap framing) によって、ハイ・ポリティクスが、本来であれば政治的知識や関心の低い人々にとって、身近になる点を明らかにする、一連の非常に興味深い研究を行っている。Baum (2002)は、「主に娯楽目的の聴衆を魅了することを意図した、ドラマティックかつセンセーショナルな、人間の経験や感情に焦点を当てたストーリー」(94)に仕上げることを、チープ・フレーミング (cheap framing) と呼んでいる。その上で、ソフト・ニュースは、チープ・フレーミングを用いることで、ニュースを娯楽目的の聴衆にとって興味深いものに作り上げていることに言及している。そして、このチープ・フレーミングは、事象を聴衆にとって身近なものにすることで、聴衆が新たな情報を獲得するために関心を払うコストを劇的に低下させる(Baum, 2005)。ヒューマン・ドラマや暴力、海外の危険といった側面に焦点を当てたソフト・ニュースは、複雑な事象と比べて因果関係が明確であるために、認知コストが低くなるのである

(Baum, 2005)<sup>32</sup>。そのため、Baum(2002, 2005)は、外交政策などの高度な事象に関する情報が、スキャンダルや暴力、英雄などの、センセーショナルなヒューマン・ドラマによって彩られた場合に、高度な政治的事象が人々の興味関心の的となることを指摘している。結果として、ソフト・ニュースによって、政治的関心の低い層の戦争に対する関心や知識が高まることが解明されている(Baum, 2002, 2005)。

また、フレームが、社会的・文化的カテゴリーの境界線を定義および再定義する効果を持つことも指摘されている(Kosicki & Pan, 2001)<sup>33</sup>。たとえば、軍隊におけるゲイをめぐるインシユをマイノリティの権利として位置付けることは、アクターの性的指向に基づく社会カテゴリーを弱める一方、マイノリティという社会学的な概念を拡大する(Kosicki & Pan, 2001, p. 43-44)。そして、アクター間の境界を明確に引くことができるフレームは、影響力を持ちやすい(Kosicki & Pan, 2001)。

こうした中で、フレームが、個人の持つ自集団中心主義に訴えかけることで、世論が変容することが解明されている(Grant & Rudolph, 2003)。たとえば、政策の対象となるグループ(例:イタリア系アメリカ人)に対する感情や態度によって、世論の政策に対する評価(例:対イタリア外交政策)は異なってくる(Berinsky, 2009; Gilens, 2009; Schneider & Jacoby, 2005; Sniderman & Piazza, 1995)。この時に、感情や態度を政策評価に結びつける役割を果たすのは、フレームである(Kinder & Sanders, 1996)。たとえば、政府の援助に関する情報が、人種の文脈によって調査者にフレームされたならば、個人の他人種に対する憤りは政策に対する支持に影響するが、もしも人種に関係のない中立的な形でフレームされたならば、他人種に対する憤りは、政策に対する支持に影響しないことが指摘されている(Kinder & Sanders, 1996)。

本節で見たように、フレームという用語は、各人がそれぞれ少しずつ異なる文脈で用いてきたため、画一的にフレームを定義することは、フレームという用語のニュアンスを把握する上では、必ずしも望ましくないかもしれない。だが、次節以降の理論構築における必要上、本研究では、Entman (1993)による、「知覚される現実の特定の側面を選び取り、その側面を強調してテキストを用いて伝え、その結果、問題の特定の定義・因果関係の解釈・(事象に対する)道徳的な評価・推薦される対処方法を(情報の受け手に対して)促す行為」(p. 52、筆者訳、括弧内は筆者が補足)という定義を採用する。フレームを、本研究は、メディアなどに表れる個人に外在するフレームと、個人のマインドに内在する認知面でのフレームのうち、人々に対して外在するメディア上のフレームに焦点を当てる。そして、メディア

---

<sup>32</sup> Baum (2005)は、情報をショートカットして取り入れた世論が、限定的な知識に基づいて合理的な判断を下すことを明らかにした研究が増えていることに言及している (p. 8)。

<sup>33</sup> Kosicki & Pan (2001)は、社会運動の文脈で分析を行い、フレームの話者 (speaker) に焦点を当て、フレームが、フレームの話者のアイデンティティを形成していることをめぐる議論を展開している。

によるフレームの方法によって、世論の戦争に対する認識にどのような影響を与えたのかを明らかにする。

#### 4.2. 『美しき魂－正義の戦士』のフレーム

本研究では、前章で概観したジェンダー国際関係論が述べる、「勇敢な男性兵士が脆弱な被害者女性を救う」という『美しき魂－正義の戦士』の考え方に沿った形で、戦争に関する情報を伝えることを、「知覚される現実の特定の側面を選び取り、その側面を強調してテキストを用いて伝え、その結果、問題の特定の定義・因果関係の解釈・（事象に対する）道徳的な評価・推薦される対処方法を（情報の受け手に対して）促す行為」(Entman, 1993, p. 52、筆者訳、括弧内は筆者が補足)であるフレームの一種であると考えられる。『美しき魂－正義の戦士』の考え方は、味方と敵、強者と弱者、被保護者と保護者などの、戦争の二項対立的な側面に焦点を当て（特定の側面の切り取りおよび強調を行い）、戦争の原因を敵国に求めるとともに（特定の因果関係の解釈を伝え）、戦争の目的を正義の達成や弱者の保護として定義づけた上で（道徳的評価を伝え）、自国の軍事行為の正当性を促す（推薦される対処法を促す）役割を持つためである。この上で、本研究では、ジェンダー国際関係論で指摘されてきた、男性兵士には自国の女性を保護する責務があるという語りと、男性兵士には敵国の女性を保護する責務があるという語りのうち、後者の語りには焦点を当てる。次節以降では、世論の戦争に対する選好をめぐる長年の問いに対して、「勇敢な男性兵士が脆弱な紛争地女性を救う」という『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、世論の戦争をめぐる考え方を変容させたことを述べる理論と仮説を提示する。

#### 4.3. 『美しき魂－正義の戦士』のフレームと世論の戦争に対する態度

本節では、第三章で概観したジェンダー国際関係論の視角とフレーム理論の理論的枠組みを用いることで、『美しき魂－正義の戦士』のフレームの効果をめぐる理論と仮説を提示する。最初に、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、世論の戦争に対する関心、自国と他国をめぐる世界観、軍事政策に対する選好に与える影響について、理論と仮説を提示する（第一項から第三項）。次に、『美しき魂－正義の戦士』のフレームの影響力が、保護者を男性とし、被保護者を女性とする、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに支えられてきたことをめぐる理論と仮説を提示する（第四項および第五項）。本節で提示した理論と仮説の妥当性は、第五章と第六章で、オンライン・サーベイ実験によって収集したデータを分析することで検討していく。

#### 4.3.1 戦争に対する関心への影響

戦争に関する基本的な事柄に関して、人々が非常に限定的な知識しか有していないことが指摘されている(Berinsky, 2007, 2009)。人々の日常生活から遠く離れた場所で起こる複雑な事象に対して人々の関心が向かないのは、ある意味では自然なことともいえるのかもしれない。こうした中で、Traugott & Brader (2003)は、9・11に焦点を当てながら、教育や政治的知識といった要素に加え、ニュースへの継続的な関心が、人々が事象を理解し、議論することにつながると述べている。前章でも言及したように、対外政策の分野においてさえも、世論の影響力は決して無視できるものではない(Baum, 2004)。世論の政治的関心の欠如は、世論の利益に反した対外政策にもつながりうるといえよう。

それでは、勇敢な男性兵士が脆弱な紛争地女性を救うという『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、人々の戦争に対する関心の強さを変容させる可能性を持つものなのか。前節で言及した、情報を「主に娯楽目的の聴衆を魅了することを意図した、ドラマティックかつセンセーショナルな、人間の経験や感情に焦点を当てたストーリー」(94)に作り上げるチープ・フレーミングが、『美しき魂－正義の戦士』をめぐるフレームの影響力を考える上で鍵となろう(Baum 2002)。Baum (2002)によれば、政治的関心の低い層は、チープ・フレーミングを利用した、娯楽目的のソフト・ニュースを消費することで、高度な政治的争点に関する情報に派生的にさらされる。その結果、ソフト・ニュースは、政治的関心の低い層が政治的事象に関する情報を得るコストを格段に下げる(Baum & Jamison, 2006)。そして、このことは、政治的関心の低い層について、高度な政治的争点に対する注目の増加につながる(Baum, 2002)。Baum (2002)は、この効果は、ソフト・ニュースで定期的に扱われる海外における危機 (foreign crisis) について当てはまり、ソフト・ニュースが扱わないタバコ問題や選挙については当てはまらないことを明らかにしている。聴衆は、政策のニュアンスや地政学以上に、リーダーのパーソナリティやボディ・バッグ<sup>34</sup>などのヒューマン・ドラマに関心があるのである(Baum, 2007)<sup>35</sup>。

『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、まさに、Baumらが着目するチープ・フレーミングを用いたソフト・ニュースの枠組みに当てはまるといえる(Baum, 2002, 2005; Baum & Jamison, 2006)。勇敢で英雄的な男性兵士が脆弱な女性の犠牲者を悪の敵の手から救うという戦争報道に見られる構図は、Baum (2002)の指摘する、個人の

<sup>34</sup> ボディ・バッグとは、戦闘地や事故、犯罪の現場の死体を運ぶバッグのことを指す。

<sup>35</sup> 興味深いことに、自己利益に基づくフレームが世論に対して持つ影響力が、限定的なものに過ぎないことを示唆する先行研究も存在する。Cappella & Jamieson (1996)によれば、アクターの自己利益に焦点を当てたキャンペーンや政策論議は、対立している両者や政治的プロセスそのものに対する聴衆のシニシズムに繋がりがやすい。その結果、聴衆はすべての選択肢を拒絶する傾向があるにあることが指摘されている(Cappella & Jamieson, 1996)。

感情に焦点を当てたドラマティックなチープ・フレーミングに他ならない。そして、こうしたストーリーは、政治に特段の関心がない層にとって、獲得コストが低いものである。したがって、安全保障や経済政策に対する特段の関心がない層の人々も、『美しき魂－正義の戦士』に沿った形で戦争に関する情報が提供されたならば、戦争に対する関心が高くなることが予想される。

また、先行研究が、ソフト・ニュースの効果を、とりわけ政治的関心の低い層について見出しているのに対し(Baum, 2002, 2003; Baum & Jamison, 2006)<sup>36</sup>、本研究では、『美しき魂－正義の戦士』のフレームによる効果が、政治的関心の低い層を超えた、より広い層について見られることを期待する。ジェンダー国際関係論が、とりわけ軍事分野や安全保障分野では、女性性に対して男性性を優位に置く前提が支配的であることを指摘しているためである(Blanchard, 2003; M. T. Brown, 2012; Nantais & Lee, 1999b; Pettman, 1996b, 1996b; Svedberg & Kronsell, 2011; Wilcox, 2009)。<sup>37</sup>こうした前提が強力に社会に普及していることにより、政治的関心の度合いに関わらず、『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、政治的関心の低い層の関心を高めうることが予想される。

仮説 1: 『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の戦争に対する関心を高めやすい。

#### 4.3.2. 自国と相手国をめぐる世界観への影響

戦争においては、国境を基準とした、『我々対彼ら』という図式が顕在化しやすい。もちろん、顕在化の背景には、軍事行為そのものが、軍事行為の行為者と対象を分ける性質を持つが、他方で、『我々対彼ら』という見方が、軍事行為の正当性を強化する点も看過できない<sup>38</sup>。それでは、どのような条件下で、『我々対彼ら』という図式が顕在化しやすくなるのか。本節では、『美しき魂－正義の戦士』をめぐるフレームが、『我々対彼ら』という世界観の構築に貢献することをめぐる理論と仮説を提示する。

---

<sup>36</sup> Baum (2005)は、政治的関与の低い層は、エピソード型フレームによってフレームされたニュースの立場に沿う形で、政治的関心を高めやすいことに言及している。他方で、同研究は、政治的に洗練された個人は、ソフト・ニュースにより、自身が以前からとっていた立場を強化する傾向にあることに言及している。

<sup>37</sup> 1900年前後の米西戦争と米比戦争について、Hoganson (1998)は、政治的リーダーたちは、自身の男性という立場や男性としての振る舞いを重視し、女性と異なる男性であることが、彼らのアイデンティティの一部となっていたことを指摘している。そして、このパーソナルなアイデンティティの問題が、対外政策に影響を与えたことを指摘している。

<sup>38</sup> Berinsky (2009)や Kam & Kinder (2007)を参照。

第三章で見たように、『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、無垢で脆弱な女性を「敵」から守る正義の兵士を称える役割を持つ(C. Enloe, 2000; Sjoberg, 2010; A. Tickner, 2010)。このフレームには、敵と味方の双方が存在することが欠かせないため、『美しき魂－正義の戦士』のフレームにおいては、『我々対彼ら』という構図が鮮明となる。その結果、湾岸戦争やアフガン戦争、イラク戦争をはじめとする戦争で、『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、敵と味方を区分した上で、敵に対する軍事攻撃を正当化する役割を果たした(Cloud, 2004; Hunt, 2010)。

それでは、エリートやメディアによって伝えられた『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、人々の世界観に実際に影響を与えうるものであるのか。Kosicki & Pan (2001)によれば、フレームは、アクターが社会的カテゴリーの境界を定義・再定義する効果をもつ。そして、人々が政治的世界を理解する方法は、メディアがどのように事象をフレームするかという点に影響される(C. H. De Vreese, 2004; Reese et al., 2001)。メディアのニュースを形成するフレームは、特定の定義や解釈を世論に伝えることができるのである(C. De Vreese & Boomgaarden, 2003)。そして、メディアによって伝えられたフレームは、聴衆の文化的背景や自身の元来の性質とフレームの解釈と合致した場合に、受け入れられやすくなる(Entman, 2009; Nelson, 2004; Snow & Benford, 1988)。とりわけ、戦争のような複雑な事象について、メディアによる事象のフレームの仕方が、世論の事象に対する理解に与える影響は、看過できないものである(Berinsky & Kinder, 2006)。

この上で、『美しき魂－正義の戦士』というフレームは、まさに、世界を敵と味方に分ける、『我々対彼ら』という一つの解釈を聴衆に提示する。そして、強者が弱者を正義の名の下に救うという語りは、政治や対外政策という枠を超えた日常生活のレベルで、聴衆の文化に「共鳴(Benford & Snow, 2000)」し、また、人々の文化的背景と合致するものであろう。そのため、敵と味方を二項対立的に対峙させる『美しき魂－正義の戦士』をめぐるフレームは、人々の『我々対彼ら』という見方を促す効果を持つことが考えられる。すなわち、自国に対する好感と敵国に対する敵意が、『美しき魂－正義の戦士』のフレームによって促されることが予想される。

仮説 2: 『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の敵国に対するネガティブな感情を呼び起こしやすい。

仮説 3: 『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の自国に対するポジティブな感情を呼び起こしやすい。

### 4.3.3. 政策選好に対する影響

国内世論が対外政策に与える影響については懐疑的な研究も多かったが(Holsti, 1992を参照)、近年は、世論が対外政策に影響を及ぼすことを指摘する研究が目立つようになってきた(Baum & Potter, 2008)。対外政策の中でもハイ・ポリティクスに位置づけられる安全保障領域について、Baum (2004)は、世論による詮索が、米国の大統領が軍事力を対外政策の手段として用いることを抑制する役割を果たすことに言及している。

それでは、勇敢な男性兵士が脆弱な犠牲者である女性を救うという『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、対外政策にも影響を及ぼしうる世論の政策選好に、何らかの変化をもたらしうるものなのか。『美しき魂－正義の戦士』のフレームの中核にある女性の保護をめぐる観念は、自集団と他集団を二分し、自集団を他集団に対して優位に置く世界観を構築してきた (Elshtain, 1987; Pettman, 1996; Sjoberg, 2010; A. Tickner, 2010; J. A. Tickner, 2004; Wilcox, 2009; Young, 2003; Youngs, 2006)。脆弱で無垢であり、敵からの特別な保護の対象となる女性(Carpenter, 2003, 2016; Sjoberg, 2010)を守ることは、戦争の大義となってきたのである(Sjoberg, 2010)。この大義は、男性のみならず女性の支持にも受け入れられてきた(Elshtain, 1987; Goldstein, 2003; Young, 2003)。英雄的な男性と犠牲者である女性という、『美しき魂－正義の戦士』が描く構図は、男女を問わない多くの人によって受け入れられてきたのである(Dowler, 2002; Youngs, 2006b)。結果として、この『美しき魂－正義の戦士』をめぐるフレームは、戦争の正当性を担保するという形で、世論の戦争に対する選好に影響を与えることが指摘されてきた(Dowler, 2002; Elshtain, 1987; Sjoberg, 2010; Youngs, 2006b)。

この戦争を正当化する『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、生活に根差したジェンダー観念に訴えかけている点で、聴衆の文化との『共鳴性』(Benford & Snow, 2000; Snow & Benford, 1988)の高いフレームであることが考えられる。正義の名の下に強者が弱者を救う『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、ほとんど誰にでも理解でき、感動の対象として記憶に残りやすいためである。すなわち、『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、Entman (2009)の指摘する、「いづかれやすく、理解されやすく、記憶に残りやすく、感情面に訴えかける(p. 6)」に他ならない。そして、聴衆の文化や背景と共鳴するフレームは、聴衆に対して影響力を持ちやすい(Entman, 2009)。したがって、共鳴度の高い『美しき魂－正義の戦士』のフレームによって正当性を担保された形で情報を受け取った場合に、人々の戦争に対する選好が高まることが期待される。

仮説4: 『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の戦争に対する支持を高めやすい。

#### 4.3.4. 保護者と被保護者の性別の組み合わせによる効果

前節まででは、勇敢な男性兵士が脆弱な犠牲者の女性を救うという『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、人々の戦争をめぐる関心・世界観・選好に影響を与えることをめぐる理論と仮説を提示した。本節では、『美しき魂－正義の戦士』のフレームの効果が、保護者の兵士を男性とし、被保護者の犠牲者を女性とする、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに支えられてきたことをめぐる理論と仮説を提示する。

繰り返し指摘したように、フレームは、人々に無条件で受け入れられるわけではない。個人は、信頼に足るソースからの助言の有無によって、情報に対する態度を変える(Druckman, 2001c)し、メディアによるフレームは、聴衆が内包する価値に訴えることにより、聴衆の政治的態度を変容させる(Nelson, 2004)。とりわけ、フレームが聴衆の文化に共鳴するか否かは、フレームの効果の度合いに大きな影響を与える(Entman, 2009; Snow & Benford, 1988)。より広い文脈の政治的文化との共鳴性が高いアイデアや言語を用いることで、フレームの影響力は高まるのである(Gamson, 1992, 135)。フレームが聴衆を包摂する文化とどの程度共鳴するかが、フレームの効力に大きな影響を与えるのである。

その上で、『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、男性が保護者であり、女性が被保護者であることで、聴衆を包摂する社会の文化との共鳴性を発揮しやすいことが予想される。伝統的に、戦闘は、『正義の戦士』である男性の役割であるとされてきた(Elshtain, 1987)。反対に、男性対女性という二項対立観の中で、男性と対極の位置に置かれた『美しき魂』を持つ女性は、平和と結びつけられ、戦闘とは切り離されて考えられてきた(Elshtain, 1987)。女性は、無垢で脆弱な存在だとされ、その一方で、男性にはそうした女性を守る役割が課されたのである(C. Enloe, 2000; Sjoberg, 2010; A. Tickner, 2010)。その結果、多くの国家において、戦闘は男性に担われることがほとんどであった(C. Enloe, 1993)。そして、女性の軍事領域への進出が進んだ今日においてさえも、男性が保護者であり、女性が被保護者であるというイメージは根強く残っている(Nantais & Lee, 1999)。

保護者を男性とし、被保護者を女性とする伝統的なジェンダー・ステレオタイプが今日においても残存しているならば、「正義の戦士が脆弱な被害者を救う」というフレームが、そのステレオタイプと矛盾する形で描かれた場合に、フレームと文化の共鳴性の度合いが低下し、世論の選好に対するフレームの影響力が阻害される可能性を指摘できよう。言い換えれば、保護者が男性ではなく女性となった場合、もしくは被保護者が女性ではなく男性となった場合に、「正義の戦士が脆弱な女性を救う」というフレームの影響力は低下することが予想される。

仮説 5: 「正義の戦士が脆弱な被害者を救う」というフレームの、世論の関心を高め、二項対立的な世界観を形成し、軍事政策に対する選好を高める効果は、救済者が男性、被救済者が女性であることで、より強く見られる。

一方で、米国兵である救済者が女性、紛争地国市民である被救済者が男性であった場合には、伝統的なジェンダー秩序を守ることができない国家であるとして紛争地の正当性が低下し、そうした国家に「現代的な女性」を象徴する女性兵(C. H. Enloe, 2007)とともに介入することで、米国の正当性が上昇する可能性も考えられる。Hoganson (1998)は、キューバ女性を保護する役割を果たせないキューバ男性に代わって、米国の男性が保護者となるという論理が、キューバ独立戦争時に米国内で利用されたことを指摘した。同様に、先進的な米国女性と後進的な紛争地男性が対比されることで、戦争に対する関心が高まり、敵国に対する好感度が低下する一方で自国に対する好感度が上昇し、戦争の正当性が高まる可能性に言及できる。

仮説 6: 「正義の戦士が脆弱な被害者を救う」というフレームの、世論の関心を高め、二項対立的な世界観を形成し、軍事政策に対する選好を高める効果は、救済者が女性、被救済者が男性であることで、より強く見られる。

#### 4.3.5. 個人レベルのジェンダー・ステレオタイプによる効果

前節では、「正義の戦士が脆弱な被害者を救う」というフレームが、社会で主流となるジェンダー・ステレオタイプに沿うものであるか否かが、フレームの効力に影響を与えることについての理論と仮説を提示した。本節では、『美しき魂－正義の戦士』のフレームによる効果が、個人レベルのジェンダー・ステレオタイプに沿っているか否かにより、フレームによる効果が異なることを予想する理論と仮説を提示する。

たとえ、フレームと当該社会で主流とされる文化の共鳴性が高かったとしても、社会で主流とされる文化的背景を個人が受容していなかったならば、フレームの個人に対する影響力は限定的となることが予想される。個人があらかじめ有している記憶(Chong & Druckman, 2007)、イデオロギーや政党(Haider-Markel & Joslyn, 2001; Schneider & Jacoby, 2005)といった、個人があらかじめ有する性質によって、フレームの効果の度合いが異なっていることは、すでに多くの先行研究によって明らかにされているためである。世論は、自身のコアとなる強い価値観とフレームのテーマが重なった場合に、特定の政策に対する支持を変容させやすくなる(Shen & Edwards, 2005)。

それでは、『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、どのような個人に受容されやすいものなのか。フレームの個人に対する影響力を決める要素の

一つとして、個人レベルのジェンダー・ステレオタイプの強さに言及することができよう。Nelson (2011)によれば、ステレオタイプは「社会的カテゴリーを構成する特徴のリスト」(p. 217)としてとらえられる。Lippmann (1922)は、人間文化とは、多様な観念を「切り取り、再構成し、パターンを見出し、型にはめる」(p. 16)ことであると述べた上で、自文化が提示するステレオタイプというフィルターを通して、人々は世界を理解していることに言及している(Lippmann, 1922)。ステレオタイプもフレームと同様、人々の文化によって形成された、世界をシンプルに理解するための枠組みである(Lippmann, 1922)。

伝統的な『美しき魂－正義の戦士』による戦争のフレームは、勇敢で理性的な保護者を男性、脆弱で感情的な被保護者を女性として語る点で、社会の伝統的なジェンダー・ステレオタイプに大きく依存している。そのため、このジェンダー・ステレオタイプに対する共感度が高い個人は、『美しき魂－正義の戦士』によるフレームに影響されやすい一方で、共感度が低い個人は、同フレームに影響されにくいことが予想される。

仮説7: 『美しき魂－正義の戦士』のフレームの、世論の関心を高め、二項対立的な世界観を形成し、軍事政策に対する選好を高める効果は、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに強い共感を示す個人の間でより強く見られる。

#### 4.4. 実験計画

本研究では、オンライン・サーベイ実験の手法を用いて分析を行う。実験的手法は、①因果関係の実証に適した手法として、また、近年政治学で関心が高まっている政治行動を説明するために適した手法として、近年政治学で非常に頻繁に利用されている手法である(Morton & Williams, 2010)。Morton & Williams (2010)は、政治学の主要三誌である *American Political Science Review*、*American Journal of Political Science*、*Journal Politics* で出版された論文のうち、何本の論文が実験的手法を用いたのかを分析した。その結果、2000年から2005年にかけて、計47本の論文が実験的手法あるいはサーベイ実験の手法を用いていた。この数字は、1990年代全体に出版された実験的手法を用いた研究論文の数に値することを指摘している(Morton & Williams, 2010, p. 5)。

また、Mutz(2011)は、二つの変数間の因果関係を証明するためには、①二つの変数間の相関、②原因が効果に対して時間的に先行すること、③原因と効果の関係は第三の変数によって説明可能でないこと、が因果関係の説明に必要なとする伝統的な金言に言及している(p. 9)。この上で、因果関係を検証する際には、「主張される推測や知識をめぐるおおよその真実」であることを示す妥当性を満たすかどうか、因果関係の妥当性を示すとされる(Morton & Williams, 2010, p. 7)。この妥当性という概念は、「ターゲットとなる母集団において当該推測や知識に関しておおよその真実」性が確保されるか否かを表す内的妥当性と、

「ターゲットとなる母集団を超えた観察において、当該推測や知識に関しておおよその真実」性が確保されるか否かを示す外的妥当性に分類される(Morton & Williams, 2010, p. 7)。

実験的手法は、一般に、内的妥当性を確立する上で秀でた手法だとされることが多い。既存のデータを用いた観察研究では、調査者は因果関係に影響を及ぼしうる第三の因子について制御を行うことが困難である。たとえば、兵士の性別が、世論の安全保障政策に対する選好に与える影響を明らかにすることを考える。米国内の女性兵士の割合を独立変数とし、世論調査で問われた対テロ戦争に対する選好の度合いを従属変数とし、両変数の間に負の相関がみられたとする。一見両者の因果関係が成立するかにも見えるが、そもそも米国内の女性兵士の割合を把握している人がどれだけいるかは疑わしく、戦争の激化といった第三の因子が、女性兵士の割合の上昇と戦争に対する選好の下降をもたらした可能性も考えられる。このような指摘に対し、実験的手法は、異なるグループ間の性質を均等にそろえることを通して、因果関係に影響をおよぼしうる第三の因子を調査者の手で制御することを可能にする。たとえば、上記の女性兵士の存在が世論の安全保障政策に対する選好に与える影響を検討したいときに、男性兵士に関する新聞記事と、女性兵士の新聞記事を、兵士の名前以外はすべて同じ文章にして、二つのグループに見せたとする。この時、二つのグループ間では、年齢や性別などの基本的な性質が平均的に同質になるように、ランダム化する。その後、戦争に対する選好をめぐる質問を行って、両グループ間で戦争に対する選好の平均値が異なれば、兵士の名前が、戦争に対する選好に影響したことを指摘できよう。

一方で、実験的手法を用いることに対しては、実験環境やサンプルが限定的な普遍性しか持たないことから、外的妥当性を確保することが難しい手法であるとする指摘もある。こうした主張に対して、Mutz (2011)は、内的妥当性と外的妥当性を二分して考えることは適切ではないと指摘している。外的妥当性は、内的妥当性が確保されて初めて、確立されうるものであるためである(Morton & Williams, 2010)。

本研究は、『美しき魂－正義の戦士』のフレームの効果を見るものだが、当該フレームの効果、すでに出版された新聞記事等の観察データや世論調査を用いて示すことには、多大な困難が存在する。新聞記事を適切に分類するために膨大な労力が必要となることに加えて、調査対象とする当該新聞記事を世論調査の対象者が読んだかどうかについて特定が困難であるためである。そのため、本研究では、フレームを実際に被験者に提示する実験的手法を用いることで、仮説を検証することを試みる。

#### 4.5. サーベイの概略

本研究で扱うデータは、2019年6月4日から2019年6月12日にかけて、オンライン・サーベイの手法によって取得された。サーベイの全文については、本論文の最終部に付録とし

て記載されている。サーベイ内の変数の詳細な説明については、次章以降に譲るが、サーベイは Survey Monkey を用いて作成され、オンライン・サーベイのプラットフォームである Prime Panels を利用することで、18 歳以上の米国市民である Prime Panels の労働者 1583 人が実験に参加した<sup>39</sup>。

オンライン・サーベイは、近年の米国の政治学で非常に頻繁に用いられている手法である。とりわけ、オンラインの労働市場の中でも中心的な役割を果たしてきた Amazon Mechanical Turk は、実験を行う社会科学者の中で近年急速に受け容れられているサンプル収集の手段である (Paolacci, Chandler, & Ipeirotis, 2010)。Amazon Mechanical Turk では、参加者は Human Intelligence Tasks (HITS) を行い、タスク完了とともにクーポンコードを受け取り、クーポンコードを用いることで、タスクに応じた報酬を請求する (Boas, Christenson, & Glick, 2018, p. 3)。参加者は匿名でサーベイに参加することができ (Paolacci et al., 2010)、調査者と参加者の謝礼のやりとりも、Amazon Mechanical Turk を通じて行われる。Boas, Christenson, & Glick (2018) は、オンライン・サーベイで頻繁に利用される、Facebook、Amazon Mechanical Turk、および Qualtrics Panels を比較した上で、Amazon Mechanical Turk の米国参加者は低価格でスピーディに参加者を集めることができるプラットフォームであり、被験者は他のプラットフォームに比べて注意深く、従順であると述べている。また、Paolacci, Chandler, & Ipeirotis (2010) は、ラボ実験や伝統的なウェブサーベイ等との手段と同等以上に、ジェンダー、人種、教育レベルの点で、米国の人口を代表していると述べている。また、Buhrmester, Kwang, & Gosling (2011) によれば、Amazon Mechanical Turk は、他のインターネットによる参加者の収集方法と比べて、わずかな程度、より多様であり、ラボ実験に比べては優位に多様性が保たれていることが指摘されている。Amazon Mechanical Turk の有用性が認められる一方で、Paolacci, Chandler, & Ipeirotis (2010) は、学生が年度ごとに入れ替わる学内の実験等に対し、Amazon Mechanical Turk の参加者が、数年にもわたり同一である可能性を指摘している。また、Amazon Mechanical Turk の労働者が、サーベイの参加要件を満たすことで経済的利得を得ようとして、自身のアイデンティティや所有、行動を偽っ

---

<sup>39</sup> 本研究を行う前に、パイロット実験を通して、実験が意図したとおりに機能するのかについて検討を行った。本研究のパイロット調査は、二回に分けて行われた。2019 年 5 月 31 日の夜間から 6 月 1 日午前中にかけて行われ、計 156 人が同意書に同意し、同一のサーベイに参加した。<sup>39</sup>一回目のサーベイでは計 50 名、二回目のサーベイでは計 93 名が、サーベイの最終頁までの回答を完了した。二回のサーベイを通して、平均回答時間は 6 分 20 秒であり、回答を完了する確率は 90%であった。本調査では、被験者がランダムに計 7 つの文章に割り振られ、調査を完了した被験者の人数は、一つのグループあたり 15 人から 26 人であった。パイロット実験を踏まえて、本実験では、ジェンダー・ステレオタイプに対する質問を僅かに変更したほか（詳細については後述）、各カテゴリー間で同一の順位付けをすることを禁止する機能を外した。

て表明することで、結果がゆがめられることも指摘されている(Sharpe Wessling, Huber, & Netzer, 2017)<sup>40</sup>。

本研究で利用する TurkPrime は、Amazon Mechanical Turk と Prime Panels という、異なるリクルーティング・プラットフォームを最適化する目的を持つ企業である<sup>41</sup>。Amazon Mechanical Turk がリサーチという目的で作られていなかったのに対し、TurkPrime は、リサーチを目的としたプラットフォームとして作られ(Litman, Robinson, & Abberbock, 2017)、研究のセットアップを単純化し、特定のデモグラフィックに属する集団をターゲットとしたリクルーティングを可能とする<sup>42</sup>。TurkPrime の基本的な機能は無料であり、たとえば、以前に同調査者が行った特定のサーベイへの参加者を、調査者が制限するといった機能が利用できる。加えて、Pro feature に追加コストを支払うことで<sup>43</sup>、サンプルの収集スピードを変化させ、特定地域からサンプルを収集したり、同一の IP アドレスからの複数回のサーベイ参加を禁止したりできるほか、複数回のサーベイ参加が疑われる地域からのサーベイ参加を禁止することも可能となる<sup>44</sup>。

すでに説明をした Amazon Mechanical Turk と、本研究で利用する Prime Panels は、独立したリクルートメント・プラットフォームである<sup>45</sup>。Prime Panels は、提携する幾十ものマーケット・リサーチ・プラットフォームを統合する技術により、一つの大きな参加者プールを形成することを可能にした<sup>46</sup>。この結果、Amazon Mechanical Turk におけるアクティブ・ユーザーは約 10 万人であるのに対し、Prime Panels は、世界中に住む約 4000 万人から 5000 万人の参加者プールを提供している<sup>47</sup>。また、Prime Panels の参加者プールは、Amazon Mechanical Turk と比べてより米国人口の代表性に近くなっているほか、デモグラフィック情報や州情報、居住地域や郵便番号に基づいて、層化したサンプルを収集することができる<sup>48</sup>。さらに、Amazon Mechanical Turk を TurkPrime とともに利用した場合と同様に、Prime Panels では、同一の IP アドレスからの複数回のサーベイ参加の禁止、複数回のサーベイ参加が疑われる特定地域からサーベイ参加の禁止、以前に同調査者が行った特定のサーベイへ

---

<sup>40</sup> 本研究では、Amazon Mechanical Turk と比べて、サンプルの代表性がより高い Prime Panels をリクルートメント・プラットフォームとして利用する。一方で、本研究は一回限りのもので、米国市民という条件以外の参加要件は設けていないため、Amazon Mechanical Turk を対象としたこれらの批判については比較的当てはまりにくいと考えられる。

<sup>41</sup> TurkPrime のサポート・センターの回答 (2019 年 6 月 26 日) による。

<sup>42</sup> TurkPrime のサポート・センターの回答 (2019 年 6 月 26 日) による。

<sup>43</sup> <https://www.turkprime.com/Home/Pricing>

<sup>44</sup> <https://blog.turkprime.com/turkprime-tools-to-help-combat-responses-from-suspicious-geolocations>

<sup>45</sup> TurkPrime のサポート・センターの回答 (2019 年 6 月 26 日) による。

<sup>46</sup> 同上。

<sup>47</sup> 同上。

<sup>48</sup> TurkPrime のサポート・センターの回答 (2019 年 6 月 26 日) による。

の参加者のリクルートメント・プールからの除外が可能である。また、Prime Panelsの基本的な操作方法は、Amazon Mechanical Turkと同様である。参加者はサーベイに参加し、Human Intelligence Taskをこなした後、コードを入力し、Prime Panelsを通して報酬を受け取る。

本研究では、オンライン上でサーベイを作成するプラットフォームであるSurvey Monkeyを利用して、サーベイ調査票を作成した。その上で、リクルートメント・プラットフォームであるPrime Panelsを通して参加者を募り、Survey Monkeyで作成したサーベイリンクを通して、被験者をPrime PanelsからSurvey Monkeyへ誘導した。この際、サーベイ参加者の質を担保するため、これまで行ったHuman Intelligence Task (HIT)に対する承認率が90%以上の参加者、およびサーベイ参加時点までに承認されたHITの数が100以上の参加者に限定して参加者を募った。また、同一のIPアドレスからの参加や、複数回の参加が疑われる人が集中している地域からの参加は禁止した。Survey Monkey上のページで、被験者はサーベイに回答後、コードを取得した。このコードをPrime Panels上で入力してもらい、コードによりサーベイへの参加が確認できた被験者について、Prime Panelsを通じて一人あたり\$2の報酬が支払われた<sup>49</sup>。

サーベイの冒頭では、サーベイ参加に伴う同意書が提示された。同意書にはサーベイの対象者、研究の趣旨および調査者の連絡先が記載されている。同意書に同意した調査者のみ、次ページ以降の調査に関する質問に移動し、同意をしなかった調査者は、サーベイを終了するページに誘導した。また、サーベイの最後では、参加者の、自身の参加した実験に対する知る権利を保護するために、ディブリーフィングを行った。ディブリーフィングのページでは、ジェンダーに関する考え方が、戦争に対する考え方に影響を与えたことが調査の目的であったことを参加者に告知した。このディブリーフィングの情報を、すでに参加した参加者が、参加候補者に共有することで、参加のタイミングによって実験結果に偏りが出てきてしまう可能性は否定できない。だが、本実験では、同一のIPアドレスからの複数回の実験参加、およびパイロット実験と本実験の重複参加は禁止し、数日という短期間でデータを収集している。そのため、このディブリーフィングのプロセスによって、実験結果が大きく歪められてしまう可能性は非常に限定的であることが予想される。

---

<sup>49</sup> 被験者に支払う謝礼の金額を決定するにあたっては、<https://tmalsburg.github.io/mturk-compensation.html>を参照した。平均では一時間あたり\$6が支払われているが、本来は一時間あたり\$7.25（2019年時点の連邦最低賃金）が被験者に対して支払われることが望ましいことが記載されている。本研究で用いたサーベイは、Survey Monkeyによって、一回答あたり9分が想定されていた。さらに、本調査では、本サーベイを完了した被験者は、平均して約6分49秒の時間をかけていたことが分かった。そのため、サーベイ一回答あたり\$2の報酬は、被験者の権利を保護するに十分な金額であると考えられる。

サーベイの本文は、同意書とディブリーフィングのページを除き、5つのページに分けることができる。各ページの回答後に次のページへ移った場合、被験者は前のページに戻ることができない。次のページの回答を見た後に、前のページの回答を変更することで、後のページの質問の文章やディブリーフィングのプロセスが、前のページの回答である従属変数に影響し、検証したい因果関係に影響してしまうことを避けるためである。

最初のページでは、米国と架空国家であるハヤザニアの間の戦争に関する文章を参加者に提示した。戦争に関する各文章の詳細な説明については次章以降に譲るが、勇敢な男性兵士が脆弱な犠牲者である女性を救うという『美しき魂－正義の戦士』のフレームの観点から、少しずつ異なる文章を提示した。その後、参加者の戦争に対する態度、および米国とハヤザニアの間の戦争によって発生する死者の期待値<sup>50</sup>に関する質問を行った。次のページでは、被験者に政治的知識や被験者のデモグラフィックな情報に関する質問を行った。さらに次のページでは、被験者の関心を外に向けるため、リスクに関する考え方をめぐる質問に回答してもらった。たとえば、現在\$100を受け取るという選択肢と、10年後に\$Xを受け取るという選択肢の間で、後者の選択肢がより望ましくなるためには、Xにはどのような数字を入れることが望ましいか、といった質問を行った<sup>51</sup>。このページは、本研究の趣旨とは関係がなく、戦争に関する記事や質問文が、後のジェンダー・ステレオタイプに関する回答に影響してしまうことを避けるために挿入した。続くページでは、ジェンダー・ステレオタイプおよび人種的ステレオタイプに関する質問を行った。両質問は、米国が定期的に行っている全国世論調査である、American National Election Studiesの2004年版より引用した。最後に、続くページで、冒頭の戦争に関する記事に出ていた米国兵とハヤザニア市民の性別に関する質問を行い、本研究の後半部分の関心の中核にある、兵士や被害者のジェンダーに被験者が気がついた上で、質問に対する回答を行った、あるいは行わなかったことを確認した。

---

<sup>50</sup> Gelpi, Feaver, & Reifler (2009)は、サーベイ実験を行うことで、死傷者数の期待値が、戦争に対する支持に影響しないことを明らかにした。これまで多くの先行研究が、世論の戦争に対する支持は死傷者の数によって左右されることを示してきたが、同研究はこうした先行研究の潮流に一石を投じたものである。一方で、同研究は、死傷者の数に対する期待値を、0、1-50、50-500、500-5000、5000-50000、50000以上という、非常に偏りのある方で計測し、そのうちの約42%が、50-500人という選択をしたことに言及している(p. 104)。筆者は、こうした死傷者数の期待値を表すカテゴリーは、現実の戦争の死者数に関する報道を必ずしも反映していないと考えたため、死傷者数の期待値のカテゴリーを、0-500、501-1000、1001-2000、2001-3000、3001-4000、4001-5000、5001+と区分した。だが、死傷者数の期待値が、制御変数ではなく従属変数になってしまう可能性（すなわち、フレームによって死傷者の期待値が変化してしまう可能性）、および死傷者の国籍を明示しなかったため、紛争国と自国の死傷者の合計数の回答がされた可能性があったことに鑑み、死傷者の期待値をめぐる分析は本研究では行わなかった。

<sup>51</sup> 当該ページの質問文に関しては、Kertzer (2016)のサーベイ実験より引用を行った。

本サーベイを通して、被験者がより本心に近い回答を促すことができるように、先行研究や世論調査で用いられてきたサーベイ質問文を選択することを心掛けた。調査者にステレオタイプなどのセンシティブな質問を行う際には、被験者が「質問者に良く思われるように回答を提供する性向」、すなわち社会的望ましさが、被験者の選好を反映した真の回答の表現を妨げてしまうことが言及されてきた(Dillman, Smyth, & Christian, 2014, p. 99)。実験者と被験者の間で直接の交流が、謝礼の支払いプロセスを含めて一切なく、被験者の匿名性が保護されている本オンライン・サーベイでは、学生を対象とした実験や、対面の実験と比べて、社会的望ましさが働く可能性は低いことが予想される。それでも、被験者が実験者の意図を汲み取り、実験者の意図や社会規範に沿った回答をする可能性は否めない。

こうした中で、社会的望ましさによる回答のバイアスを最小限に抑えるためには、質問文を通して、社会的に望ましくない行為を許すことが肝要であることが指摘されてきた(Näher & Krumpal, 2012)。たとえば、投票をしたかを問う質問の前に、「多くの人には、投票に行く時間的余裕がもはやない」という一文を加えることで、回答者に自由な回答を許可することが試みられてきた(Näher & Krumpal, 2012)。一方で、Näher & Krumpal (2012)は、この許しの文脈によるはっきりとした効果を確認することはできなかった。その有効性については議論があるが、本サーベイでは、これまでの先行研究や世論調査の中から、特定の立場を否定しない質問文を選択するように心掛けた。たとえば、本サーベイでは、ジェンダー・ステレオタイプを計測する目的で、American National Election Studies の 2004 年版から女性の権利に関する立場を、1-7 のスケールで表現してもらった。ジェンダー・ステレオタイプは、社会規範と密接に関わるセンシティブな項目だが、この際には、American National Election Studies の 2004 年版が行っていたように、「...一方には、ビジネスや産業、政府で、女性は男性と対等な役割を果たすべきだとする人々がいる。...他方には、女性は家にいるべきであると感じる人々がいる。そしてもちろん、その他の人びとはこの両者の中間にいる...」と、多様な立場に配慮した文章を個別具体的な質問文の前に挿入することで、男性と女性は社会的に同等の地位にすることが望ましいとする社会規範を被験者に対して伝えないように試みた。さらに、American National Election Studies 2004 が、社会的に望ましいとされるジェンダー平等を支持する側の立場について最初に取り上げたのに対し、本研究の本実験では、「一方では、女性は家にいるべきであると感じる人がいる…。他方では、女性は男性と対等な…」と、社会的に望ましくない立場に最初に言及したほか、回答のスケールについても、社会的に望ましくない立場を左側に置くことで、被験者がよりジェンダー・ステレオタイプに対して率直な回答をするよう促した<sup>52</sup>。言うまでもなく、質問文を長くしてしまうこ

---

<sup>52</sup> Johnson (2015)は、ポジティブな回答項目をリッカート尺度の左側に設定することで、回答がよりポジティブになるバイアスがより働きやすくなることに言及している

(<https://www.questionpro.com/blog/everyone-chooses-the-answer-to-the-left-scale-order/>)。

とによって、被験者の情報の処理や理解を妨げてしまう恐れはある(Dillman et al., 2014)。だが、ステレオタイプや政治的知識といった、社会的望ましさの影響が強く疑われるセンシティブな質問については、たとえ質問文が長くなったとしても、多様な立場に対する共感を質問文を通して示すことが重要であると判断した。

また、回答者が重要な質問に対して十分な注意を払っていたか否かを検討するために、サーベイの最後には操作チェックを設けた。具体的には、兵士の性別および紛争地市民の性別が、男性・女性・不記載のいずれに当てはまるかを問い、従属変数の変動が、実験のトリートメント（たとえば、提供された文章の中で描かれた兵士の性別が女性であるか男性であるか）によるものであることを確認した。操作チェックは、参加者に対するトリートメントの割り当てが実際に行われ、実験が行われたことを確認する目的を持つ(D. C. Mutz & Pemantle, 2015)<sup>53</sup>。

本実験は6月5日から6月13日にかけて行われた<sup>54</sup>。全回答者数は1583人、サーベイ参加者の95%がサーベイを完了した。サーベイ回答に要した時間は、平均して一人あたり6分49秒であった。途中離脱をした回答者も含めた場合の回答者のデモグラフィックな情報は以下のとおりである。全回答者の43.7%が男性、55.92%が女性、0.32%がその他の性別であった。76.77%が白人もしくはコケージアン、7.98%が黒人もしくはアフリカン・アメリカン、6.95%がヒスパニック系もしくはラティーノ、6.37%がアジア系もしくはアジア系アメリカ人、0.84%がアメリカン・インディアンもしくはアラスカ系ネイティブ、0%がネイティブ・ハワイアンもしくは他の太平洋諸島民、1.03%がその他の人種であった。また、10.75%が18歳から24歳、38.61%が25歳から34歳、27.41%が35歳から44歳、11.13%が45歳から54歳、9.4%が55歳から64歳、2.7%が65歳以上であった。教育レベルについては、0.84%が高校卒業以下、12.74%が高校を卒業、35.91%が何らかのカレッジを修了、50.51%が大学学部以上を修了していた。また、9.9%が強固な共和党支持者、17.3%が共和党寄りの支持者、24.4%が支持政党を決めていない／インディペンデント、27.6%が民主党寄りの支持者、20.9%が強固な民主党支持者の立場を示した。

一方で、YouGov<sup>55</sup>を利用して行われた、成人米国人を代表する60000人を対象としたCooperative Congressional Election Study (CCES)の調査では、成人米国人について、以下の特徴が見られた<sup>56</sup>。性別については、43.05%が男性、56.95%が女性であった。人種について

---

<sup>53</sup> Mutz & Pemantle (2015)は、一貫して効果的なトリートメントは、非常に非現実的な仮定であると指摘している。

<sup>54</sup> 6月9日、6月11日にデータ収集を一時的に中断したが、全期間を通して同一条件下で実験が行われた。

<sup>55</sup> YouGovは、アメリカに拠点を置く、各団体に高く評価されているグローバルな世論調査会社である (<https://today.yougov.com/>)。

<sup>56</sup> Brian Schaffner; Stephen Ansolabehere; Sam Luks, 2019, "CCES Common Content, 2018", <https://doi.org/10.7910/DVN/ZSBZ7K>, Harvard Dataverse, V1, UNF:6:EEALXCwdxabcW2ticjwS1fQ== [fileUNF]

は、75%が白人、9.4%が黒人、8.3%がヒスパニック、3%がアジア人、0.7%がネイティブ・インディアン、2.5%が複数の人種、0.9%がその他の人種、0.2%が中東系を選択した。年齢については、10%が18歳から24歳、18.5%が25歳から34歳、16.4%が35歳から44歳、15.6%が45歳から54歳、18.5%が55歳から64歳、21%が65歳以上であった<sup>57</sup>。また、教育レベルについては、高校卒業以下が3.6%、高校卒業が27.7%、何らかのカレッジ修了（学位なし）が21.1%、2年生カレッジ修了が10%、4年生カレッジ修了が23.8%、大学院以上の学位修了が13.9%であった。支持政党については、18.9%が強固な共和党支持者、11.2%が強固ではない共和党支持者、29.4%がインディペンデント、11.4%が強固ではない民主党支持者、27.1%が強固な民主党支持者であった<sup>58</sup>。

CCESの60000人を対象とした調査でも、男性が占める割合が43.5%となっているため、この調査の数値がどこまで成人米国人を代表しているものかは必ずしも明確ではない。CCESの調査は、サンプル収集における代表性確保の難しさを示唆しているとも言えるであろう。だが、おおむね、性別・人種・教育レベルについては、著者の実験参加者のデモグラフィックな特徴と、CCESの調査の間で、大きな違いが見られないことが指摘できよう。一方で、本実験でPrime Panelsを通して収集したサンプルは、CCESの調査のサンプルと比べて、大きく民主党に偏っていた。また、年齢については、著者の実験では、CCESの調査と比べて、25歳から44歳の層の割合が2倍弱にも上り、逆に、55歳以上の層の割合は約3分の1であった。次章以降の表で見られるように、本研究では、年齢が戦争をめぐる選好に与える効果が非常に頻繁に見られた。その背景には、本実験の参加者が、極端に若い層に偏っていることや、Prime Panelsに参加した55歳以上の参加者が、特別な特徴を持っていた可能性に言及できる。こうしたことから、Prime Panelsによるデータ収集が、成人米国人を代表するサンプルを収集するために、完璧な手法であるとは言えない。だが、学生に限定したサーベイに比べると、Prime Panelsで収集したサンプルの年齢層の幅は確実に広がっているほか、特定地域で行ったサーベイよりも米国全体を代表するサンプルを収集することが容易であり、また、調査者と被調査者が直接交流することにより、被調査者の自由な回答を妨げるというリスクも回避することができる。こうしたことから、Prime Panelsは、限られた予

---

<sup>57</sup> この調査は2018年に行われ、公開されていたデータセットには、生年が含まれていた（質問項目には生年月日が含まれていた）。そのため、ここでは暫定的に、2018年から生年を引いたものとして、年齢を定義した。

<sup>58</sup> この調査では、最初に、民主党支持者・共和党支持者・インディペンデント・その他のうちどの立場なのかを問い、民主党支持者であると回答した人には、強固な民主党支持者なのか、それとも強固でない民主党支持者なのかを聞き、共和党と支持者であると回答した人には、強固な共和党支持者なのか、それとも強固でない共和党支持者なのかを聞いていた。そして、インディペンデントと回答した人には、民主党寄りなのか、共和党寄りなのか、どちらにも属さないのかを質問していた。本研究では、インディペンデントをひとくくりにインディペンデントとして扱い、各立場の割合を導き出した。

算で一定の水準を満たした多数のサンプルを収集する現実的な方法であろう。すなわち、本研究におけるデータ収集の手法は、ベストではないがベターな選択であると考えられる。

## 第五章 『美しき魂－正義の戦士』のフレームと、戦争に対する関心・世界観・選好

### 5.1. 本章の目的と仮説

本章では、勇敢な男性兵士が脆弱な犠牲者である女性を救うという、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、世論の戦争に対する関心、自国と相手国をめぐる世界観、軍事派遣をめぐる選好に影響を与えたことを、前章で詳述した実験データを用いることで実証することを試みた。そのために、本研究では、以下の四つの仮説を検証した。

仮説 1: 『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の戦争に対する関心を高めやすい。

仮説 2: 『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の敵国に対するネガティブな感情を呼び起こしやすい。

仮説 3: 『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の自国に対するポジティブな感情を呼び起こしやすい。

仮説 4: 『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の戦争に対する支持を高めやすい。

分析の結果、仮説 1 の検証の過程では、ほとんどのケースで有意差が見られなかったものの、仮説 2 から仮説 4 については、多くの場合、仮説はデータによって支持された。本章では、分析結果を述べるとともに、最初の仮説が実証されなかった理由についても考察する。

### 5.2 変数

本章では、以下の変数により、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、世論の関心・世界観・選好に影響を与えてきたことをめぐる仮説の検証を行う。

従属変数 1: 戦争に対する関心の度合い

戦争に対する関心の度合いを、実験参加者に直接五段階のスケールで尋ねた。

従属変数2：自国と他国に対する好感度

米国とハヤザニア国に対する好感度を、参加者に10ポイントのスケールで回答してもらった。数字は、1に近づけば近づくほど好ましくないと感じ、数字が10に近づけば近づくほど好ましいと感じることを表した。

従属変数3：軍事政策に対する選好

軍事派遣がどの程度うまくいっているか、軍事派遣を正当なものであったと考えるか、軍事派遣に賛成するか反対するかという三つの問いに対して、参加者に五つのスケールで回答してもらった。

独立変数:『美しき魂－正義の戦士』のフレームが戦争をめぐる語りにも用いられているか否か

独立変数は、戦争をめぐる文章が、『美しき魂－正義の戦士』のフレームによって提示されているかである。上記四つの仮説を検証するために、本研究では、三種類のフレームを参加者に提示した。一つ目と二つ目のフレームでは、女性の人権を守るために米国が仮想国家のハヤザニア国に軍隊を派遣したと述べた。その上で、一つ目のフレームでは、ハヤザニア国の抑圧状況を憂慮した米国人が軍隊に参入し、命を賭した結果、人権が守られたという語り、二つ目のフレームでは、金銭的保障やキャリアアップなどの自己利益のために軍隊に参入した米国人が命を賭した結果、人権が守られたという語りを入れた。また、一つ目のフレームでは兵士や紛争地における被害者によるパーソナルな語りを強調し（*protection vignette*、女性の保護フレーム）、二つ目のフレームでは事実焦点を当てた（*protection and self-interest vignette*、女性の保護と自己利益に焦点を当てたフレーム）。すなわち、一つ目のフレームでは、二つ目のフレームと比べて、自己利益を超えて行動する正義の戦士が美しき魂を守るというパーソナルな語りを明確にした。三つ目のフレームでは、経済権益の確保のために米国がハヤザニア国に軍隊を派遣し、金銭保障やキャリアアップのために軍隊に参入した米国人が命を賭した結果、経済的権益が守られたという語りを行った（*economic vignette*、経済フレーム）。一つ目のフレームは、『美しき魂－正義の戦士』のフレーム、二つ目のフレームは、『美しき魂－正義の戦士』のフレームのうち、他者のために命を賭すという正義の戦士の語りを弱めたもの、三つ目の経済フレームは、コントロール・グループで、『美しき魂－正義の戦士』のフレームの効果を見るための比較対象である。

制御変数:

制御変数として、Gelpi, Feaver, & Reifler(2009)などの先行研究で扱われてきた、党派性、年齢、ジェンダー、教育水準の要素を、制御変数としてモデルに組み込んだ。

### 5.3. 結果

全参加者 1583 名のうち、本仮説の検証に用いる三つのフレームに割り当てられ、操作チェックの質問に答えることのできた<sup>59</sup>590 名が、本章における分析の対象となった。回答者の平均は、政治的立場が中立から民主党寄り、10%が強固な共和党、18%が共和党寄り、22.9%がどちらの政党でもない／インディペンデント、28.3%が民主党寄り、20.7%が強固な民主党の立場を示した。全 7 カテゴリーの年齢カテゴリーは、25 歳から 34 歳と 35 歳から 44 歳の間が平均であり、10.9%が 24 歳以下、36.6%が 25 歳から 34 歳、29%が 35 歳から 44 歳、11.2%が 45 歳から 54 歳、9.2%が 55 歳から 64 歳、3.2%が 65 歳以上であった。教育レベルは、何らかのカレッジの教育を修了した層から大学学部以上を修了した層が平均的な層であり、全体の 0.3%が高校卒業以下、13.7%が高校卒業、約 35.1%が何らかのカレッジの教育を修了し、全体の 50.86%が大学学部以上を修了していた。また、参加者の 42.9%は男性であり、56.8%が女性であった。182 名が『美しき魂－正義の戦士』に則ったフレームに配分され、201 名が経済的なフレームに配分された。また、207 名が女性の保護を目的とした戦争と兵士の自己利益の追求の双方が描かれたフレームに配分された。CCES の調査と比べて、本実験の参加者は、民主党に偏っており、若く、教育水準が高いことが伺えた。

本章のすべての分析を通して、経済フレームをベースラインとし、経済フレームから別のフレームに移行することで、参加者の回答の予想される確率や加重平均が異なるのか否かを分析した。分析にあたっては、順序ロジスティクス回帰モデルを用いた。そして、有意差が見られた場合には、従属変数の各値をとる予想確率を、典型的なデモグラフィックな性質を持つカテゴリー（25 歳から 34 歳男性、民主党寄り、なんらかのカレッジ教育を修了）に属する人々について求めた。その後、予想される従属変数の加重平均が、勇敢な男性兵士が脆弱な犠牲者女性を救うという『美しき魂－正義の戦士』のフレームと経済的なフレームの間でどのように異なるのかを、典型的なデモグラフィックな性質を持つ複数のカテゴリーについて表した。

本章および次章では表や図に言及するが、これらは各章の最後に挿入している。

仮説 1: 『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の戦争に対する関心を高めやすい。

戦争に対する関心に関する質問に対する回答では、全体の約 9%が戦争に対する極度の関心を見せ、約 28%が強い関心、約 46%がいくらかの関心を見せた。

---

<sup>59</sup> 軍事派遣をした国が米国であると答えることができた参加者を、操作チェックの基準をクリアしたとして分析対象に含めた。

表1で見られるように、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが戦争に対する関心に与える影響については、有意差が見られなかった。かろうじて二番目のモデルで、経済的利益のフレームから、兵士の自己利益と女性の保護の双方の要素が入ったフレームへと移行した場合に、戦争に対する関心がより低くなることが伺えるが、ほとんどのモデルでフレームを変えることによる効果について、有意差は認められなかった ( $p \geq 0.05$ )。

また、Baum (2005)らが、政治的知識の度合いが、個人の感情や経験に焦点を当てたソフト・ニュースの効果の大きさに影響を及ぼすことを指摘していたことを鑑み、2018年の選挙以前の議会の与党と2018年の選挙以降の議会の与党の知識を有しているかどうか（二つとも回答が誤っているグループ・一つ正しい回答をしているグループ・両方回答が誤っているグループ）によって、フレームの効果を再検討した（表2）。フレームによる有意差は、一つのみ正しい回答をしたグループについてのみ  $p$  値が 0.05 を下回り、双方とも誤っていたグループ、および双方とも正しい回答をしたグループについては確認されなかった。

フレームが戦争に対する関心に与える影響の有意性がほとんどのケースで否定された理由としては、以下の二点が考えられる。第一に、戦争に対する関心の測り方が適切でなかったという可能性が考えられる。本実験では、戦争に対する関心を、「あなたの戦争に対する関心の度合いはどれくらいか」という項目を通して参加者に質問した。一方で、参加者がどれほど自身の戦争に対する関心の程度を把握し、表明することができたかについては未知数である。本実験では、参加者が全く同じ数の質問や戦争をめぐる文章を提供されることを通して、参加者間のタスクの負担の度合いやタスク完了にかかる時間を揃えることを重視した。だが、関心の度合いをより正確に測定するために、参加者に直接戦争に対する関心についての質問をする代わりに、戦争に関する記事を読んだ後に、戦争に関する記事を好きなだけクリックしてもらい、そのクリック回数を計測する等の計測方法を用いることなどを検討する必要がある。第二に、実験で提示された文章は短いもので、情報の獲得コストはそもそも低く、また、情緒的な情報も限られたものしか含まれていない。この上で、『美しき魂－正義の戦士』に沿ったフレームの、他のフレームに対する情報獲得のコスト面での優位性が顕著になりにくかった可能性が考えられる。集中力を保った状態で参加者に回答してもらうために、本研究ではあえて短い文章を用いたが、実際の新聞記事を反映したより長い文章の方が、仮説の実証により適した文章であった可能性を指摘できる。

仮説2:『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の敵国に対するネガティブな感情を呼び起こしやすい。

次に、仮説2の妥当性を検討した。ハヤザニア国の好感度について、ほとんどの回答者が、ハヤザニア国に対して「好ましく感じない」という立場を表明した。最も好ましくない

値である1から、最も好ましい値である10のうち、5以上の値を回答したのは、全体の約8%に過ぎなかった。さらに、全体の約31%が、最も好ましくない1の値を選択し、1から3までの回答を合わせると、全回答者の約68%にも及んだ。したがって、回答数は大きく好ましく感じないという回答の側に偏ったものとなった。

本仮説は、データによる支持を強く受けた。表3で見られるように、経済的利益に焦点を当てたフレームから、女性の保護に焦点を当てたフレームに移行した場合に、ハヤザニア国に対する好感度が有意に低下することが確認された ( $p < 0.001$ )。さらに、経済的利益に焦点を当てたフレームから、兵士の自己利益と女性の保護に焦点を当てたフレームに移行した場合も、ハヤザニア国に対する好感度が有意に低下することが観察された ( $p < 0.01$ )。

その上で、25歳から34歳男性で、民主党寄りの立場を示し、いくらかのカレッジ教育を修了したという典型的な回答者のカテゴリーに当てはまる人々が、ハヤザニア国に対する好感度を尋ねた時に、1から10のうちの特定の値を回答する予想確率が、両フレーム間でどのように異なるのかを検討した(図2)。その結果、1から10のほとんどすべての値について、予測される回答確率が、女性の保護のフレームと経済フレームの間で異なることが示された。女性の保護フレームを割り当てられた場合には1もしくは2を選択する確率が上昇し、3以上の回答については減少した。とりわけ、この傾向は、参加者の回答が集中した1から5の値について顕著に見られた。その中でも、ハヤザニア国に対する最も低い好感度を示す1を回答する予想確率は、女性の保護フレームと経済フレームの間でおよそ20%も異なり、女性の保護をめぐるフレームの方が、経済フレーム以上に、ハヤザニア国に対する低い好感度につながりやすいことが確認された。このように、女性の保護をめぐるフレームが、経済フレーム以上に予想される選択確率が高くなるのは、好感度1と好感度2について見られた。逆に、好感度3以降については、女性の保護フレームに比して経済フレームの方が予想される選択確率が高かった。回答者の約50%が、ハヤザニア国の好感度について1または2を選択していることを踏まえると、女性の保護をめぐるフレームが、経済フレーム以上に、ハヤザニア国に対する好感度を低下させやすいということを示すことができよう。

さらに、経済フレームを提供されるか、それとも女性の保護をめぐるフレームを提供されるのかによって、ハヤザニア国に対する好感度をめぐる回答の間で、予想される加重平均がどのように異なるのかを検討した(図3)。両加重平均の差については、六つの典型的なカテゴリー(女性/男性、共和党寄り/民主党寄り、何らかのカレッジを修了/大学学部以上を修了の区分を基にカテゴリーを作成)について求めた。さらに、有意性が強く見られた年齢によって、この予想される加重平均の差が異なるのか否かについても検討を行った。その結果、すべてのカテゴリーについて、女性の保護フレームのケースの予想される加重平均以上に、経済フレームのケースで予想される加重平均の方が、値が大きいことが明らかになった。すなわち、経済フレームに比して、女性の保護フレームの場合には、ハヤザニア国に対する好感度の加重平均が、1ポイントから0.9ポイントほど低下することが予想された。さらに、年齢が上がれば上がるほど(年齢カテゴリーの値が大きくなるほど)、両者の差は縮

まることも明らかになった。年齢が上がるほど効果が低下する理由については、年齢が上がるほど政治的立場の流動性が低下する可能性を指摘できよう。

次に、経済フレームから、女性の保護と兵士の自己利益の双方の要素を含んだフレームに移行した時に、ハヤザニア国に対する好感度の各値の予想される選択確率が、どのように変化するかを検討した（図4）。その結果、ハヤザニア国をとりわけ好ましくないと思う1もしくは2を選択する予想確率が、女性の保護と兵士の自己利益の双方のフレームの場合に、経済フレーム以上に、上昇することが確認された。また、3から8を選択する予想確率は、経済フレームの方が、女性の保護と兵士の自己利益のフレーム以上に高かった。だが、両フレームによる予想確率の差は、経済フレームと女性の保護フレームの予想確率の差と比べて、小さかった。女性の保護のみに焦点を当てたフレームに割り当てられた場合に1を選択する予想確率と、経済フレームに割り当てられた場合に1を選択する予想確率を比べた場合、20%程度前者の方が高かった。これに対し、女性の保護と兵士の自己利益に焦点を当てたフレームに割り当てられた場合に1を選択する予想確率と、経済フレームに焦点を当てたフレームに割り当てられた場合に1を選択する確率は、前者の方が高かったが、その差は10%弱にとどまった。

図5では、予想されるハヤザニア国に対する好感度の加重平均が、女性の保護と兵士の自己利益の双方の要素を含んだフレームと、経済フレームの間で、典型的な六カテゴリーについてどのように異なるのかを検討した。その結果、およそ0.6ポイント弱、女性の保護と兵士の自己利益に焦点を当てたフレームの方が、経済フレームに比べて、予想される好感度の加重平均が低くなることが確認された。経済フレームと女性の保護のみに焦点を当てたフレームの間の予想される加重平均の差は、およそ1ポイント程度であったため、女性の保護フレームの方が、女性の保護と兵士の自己利益に焦点を当てたフレーム以上に、ハヤザニア国に対する好感度を下げることが確認された。

仮説2をめぐる分析から、勇敢な兵士が脆弱な女性を救うという側面のみに焦点を当てた『美しき魂－正義の戦士』のフレームに割り当てられた場合に、自己利益に焦点を当てた経済フレーム以上に、ハヤザニア国に対する好感度が低下することが確認された。同様に、『美しき魂－正義の戦士』のフレームの正義の戦士の部分の語りを弱めた、女性の保護と兵士の自己利益の双方に焦点を当てたフレームに割り当てられた場合も、経済フレームに割り当てられた場合と比べて、敵国に対する好感度が低下したが、効果は女性の保護のみに焦点を当てたフレームに比べて小さかった。このことから、勇敢な男性兵士が脆弱な女性を救うという『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、兵士の自己利益に言及した『美しき魂－正義の戦士』を弱めたフレームや、経済的利益に焦点を当てたフレーム以上に、敵国の好感度の低下に寄与することが確認された。

仮説3:『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の自国に対するポジティブな感情を呼び起こしやすい。

実験の参加者は、ハヤザニア国に対して好ましくない感情を示したのに対し、米国に対しては好ましい感情を表明することが多かった。ハヤザニア国に対する好感度と米国に対する好感度は同一の10ポイント・スケールの指標で測られ、1の「好ましく感じない」から10の「好ましく感じる」の中から、参加者は好きな数字を選択した。ハヤザニア国に対する感情の場合は、全体の68%が1から3を選択したのに対し、米国に対する感情の場合は、1から3を選択した人々は全体の約3.6%に過ぎない。さらに、米国に対する感情について、5から8の数字を選択した人は、それぞれ約16%から17%におよび、最も好ましいと感じる値である10を選択した人も、約11%に上っている。

本仮説も、データによる支持を得た。表4は、順序ロジスティクス回帰モデルの結果を表している。表から、経済フレームから女性の保護フレームに移行した場合に、米国に対する好感度がポジティブな方向に変動することが見て取れる ( $p < 0.05$  または  $p < 0.01$ )。一方で、兵士の自己利益と女性の保護の目的の双方の情報が含まれたフレームについては、経済フレームからの移行による有意差が見られなかった ( $p \geq 0.05$ )。

上記結果を踏まえて、経済フレームから女性の保護フレームに移行した場合に、10ポイント・スケールの米国に対する好感度のうち、特定の値を選択する予想確率がどのように異なるのかを検討した。図6は、25歳から34歳男性で、民主党寄りの立場を示し、なんらかのカレッジ教育を修了したという典型的な回答者のカテゴリーに属する人々が、米国に対する好感度の値である1から10の各値を選択する予想確率が、経済フレームに割り当てられた場合と女性の保護フレームに割り当てられた場合との間で、どのように異なってくるのかを図にしたものである。仮説3に沿う形で、5以下の値（より好ましくないと感じる値）を選択する予想確率は、経済フレームに比して女性の保護フレームの場合に低下し、7以上の値（より好ましいと感じる値）を選択する予想確率は、経済フレームに比して女性の保護フレームの場合に上昇を見せ、6ではほとんど同じ予想確率を示した。

さらに、図7では、予想される米国に対する好感度の加重平均が、経済フレームと女性の保護フレームの間でどのように異なるのかを、典型的なカテゴリー（女性／男性、共和党寄り／民主党寄り、何らかのカレッジを修了／大学学部以上を修了の区分を基にカテゴリーを作成）に属する人々のケースについて、シミュレーションを用いて検討した。その結果、すべてのケースで、女性の保護フレームを割り当てられた場合、経済フレームを割り当てられた場合以上に、米国に対する好感度の予想される加重平均が、約0.6ポイント程度高くなることが確認された。また、有意性が見られた年齢ごとの加重平均の差の異なりを見たところ、年齢が高くなればなるほど、経済フレームから女性の保護フレームに移行することによる差は見られにくくなることが確認された。その一方で、年齢ごとの効果の差は、最も年齢の低いグループと最も年齢の高いグループの間で約0.1ポイント程度しか見られず、わずかなものに過ぎないことが伺えた。

仮説3をめぐり分析から、勇敢な兵士が脆弱な弱者を救うという『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、自国の利益や兵士個人の利益に焦点を当てた経済フレーム以上に、自国である米国に対する好感度を上昇させることが確認された。

仮説4:『美しき魂－正義の戦士』によってフレームされた戦争に関する情報は、合理的利害関係に焦点を当てた情報以上に、個人の戦争に対する支持を高めやすい。

本仮説の妥当性を検証するために、軍事政策をうまくいっているか／うまくいっていないか、軍事政策を正しいものであるとらえるか／誤ったものであるとらえるか、軍事政策に賛成するか／反対するか、の三つの問いに対する回答が、フレームの種類によって異なるのか否かを検討した。

まず、戦争がうまくいっているか否かという五択の問いに対しては、全体の約28%がともううまくいっていると回答し、全体の50%がうまくいっていると回答した。その上で、中立的な立場を示した人は全体の16%、悪く進んでいると回答した人は全体の約16%、非常に悪く進んでいると回答した人は全体の0.5%であった。

表5では、順序ロジスティクス回帰モデルを用い、フレームの種類によって、戦争がうまくいっているかという問いに対する回答が異なるのかを検討した。その結果、フレームの種類による有意差は認められなかった ( $p \geq 0.05$ )。

次に、戦争の選好をめぐり二番目の問いである、戦争を正当なものだと考えるかという五択の問いに対する参加者の回答が、割り当てられるフレームによって異なるのかを検討した。この問いに対しては、全体的に否定的な回答が目立った。参加者の19%が正しいと回答し、33%がいくらか正しいという回答をした。そして、30%が、正しくも誤ってもいないと回答する一方で、11%がいくらか誤っている、7%が誤っていると回答した。

表6で見られるように、軍事派遣が正しいものか否かという問いに対する回答については、フレーム間で有意差が観測された。経済フレームから女性の保護フレームに移動した場合に、軍事派遣を正しいと感じやすくなる（すなわち値が小さくなる）ことが示された ( $p < 0.001$ )。同様に、経済フレームから、女性の保護という目的と兵士の自己利益の追求を描いたフレームに移行した場合も、軍事派遣を正しいと感じやすくなることが示唆された ( $p < 0.01$ )。

その上で、経済フレームから女性の保護をめぐりフレームに移行した場合に、25歳から34歳男性で、民主党寄りの立場を示し、なんらかのカレッジ教育を修了したという典型的な回答者のカテゴリーに属する人々について、フレームの割り当てがどの程度、戦争の正答をめぐり質問に対する回答の各値をとる予想確率に影響するかという点を検討した (図8)。その結果、従属変数の五つのカテゴリーのすべてにおいて、両フレーム間で予想される確率が異なることが明らかにされた。回答の際に、「正しい(1)」もしくは「いくらか

正しい (2) 」を選ぶ予想確率は、女性の保護をめぐるフレームの場合に、経済的利益をめぐるフレームと比べて、おおよそ 10% も高くなっている。また、「状況による / 中立 (3) 」、「いくらか誤っている (4) 」、「誤っている (5) 」と回答する予想確率も、女性の保護フレームの場合には、経済フレームと比して、10% 弱程低くなっている。

さらに、図 9 では、典型的な 6 カテゴリーに属する人々 (女性 / 男性、共和党寄り / 民主党寄り、何らかのカレッジを修了 / 大学学部以上を修了の区分を基にカテゴリーを作成) の回答の予想される加重平均が、経済フレームと女性の保護フレームのいずれを割り当てられるかで異なるのかを検討した。その結果、すべてのカテゴリーについて、女性の保護フレームを割り当てられた場合に、経済フレームに比べて、約 0.5 ポイント前後、軍事派遣を正当なものだととらえやすくなることが解明された。また、以前の変数で見てきたのと同様、年齢が上がるにつれて、フレームの効果が減退することも確認された。

同様に、図 10 では、25 歳から 34 歳男性で、民主党寄りの立場を示し、いくらかのカレッジ教育を修了したという典型的な回答者のカテゴリーに属する人々が、経済フレームから女性の保護と兵士の自己利益の双方に焦点を当てたフレームに移行することで、軍事派遣の正当性をめぐる問いに対する回答の各値を選択する予想確率がどのように変容するのかを検討した。その結果、女性の保護と兵士の自己利益に焦点を当てたフレームが割り当てられた場合に、経済フレームに比して、軍事派遣を正当だと考える確率が高くなることが確認された。すなわち、五つの回答のうち、「正しい (1) 」および「いくらか正しい (2) 」を選択する予想確率は、女性の保護と兵士の自己利益に焦点を当てたフレームに割り当てられた場合、約 5% 上昇することが示された。その一方で、「場合による / 中立 (3) 」、「いくらか誤っている (4) 」、「誤っている (5) 」を選択する確率は、女性の保護と兵士の自己利益の双方を含んだフレームに割り当てられた場合に、5% 弱低下することが明らかにされた。一方で、両フレーム間の差は、女性の保護のみに焦点を当てたフレームと経済フレームの差に比べて約半分にとどまった。

また、図 11 では、女性の保護と兵士の自己利益の双方を含んだフレームに割り当てられた場合の軍事派遣の正当性をめぐる問いに対する回答の値の予想される加重平均と、経済フレームに割り当てられた場合の回答の予想される加重平均の差を、典型的なカテゴリーに属する人々について検討した。その結果、前者のフレームに割り当てられた場合に、経済フレームに割り当てられた場合と比べて、約 0.3 ポイント、予想される加重平均が低下する (すなわち軍事派遣を正当であるとする立場に近づく) ことが示された。また、年齢による効果の差は見られなかった。一方で、両フレーム間の予想される加重平均の差は、女性の保護のみに焦点を当てたフレームと経済フレームの間の予想される加重平均の差である約 0.5 ポイントよりも小さいものであった。

これらの分析から、女性の保護フレームを割り当てられた場合に、経済フレームに割り当てられた場合以上に、世論が軍事派遣を政党だと感じやすくなることが確認された。また、

女性の保護と兵士の自己利益の双方に焦点を当てたフレームについても同様の効果が確認されたが、女性の保護のみに焦点を当てたフレームと比べて、効果は限られたものであった。

最後に、現在の軍事政策に賛同するか、それとも反対するかという問いに対する回答が、フレームの割り当てに影響されるかという点を検討した。この質問においては、回答者の約10%が軍事政策に対する賛同を強く表明し、約32%が賛同を表明する一方で、約24%が反対、約11%が強い反対の立場を見せた。

表7に見られるように、順序ロジスティクス回帰モデルを用いて検討したところ、経済フレームから女性の保護フレームに移行した場合、また、経済フレームから女性の保護と兵士の自己利益の双方を含んだフレームに移行した場合のそれぞれで、有意差が認められた（前者については $p < 0.001$ 、後者については $p < 0.05$ もしくは $p < 0.01$ ）。双方のケースについて、経済フレームに比べて、他の二つのフレームは、戦争に対する支持を高める（従属変数の値が小さくなる）ことが確認された。

次に、図12を通して、支持から不支持までの五段階の値をとる従属変数のうちの、特定の値を参加者が選択する予想確率が、経済フレームと女性の保護フレームのいずれを割り当てられるのかによって異なるのか否かを検討した。その結果、25歳から34歳男性で、民主党寄りの立場を示し、いくらかのカレッジ教育を修了したという典型的な回答者のカテゴリーに属する人々について、従属変数の五つの値のすべてについて、両フレームの割り当てが、値を選択する予想確率を変容させることが確認された。「強固に支持（1）」から「支持も反対もしない／支持も反対もする（3）」の値を選択する予想確率は、経済フレームと比べて女性の保護フレームの場合で高くなった。反対に、「強固ではないが反対（4）」もしくは「強固に反対（5）」の値を選択する確率は、経済フレームの場合に女性フレームの場合と比して高くなった。上記で見た軍事派遣の正当性に比べ、予想確率のフレーム間の差は大きく、とりわけ、「強固にではないが支持」、「強固にではないが反対」、「強固に反対」の値を選択する予想確率は、両フレーム間でおおよそ10%以上の開きが見られた。

また、図13では、従属変数の値の予想される加重平均が、女性の保護フレームを割り当てられた場合と経済フレームを割り当てられた場合の間で、どのように異なるのかを、六つの典型的なカテゴリーに属する人々の場合について検討した。その結果、すべてのカテゴリーについて、経済フレームに比して女性の保護フレームでは、約0.5ポイントから約0.6ポイント程度、軍事政策に対する支持が高まることが確認された。また、年齢による予想される加重平均の差の効果は見られなかった。

図14では、女性の保護と兵士の自己利益の双方の要素を含んだフレームに割り当てられた場合と、経済フレームに割り当てられた場合で、どのように従属変数の各値をとる予想確率が変わるのかを、25歳から34歳男性で、民主党寄りの立場を示し、いくらかのカレッジ教育を修了したという典型的な回答者のカテゴリーに属する人々について検討した。その結果、従属変数のすべての値について、予想される選択確率を変容することが確認された。経

済フレームを割り当てられた場合と比して、女性の保護と兵士の自己利益の双方を含んだフレームを割り当てられた場合に、「強固に支持（1）」、「強固ではないが支持（2）」、「支持も反対もしない／支持も反対もする（3）」をとる予想確率の上昇が見られた。また、「強固ではないが反対（4）」もしくは「強固に反対（5）」の値をとる予想確率は、女性の保護と兵士の自己利益に焦点を当てたフレームに割り当てられた場合の方が、経済フレームに割り当てられた場合と比べて低かった。一方で、女性の保護のみに焦点を当てたフレームと経済フレームの間では、値によっては予想確率が約10%以上も変化したのに対し、女性の保護と兵士の自己利益に焦点を当てたフレームと経済フレームの間の予想確率の差は、いずれの値についても10%未満であった。

最後に、図15では、女性の保護と兵士の自己利益を描いたフレームに割り当てられた場合と、経済フレームを割り当てられた場合で、従属変数の予想される加重平均が異なるのかを、典型的な六カテゴリーに属する場合について検証した。その結果、女性の兵士と兵士の自己利益のフレームに割り当てられた場合、経済フレームに割り当てられた場合と比して、0.3ポイント弱、予想される加重平均の値が小さくなる（すなわち支持の側に近づく）ことが確認された。年齢による効果の差異はほとんど見られなかった。また、女性の保護のみに焦点を当てたフレームに割り当てられた場合と経済フレームに割り当てられた場合の予想される加重平均の差が約0.5から0.6ポイントであったのに対し、女性の保護と兵士の自己利益の双方に焦点を当てたフレームに割り当てられた場合と経済フレームに割り当てられた場合の予想される加重平均の差は0.3ポイントと、女性の保護と自己利益の双方に焦点を当てた場合には限定的な効果しか見られないことも確認された。

仮説4をめぐる分析から、女性の保護フレーム、および女性の保護と兵士の自己利益の双方に焦点を当てたフレームに割り当てられた場合には、経済フレームに割り当てられた場合と比べて、軍事派遣をより正当な行為としてとらえやすくなり、軍事派遣を支持しやすくなることが解明された。一方で、他者を救うという動機と結果のみに焦点を当てた、『美しき魂－正義の戦士』のフレームである女性の保護フレームの効果は、『美しき魂－正義の戦士』のフレームの効果をも弱めた、女性の保護と兵士の自己利益の双方に焦点を当てたフレーム以上に大きいものであった。

#### 5.4. 小括

本章を通して、戦争に対する関心をめぐる仮説を除くすべての仮説が、データによって支持されたことが確認された。『美しき魂－正義の戦士』のフレームである女性の保護フレームを割り当てられた場合は経済フレームに割り当てられた場合と比して、敵国に対する好感度が低下し、自国に対する好感度が上昇し、軍事派遣を正しいと考え、軍事派遣を支持する

傾向にあることが明らかになった。また、『美しき魂－正義の戦士』のフレームのうち、正義の戦士の語りを弱めたフレームである、女性の保護と兵士の自己利益を描いたフレームに割り当てられた場合には、経済フレームに割り当てられた場合と比して、紛争国に対する好感度が低下し、軍事派遣を正しいものであると考え、軍事派遣を支持する傾向にあることが解明された。だが、女性の保護と兵士の自己利益の双方に焦点を当てたフレームと経済フレームの間で見られる差に比べて、女性の保護のみに焦点を当てたフレームと経済フレームの間で見られる差は小さかった。これらの分析から、『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、参加者の戦争に対する関心を高めこそしないものの、自国と相手国を敵と味方に分け、敵に対する軍事派遣を正当で好ましいものだと考える確率を高めることが示された。

一方で、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、世論の戦争に対する関心を高めるといふ仮説1が実証されなかった理由としては、以下の二点の可能性が考えられた。第一に、本実験で提供された文章は単純かつ非常に短いものであったため、経済フレームでもその他のフレームでも、認知面での獲得コストが低かった可能性が考えられる。この可能性を排除して因果関係を実証するために、実際の新聞の誌面で用いられる長さの文章を提示し、『美しき魂－正義の戦士』のフレームの影響力を検討することが、今後の研究では必要となつてこよう。第二に、世論の関心の計測の仕方が不十分であった可能性があった。本実験では、参加者に対して直接的に、戦争にどの程度の関心を持ったのかを聞いた。だが、参加者が、自身の関心の程度を把握していたのか、また、参加者間で関心の程度の各値が同じ意味をもっていたのか（すなわち、複数の個人の「極めて関心がある」は同じ意味を持っていたのか）は未知数である。こうしたことを踏まえて、今後の研究では、今回と同様に戦争に関する文章を提供した後に、再度戦争に関する文章を複数提供して、参加者に好きなだけ記事を読むことを促した上で、参加者が読んだ文章の数や、参加者が文章を読むために費やした時間を計測し、これらの変数を、戦争に対する関心を表す従属変数として用いる等の工夫が必要となつてこよう。また、同一の参加者に、『美しき魂－正義の戦士』のフレームによる文章と、経済フレームによる文章の双方を提供し、それぞれのフレームの直後に関心の度合いを質問した上で、両回答を比べることで、フレーム間の影響力の差をより正確に測ることができよう。

表 1

What is your level of interest in war?

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	Interest in War				
interest_war					
v_protection	0.0119 (0.06)	0.114 (0.60)	-0.0216 (-0.11)	-0.0121 (-0.06)	0.0243 (0.13)
v_prot_self_interest	0.335 (1.79)	0.393* (2.11)	0.330 (1.78)	0.300 (1.61)	0.343 (1.83)
party	-0.103 (-1.68)	-0.0653 (-1.08)	-0.0825 (-1.35)	-0.103 (-1.68)	
age	-0.303*** (-4.63)		-0.246*** (-3.84)	-0.306*** (-4.67)	-0.288*** (-4.45)
male	-0.939*** (-5.85)	-0.832*** (-5.27)		-0.938*** (-5.84)	-0.923*** (-5.76)
education	-0.204 (-1.90)	-0.216* (-2.02)	-0.202 (-1.90)		-0.204 (-1.90)
N	590	590	590	590	590

t statistics in parentheses

v\_protection: 1 = protection vignette, 0 = prot\_self\_interest/econ types of vignette

v\_prot\_self\_interest: 1 = prot\_self\_interest vignette, 0 = protection/econ types of vignette

1 = Extremely interested, 2 = Very interested, 3 = Somewhat interested, 4 = Not so interested, 5 = Not at all interested

Ordered logistic regression model

Baseline: Economic vignette

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表 2

What would you say is your level of interest in war?

	(1) interest_war	(2) interest_war	(3) interest_war
interest_war			
v_protection	-0.249 (-0.95)	0.489 (1.34)	-0.248 (-0.51)
v_prot_self_interest	0.133 (0.50)	0.713* (2.05)	0.116 (0.26)
party	-0.136 (-1.61)	0.0389 (0.34)	-0.141 (-0.82)
age	-0.173* (-2.00)	-0.439*** (-3.33)	-0.261 (-1.27)
male	-1.014*** (-4.53)	-0.725* (-2.32)	-0.893* (-2.28)
education	-0.0491 (-0.32)	-0.174 (-0.89)	-0.431 (-1.59)
N	305	178	107

t statistics in parentheses

v\_protection: 1 = protection vignette, 0 = prot\_self\_interest/econ types of vignette

v\_prot\_self\_interest: 1 = prot\_self\_interest vignette, 0 = protection/econ types of vignette

1 = Extremely interested, 2 = Very interested, 3 = Somewhat interested, 4 = Not so interested, 5 = Not at all interested

ordered logistic regression model

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表 3

Feeling toward Hayazania

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	Feeling toward Hayazania				
feeling_Hayazania					
v_protection	-1.036*** (-5.54)	-0.995*** (-5.37)	-1.035*** (-5.54)	-1.043*** (-5.60)	-1.044*** (-5.59)
v_prot_self_interest	-0.525** (-2.95)	-0.497** (-2.81)	-0.525** (-2.95)	-0.533** (-3.00)	-0.526** (-2.96)
party	0.0507 (0.85)	0.0633 (1.07)	0.0502 (0.84)	0.0505 (0.85)	
age	-0.103 (-1.70)		-0.105 (-1.73)	-0.105 (-1.73)	-0.109 (-1.82)
male	0.0400 (0.27)	0.0638 (0.43)		0.0381 (0.26)	0.0361 (0.24)
education	-0.0469 (-0.46)	-0.0562 (-0.55)	-0.0462 (-0.45)		-0.0463 (-0.45)
N	590	590	590	590	590

10-point scale, 1 = don't feel favorable, 10 = feel favorable

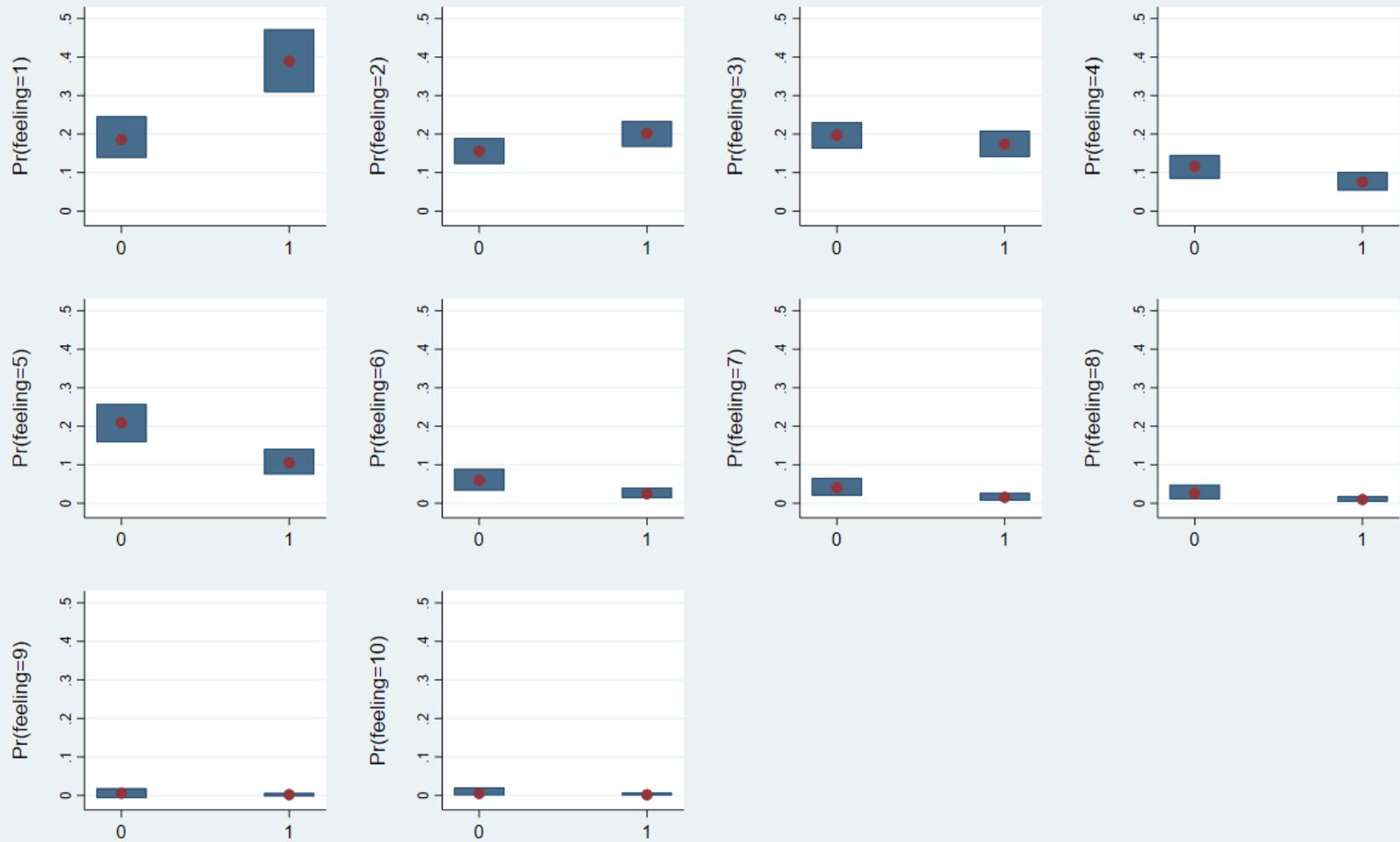
v\_protection: 1 = protection vignette, 0 = prot\_self\_interest/econ types of vignette

v\_prot\_self\_interest: 1 = prot\_self\_interest vignette, 0 = protection/econ types of vignette

Ordered logistic regression

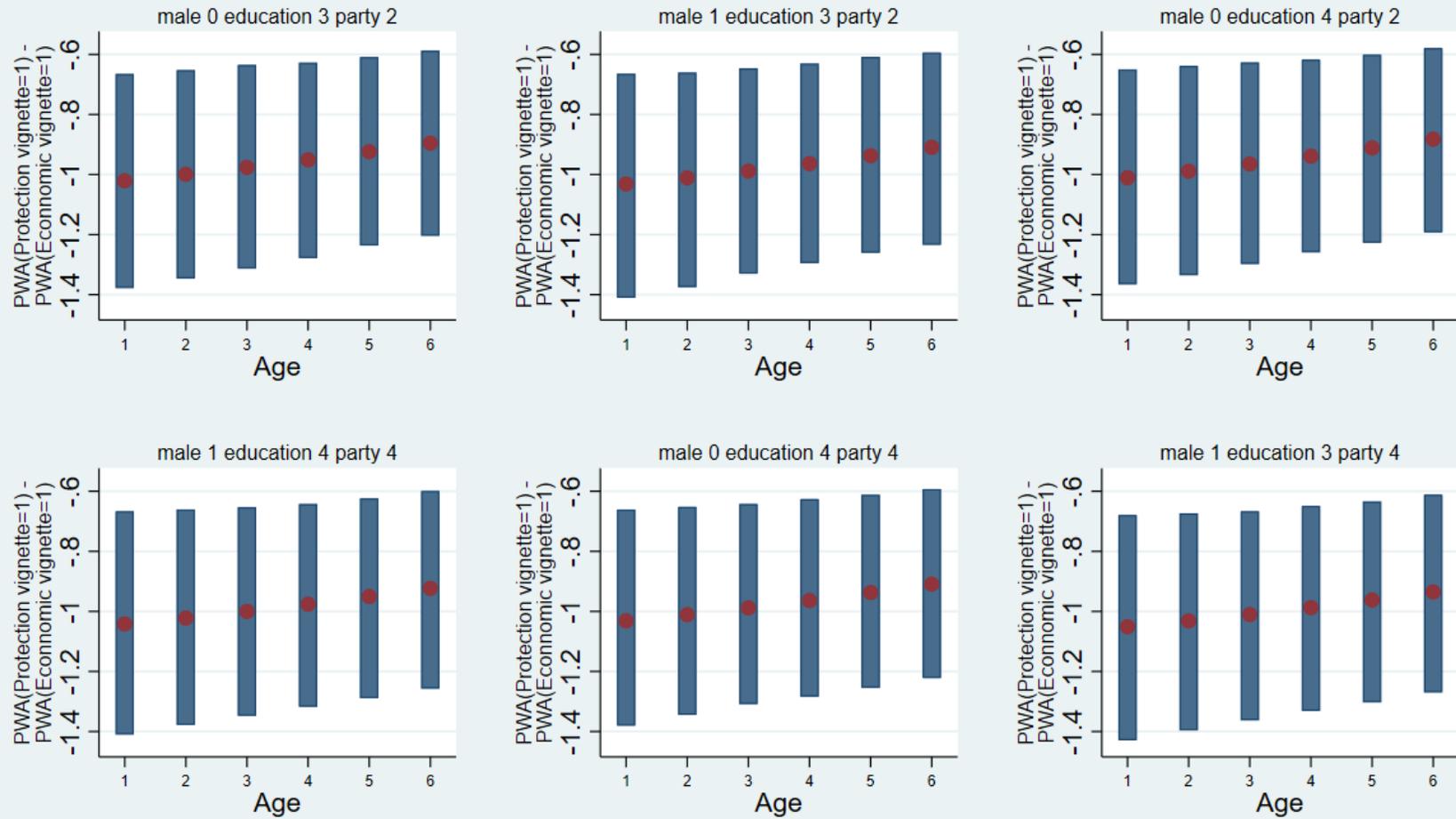
\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

図 2 : Probability of feeling toward Hayazania



Axis: Protection\_vignette = 1, Econ\_vignette = 0  
Feeling: 10-point scale (1-10), 1 = don't feel favorable - 10 = feel favorable  
25-34 years old, Male, Some college education completed, Leans Democrat

図 3 : Difference in predicted weighted average of feeling toward Hayazania  
 $PWA(\text{Protection vignette}=1) - PWA(\text{Economic vignette}=1)$



Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+

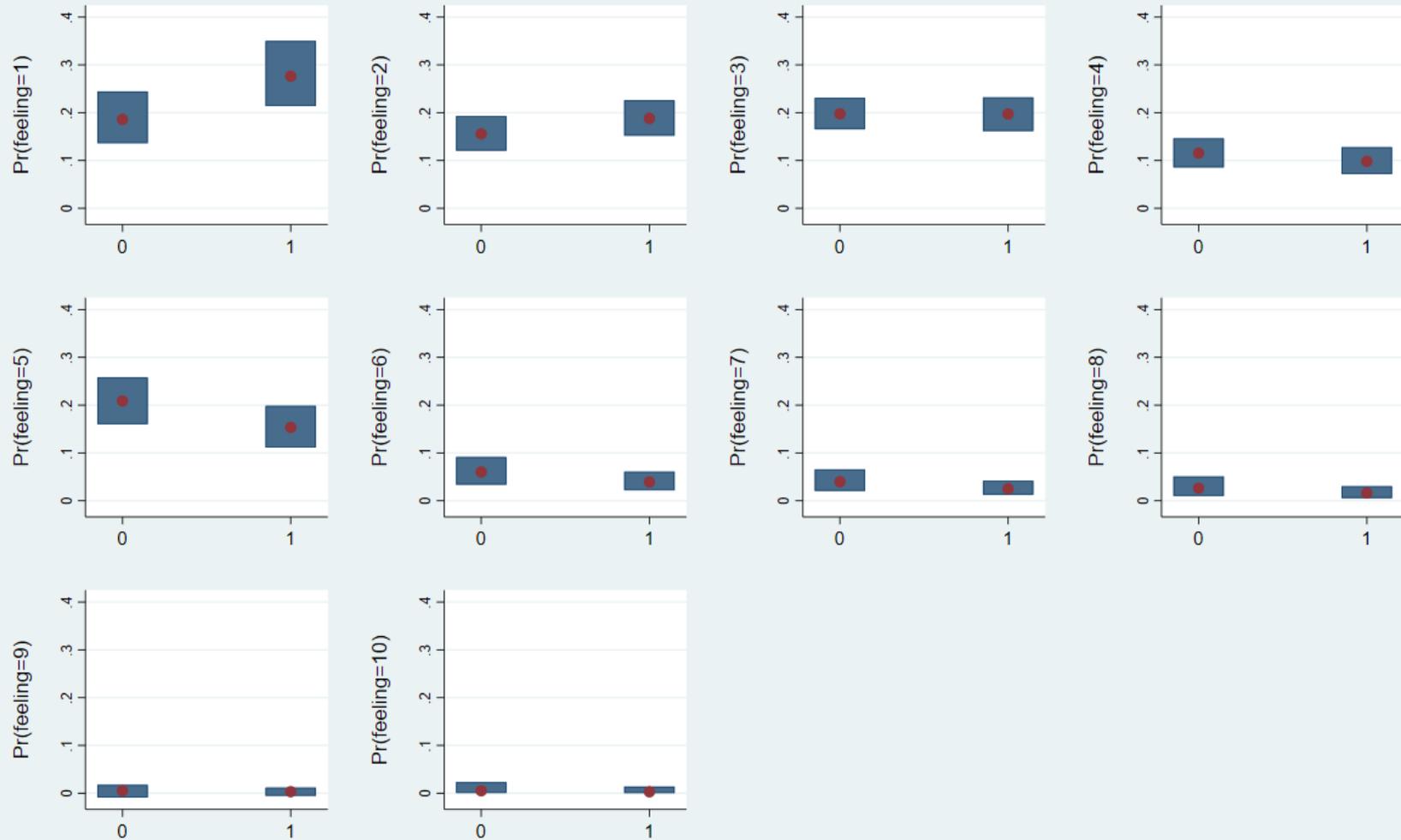
Feeling: 10-point scale (1-10), 1= don't feel favorable - 10 = feel favorable

Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat

Male: 1=male, 0=female/other

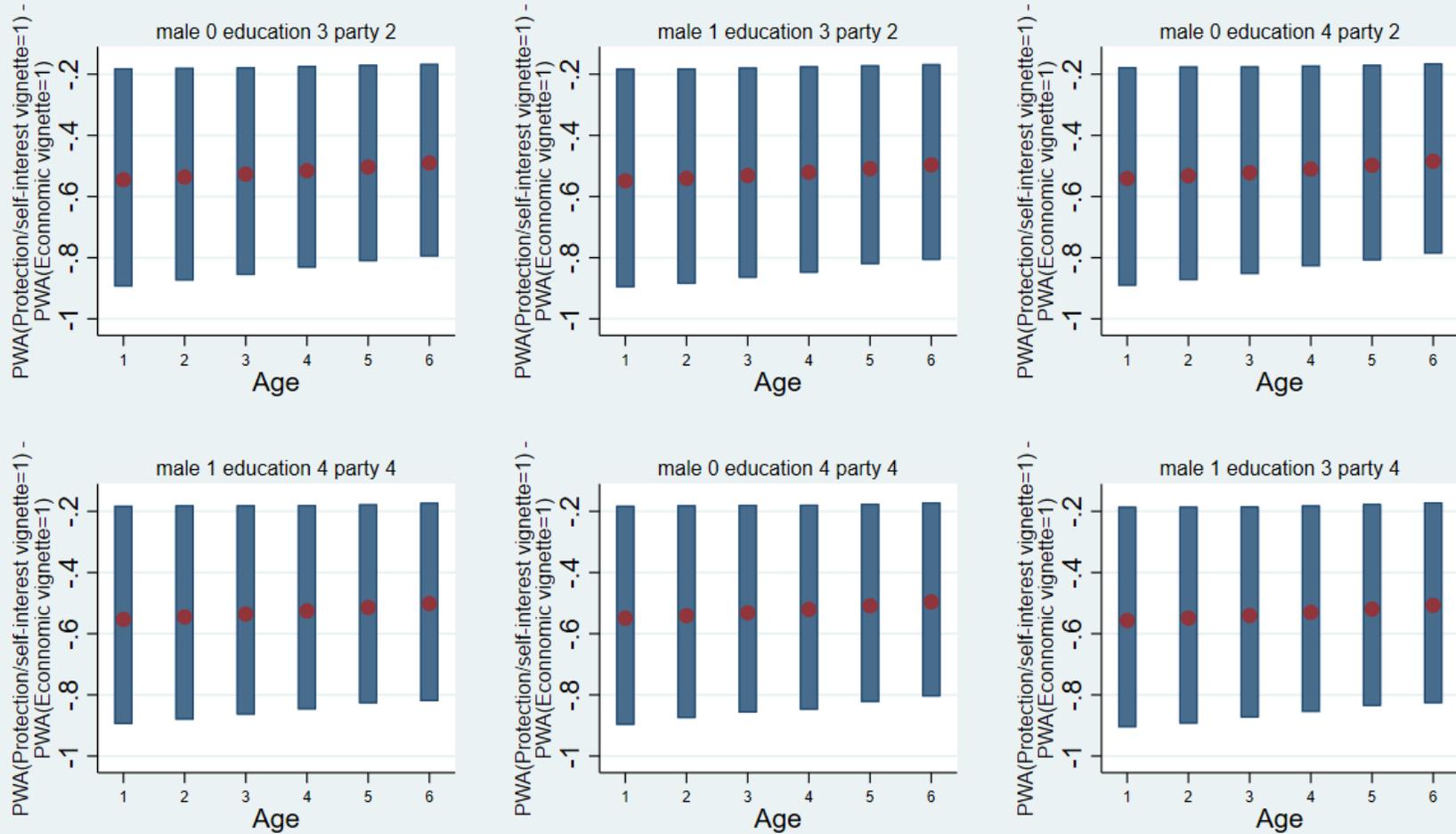
Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

図 4 : Probability of feeling toward Hayazania



Axis: Protection/self-interest vignette = 1, Econ vignette = 0  
Feeling: 10-point scale (1-10), 1= don't feel favorable - 10 = feel favorable  
25-34 years old, Male, Some college education completed, Leans Democrat

図 5 : Difference in predicted weighted average of feeling toward Hayazania  
 $PWA(\text{Protection/self-interest vignette}=1) - PWA(\text{Economic vignette}=1)$



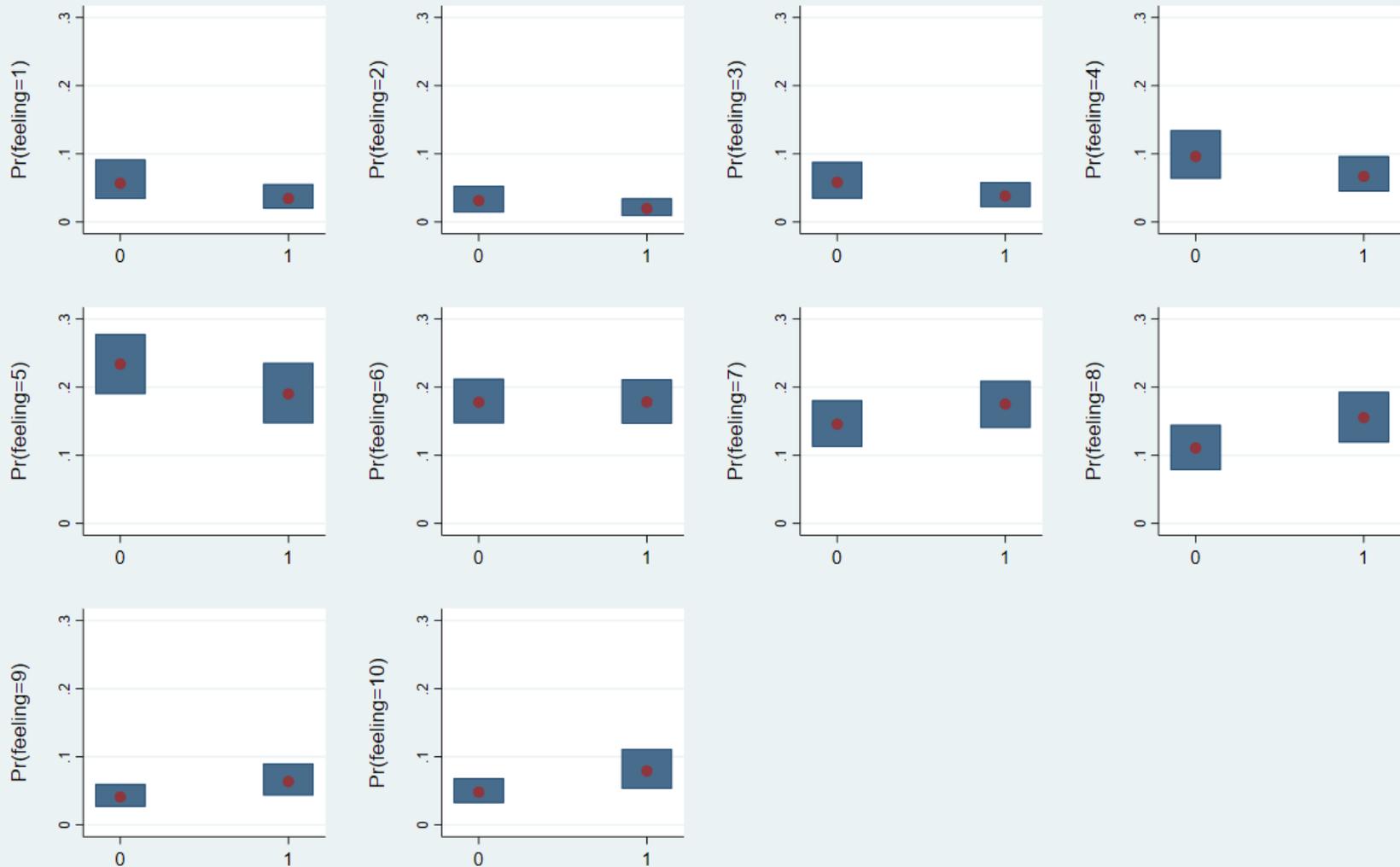
Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+  
 Feeling: 10-point scale (1-10), 1= don't feel favorable - 10 = feel favorable  
 Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat  
 Male: 1=male, 0=female/other  
 Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

表4: Feeling toward the US

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	Feeling toward the US				
feeling_US					
v_protection	0.544** (2.94)	0.438* (2.39)	0.544** (2.95)	0.563** (3.05)	0.566** (3.06)
v_prot_self_interest	0.196 (1.12)	0.105 (0.61)	0.197 (1.12)	0.221 (1.27)	0.224 (1.29)
party	-0.392*** (-6.54)	-0.416*** (-6.97)	-0.392*** (-6.54)	-0.391*** (-6.51)	
age	0.272*** (4.53)		0.271*** (4.55)	0.276*** (4.61)	0.308*** (5.14)
male	0.0102 (0.07)	-0.0655 (-0.45)		0.0122 (0.08)	0.0517 (0.35)
education	0.133 (1.31)	0.158 (1.56)	0.133 (1.31)		0.119 (1.17)
N	590	590	590	590	590

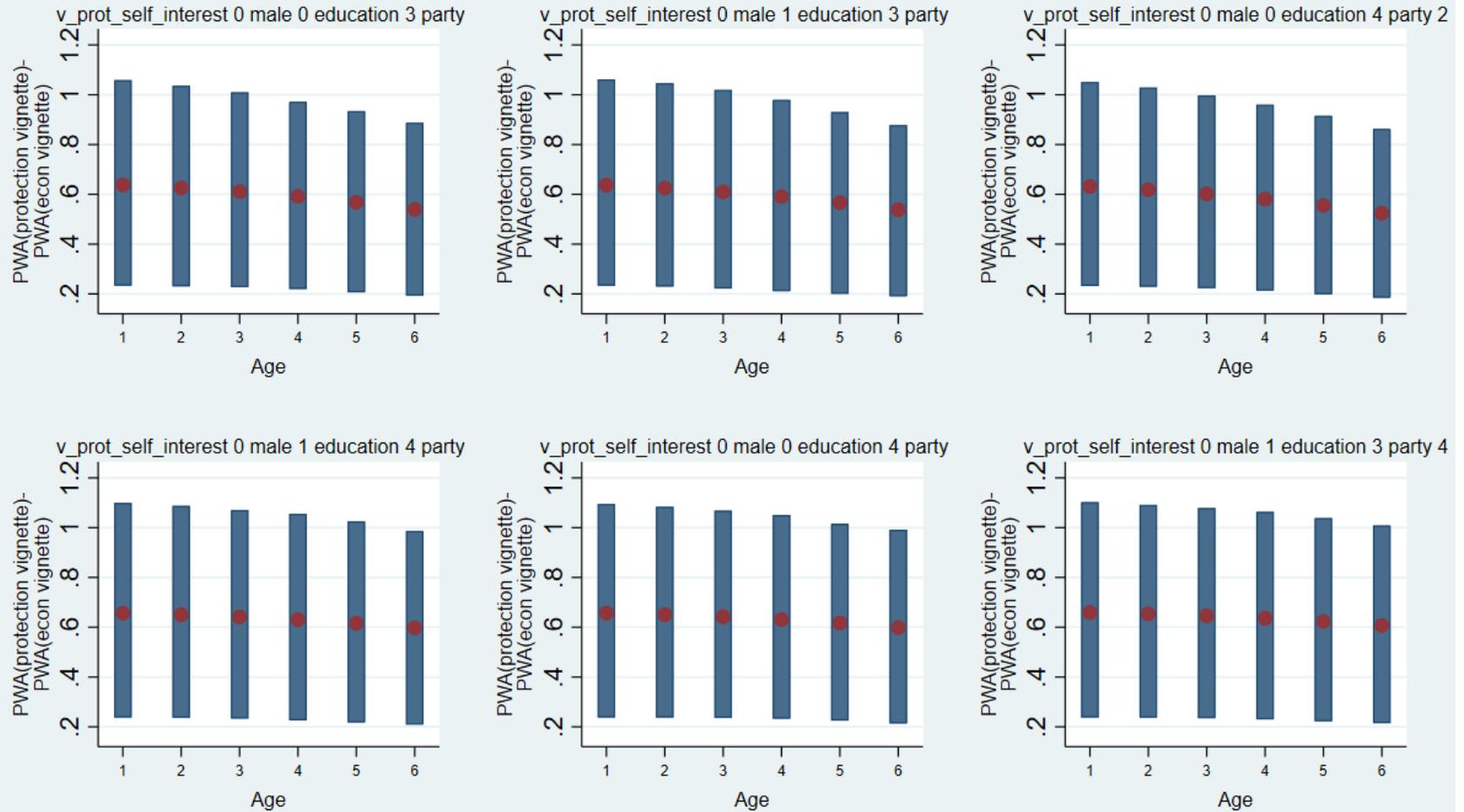
Feeling toward the US: 10-point scale (1-10), 1 = don't feel favorable, 10 = feel favorable  
v\_protection: 1 = protection vignette, 0 = prot\_self\_interest/econ types of vignette  
v\_prot\_self\_interest: 1 = prot\_self\_interest vignette, 0 = protection/econ types of vignette  
Ordered logistic regression  
\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

図 6 : Probability of feeling toward the US



X-axis: 1 = Protection vignette, 0 = Economic vignette  
25-34 years old, Male, Some college education completed, Leans Democrat

図 7 : Difference in predicted weighted average of feeling toward the US  
PWA(Protection vignette) - PWA(Econ vignette)



Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+  
 Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat  
 Male: 1=male, 0=female/other  
 Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

表5: How well is the U.S. military campaign going?

	(1)	(2) Well-Bad	(3)	(4)	(5)
well_bad					
v_protection	-0.0320 (-0.17)	0.0505 (0.26)	-0.0324 (-0.17)	-0.0419 (-0.22)	-0.0431 (-0.22)
v_prot_self_interest	-0.283 (-1.48)	-0.233 (-1.22)	-0.281 (-1.47)	-0.296 (-1.55)	-0.283 (-1.48)
party	0.0744 (1.18)	0.109 (1.76)	0.0754 (1.20)	0.0733 (1.17)	
age	-0.220*** (-3.36)		-0.218*** (-3.34)	-0.223*** (-3.40)	-0.233*** (-3.60)
male	-0.0530 (-0.34)	0.00797 (0.05)		-0.0565 (-0.36)	-0.0620 (-0.39)
education	-0.0856 (-0.79)	-0.103 (-0.95)	-0.0866 (-0.80)		-0.0827 (-0.76)
N	590	590	590	590	590

5-point scale, 1 = Very well, 2 = Well, 3 = Neutral, 4 = Bad, 5 = Very bad

v\_protection: 1 = protection vignette, 0 = prot\_self\_interest/econ types of vignette

v\_prot\_self\_interest: 1 = prot\_self\_interest vignette, 0 = protection/econ types of vignette

Ordered logistic regression model

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表6: Do you think the decision to dispatch the military was the right thing?

	(1)	(2) Right - Wrong	(3)	(4)	(5)
right_wrong					
v_protection	-0.886*** (-4.67)	-0.868*** (-4.59)	-0.883*** (-4.66)	-0.872*** (-4.61)	-0.903*** (-4.76)
v_prot_self_interest	-0.494** (-2.74)	-0.483** (-2.68)	-0.497** (-2.75)	-0.476** (-2.66)	-0.497** (-2.76)
party	0.163** (2.66)	0.173** (2.86)	0.159** (2.60)	0.163** (2.66)	
age	-0.0630 (-1.01)		-0.0713 (-1.15)	-0.0598 (-0.95)	-0.0905 (-1.46)
male	0.173 (1.14)	0.191 (1.26)		0.179 (1.18)	0.152 (1.00)
education	0.0914 (0.88)	0.0852 (0.82)	0.0964 (0.93)		0.0929 (0.90)
N	590	590	590	590	590

5-point scale, 1 = Right, 2 = Somewhat right, 3 = Depends/Neutral, 4 = Somewhat wrong, 5 = Wrong

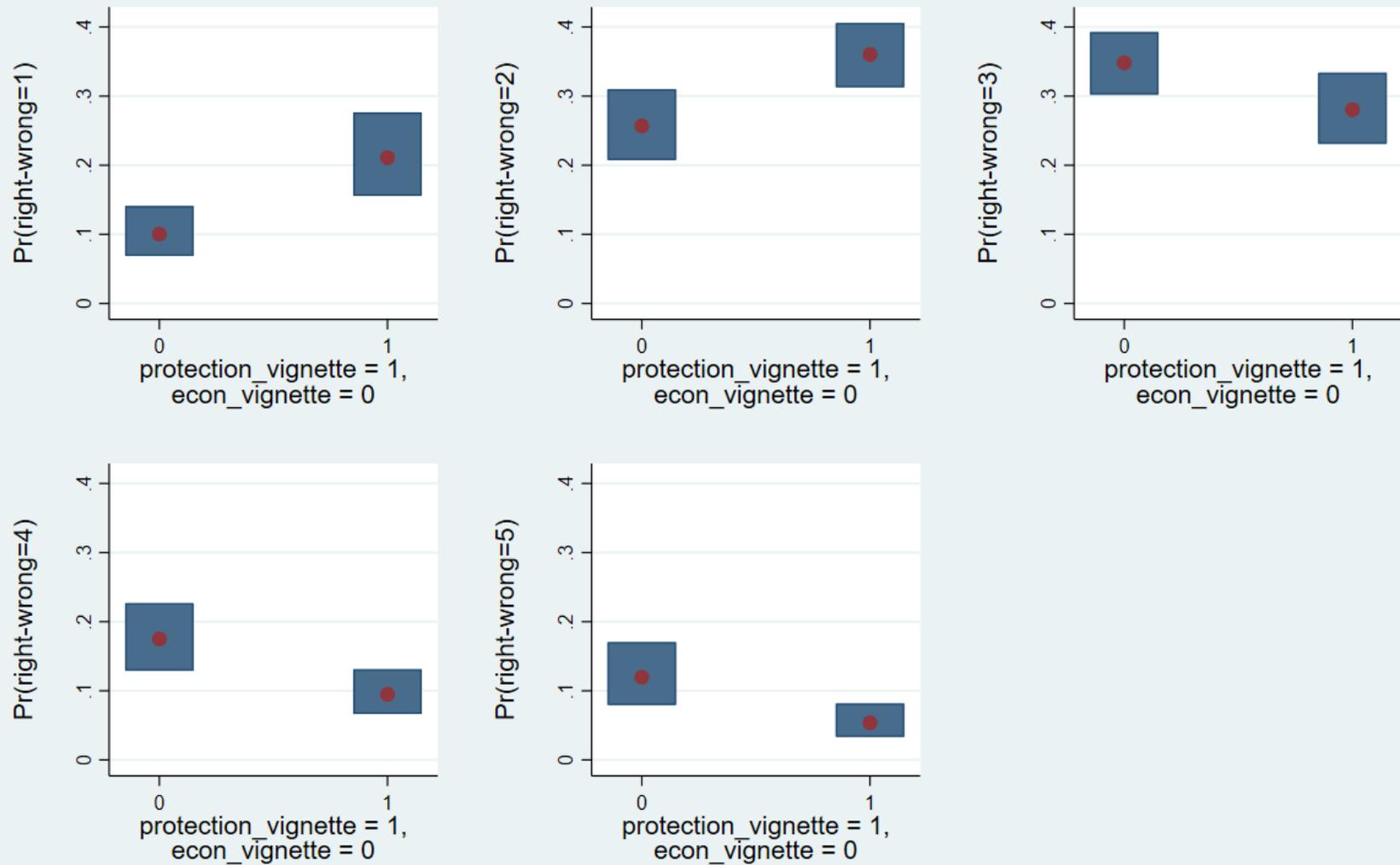
v\_protection: 1 = protection vignette, 0 = prot\_self\_interest/econ types of vignette

v\_prot\_self\_interest: 1 = prot\_self\_interest vignette, 0 = protection/econ types of vignette ordered

logistic regression model

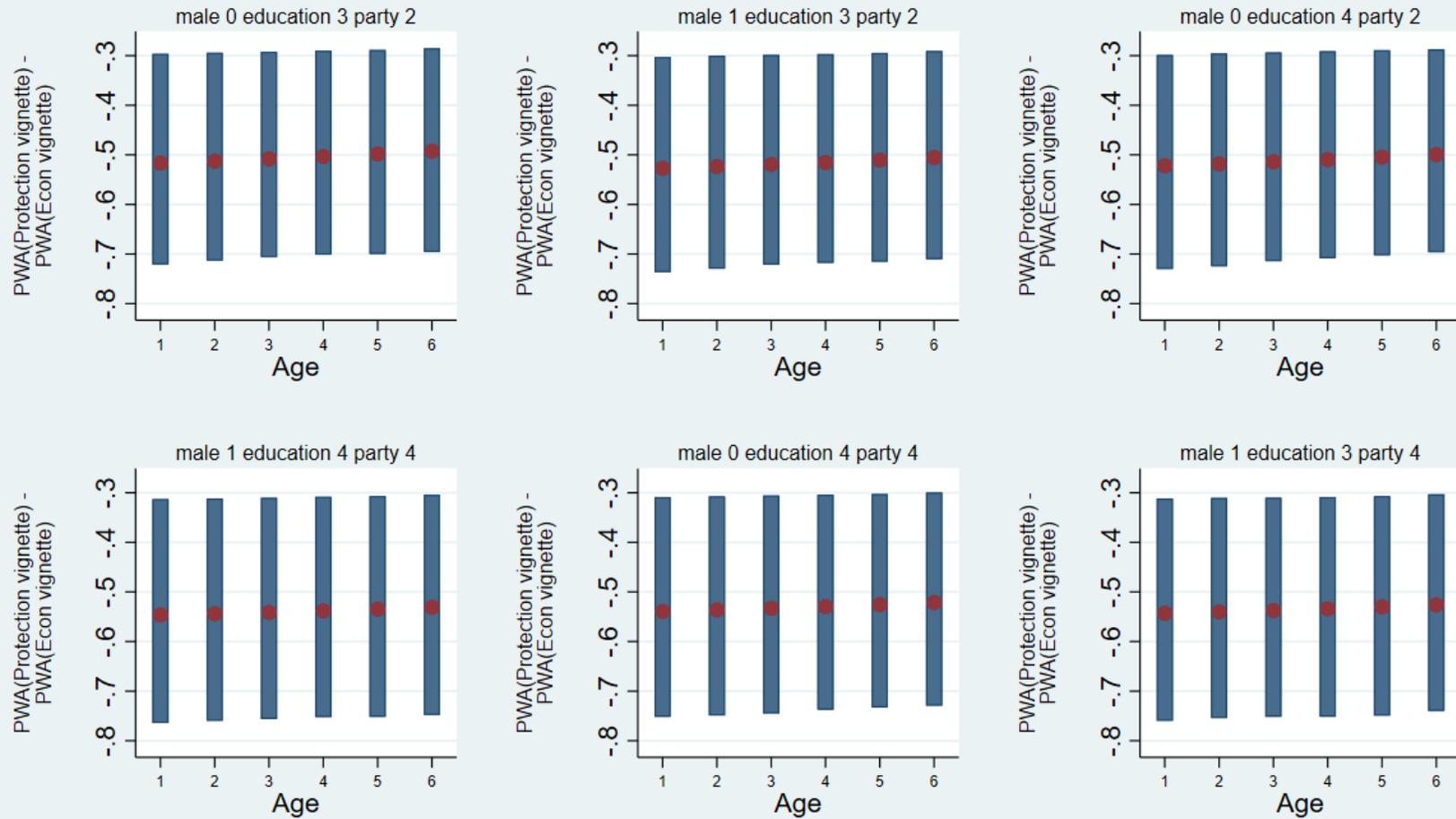
\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

図 8 : Probability of thinking right/wrong



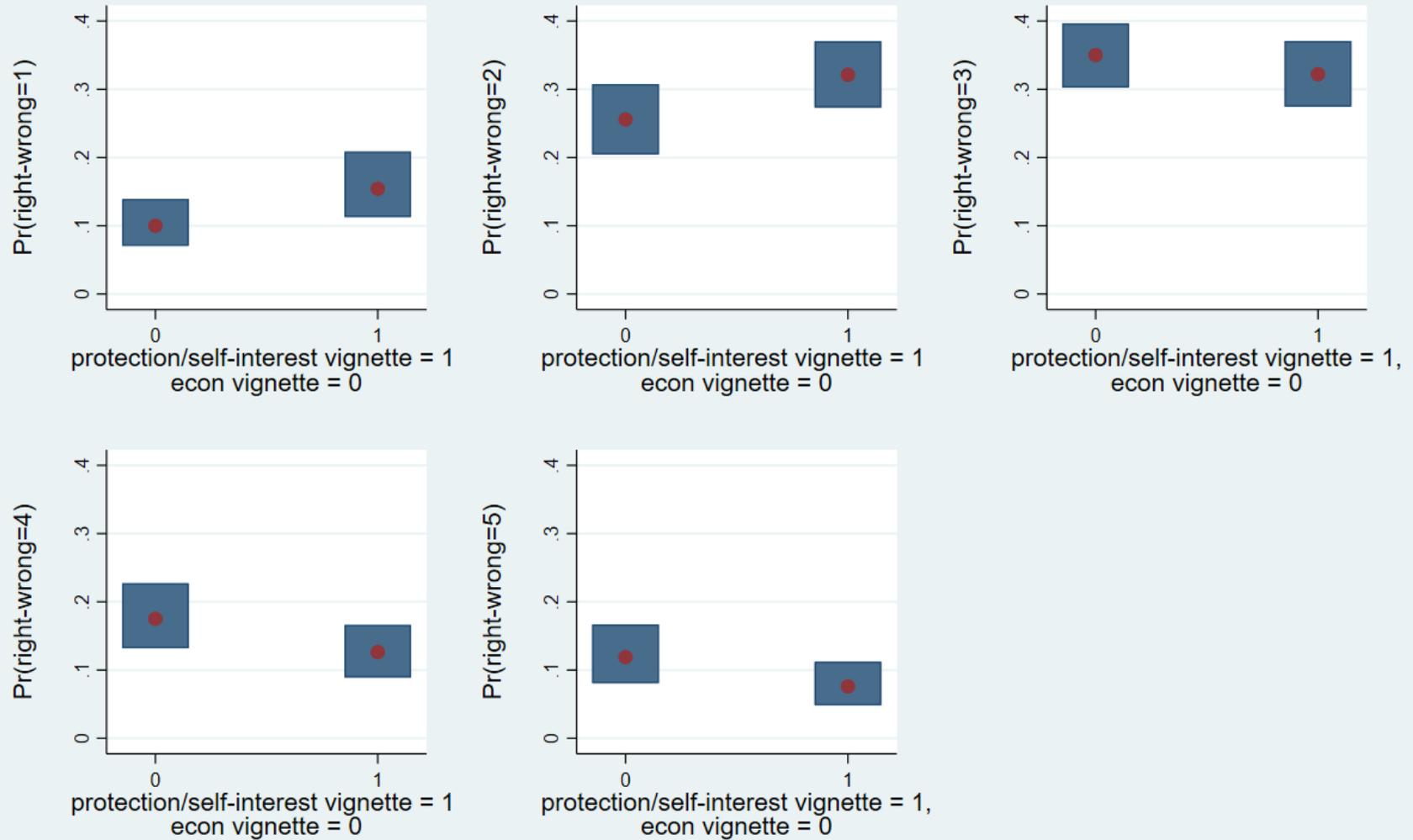
Right-Wrong: 1=Right, 2=Smewhat right, 3=Depends/Neutral, 4=Somewhat wrong, 5=Wrong  
 25-34 years old, Male, Some college education completed, Leans Democrat

図 9 : Difference in predicted weighted average of right/wrong  
PWA(Protection vignette) - PWA(Econ vignette)



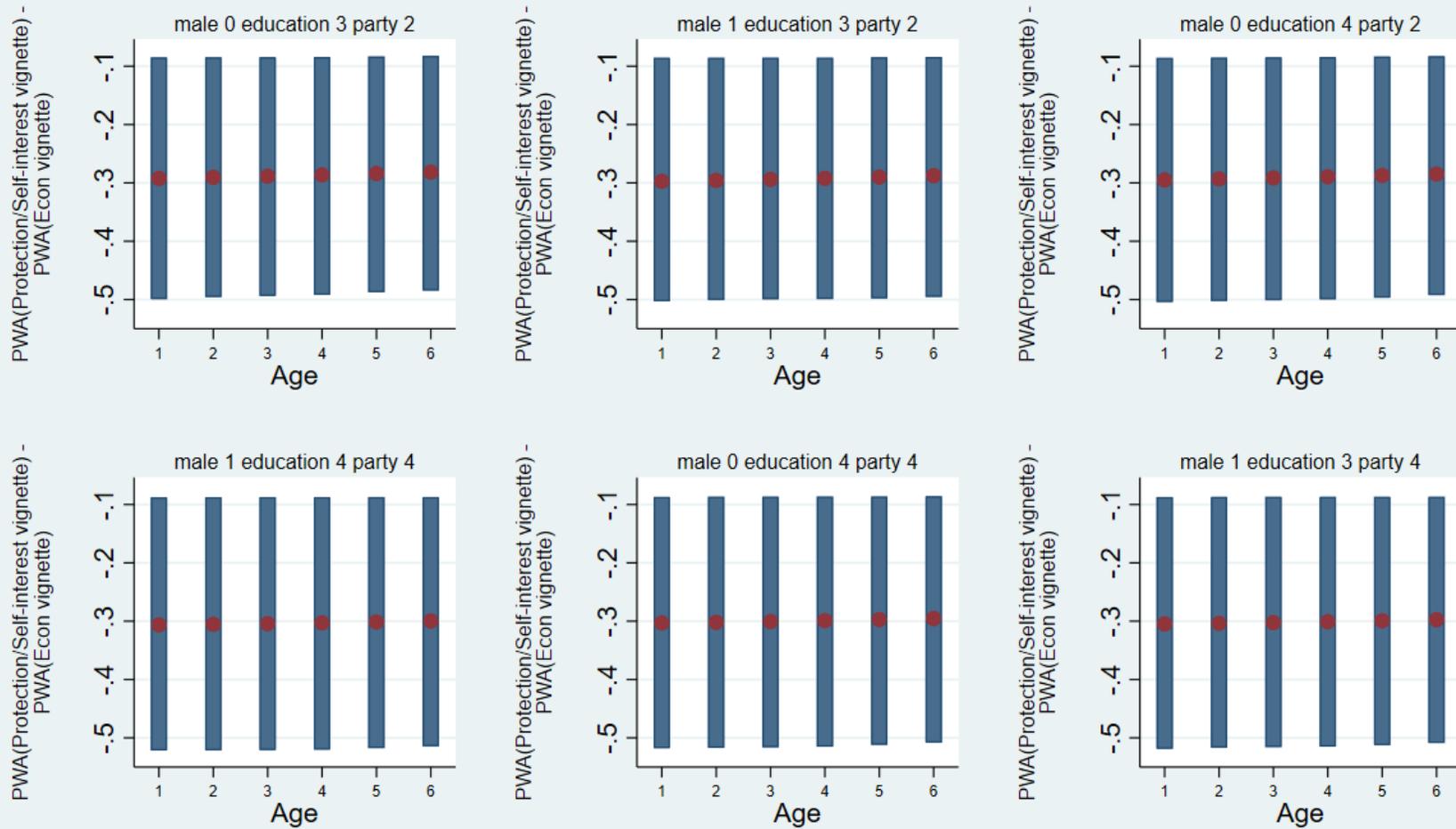
Right-Wrong: 1=Right,2=Smewhat right, 3=Depends/Neutral, 4=Somewhat wrong, 5=Wrong  
 Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat  
 Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+  
 Male: 1=male, 0=female/other  
 Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

図 10 :Probability of thinking right/wrong



Right-Wrong: 1=Right,2=Smewhat right, 3=Depends/Neutral, 4=Somewhat wrong, 5=Wrong  
 25-34 years old, Male, Some college education completed, Leans Democrat

☒ 11: Difference in predicted weighted average of right/wrong  
 $PWA(\text{Protection}/\text{Self-interest vignette}) - PWA(\text{Econ vignette})$



Right-Wrong: 1=Right, 2=Somewhat right, 3=Depends/Neutral, 4=Somewhat wrong, 5=Wrong  
 Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat  
 Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+  
 Male: 1=male, 0=female/other  
 Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

表7 : Would you favor or oppose sending U.S. ground troops?

	(1)	(2) Favor-Oppose	(3)	(4)	(5)
favor_oppose					
v_protection	-0.884*** (-4.70)	-0.872*** (-4.66)	-0.874*** (-4.66)	-0.865*** (-4.61)	-0.906*** (-4.82)
v_prot_self_interest	-0.459* (-2.56)	-0.452* (-2.53)	-0.461* (-2.57)	-0.432* (-2.42)	-0.468** (-2.61)
party	0.203*** (3.33)	0.209*** (3.46)	0.197** (3.24)	0.205*** (3.36)	
age	-0.0383 (-0.61)		-0.0546 (-0.88)	-0.0341 (-0.54)	-0.0694 (-1.11)
male	0.302* (1.98)	0.314* (2.07)		0.314* (2.06)	0.277 (1.82)
education	0.146 (1.43)	0.143 (1.40)	0.158 (1.55)		0.152 (1.49)
N	590	590	590	590	590

Favor-Oppose : 1 = Favor strongly, 2 = Favor not strongly, 3 = Neither/Both, 4 = Oppose not strongly, 5 = Oppose strongly

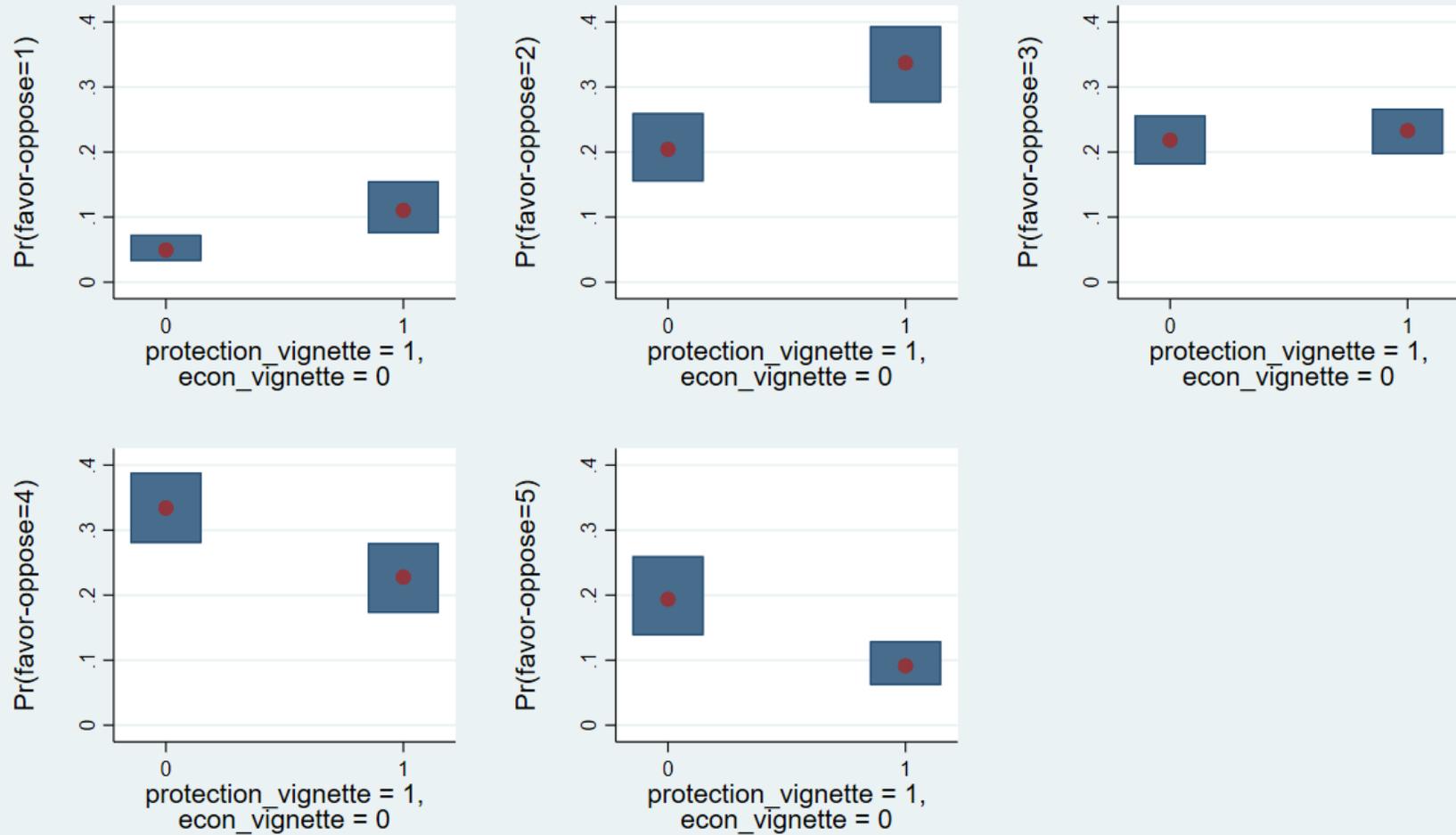
v\_protection: 1 = protection vignette, 0 = prot\_self\_interest/econ types of vignette

v\_prot\_self\_interest: 1 = prot\_self\_interest vignette, 0 = protection/econ types of vignette

ordered logistic regression model

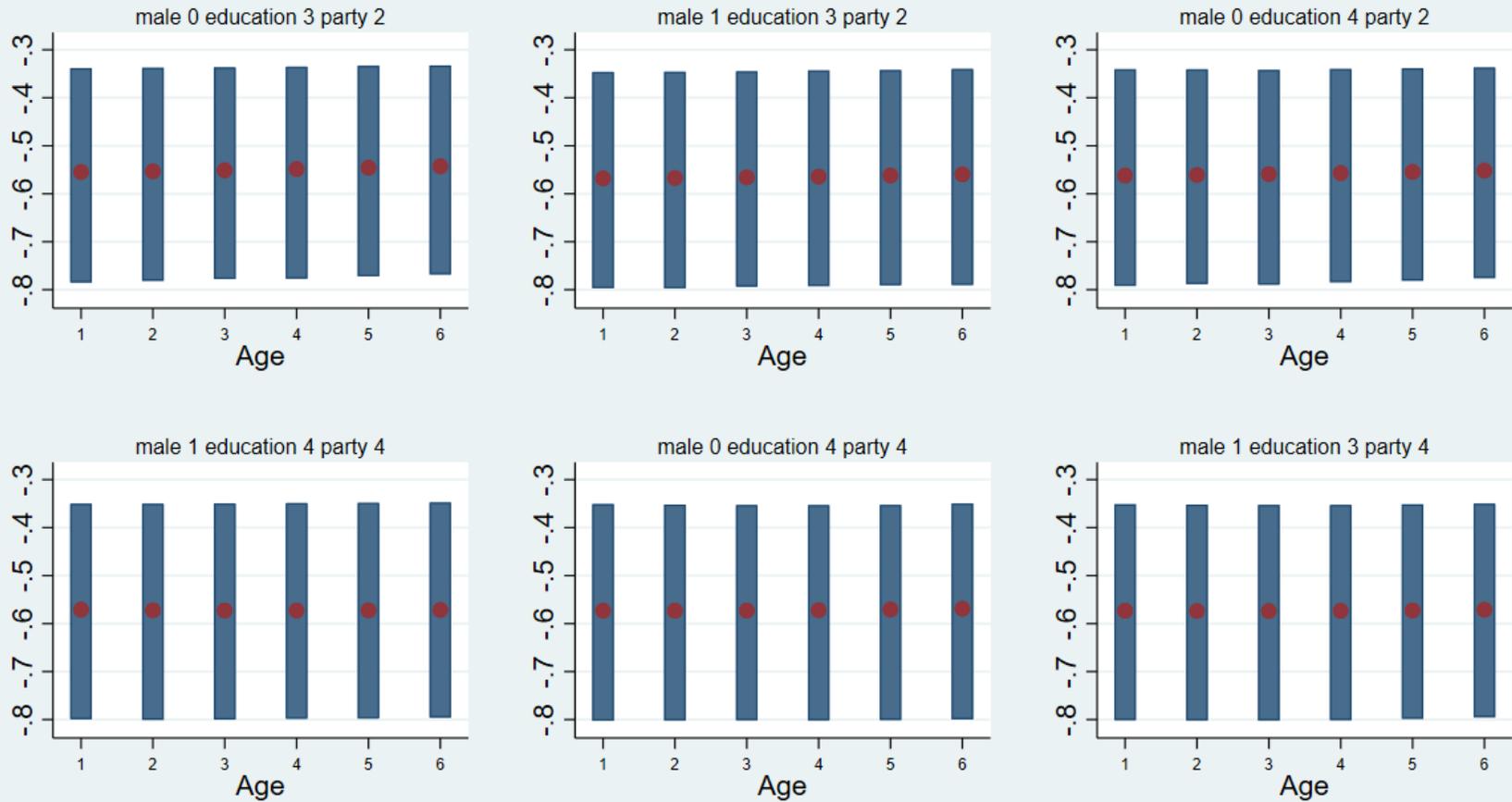
\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

図 12 : Probability of favor-oppose



Favor-oppose(5-point scale): 1 = Favor strongly, 2 = Favor not strongly, 3 = Neither/Both, 4 = Oppose not strongly, 5 = Oppose strongly  
ordered logistic regression model  
25-34 years old, Male, Some college education completed, Leans Democrat

図 13 : Difference in predicted weighted average of favor\_oppose  
PWA(Protection vignette) - PWA(Economic vignette)



Favor-Oppose(5-point scale): 1 = Favor strongly, 2 = Favor not strongly,  
3 = Neither/Both, 4 = Oppose not strongly, 5 = Oppose strongly

Ordered logistic regression model

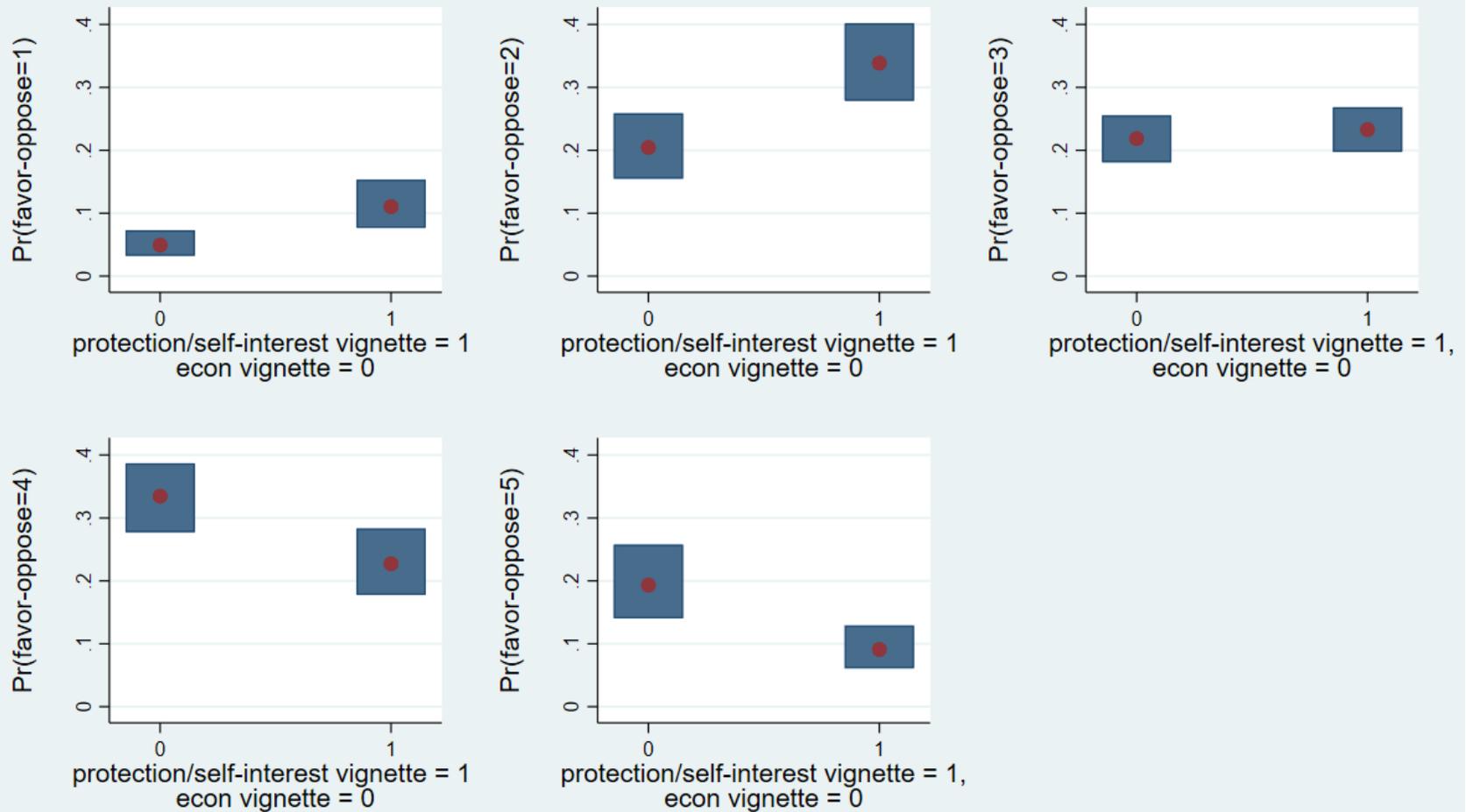
Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat

Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+

Male: 1=male, 0=female/other

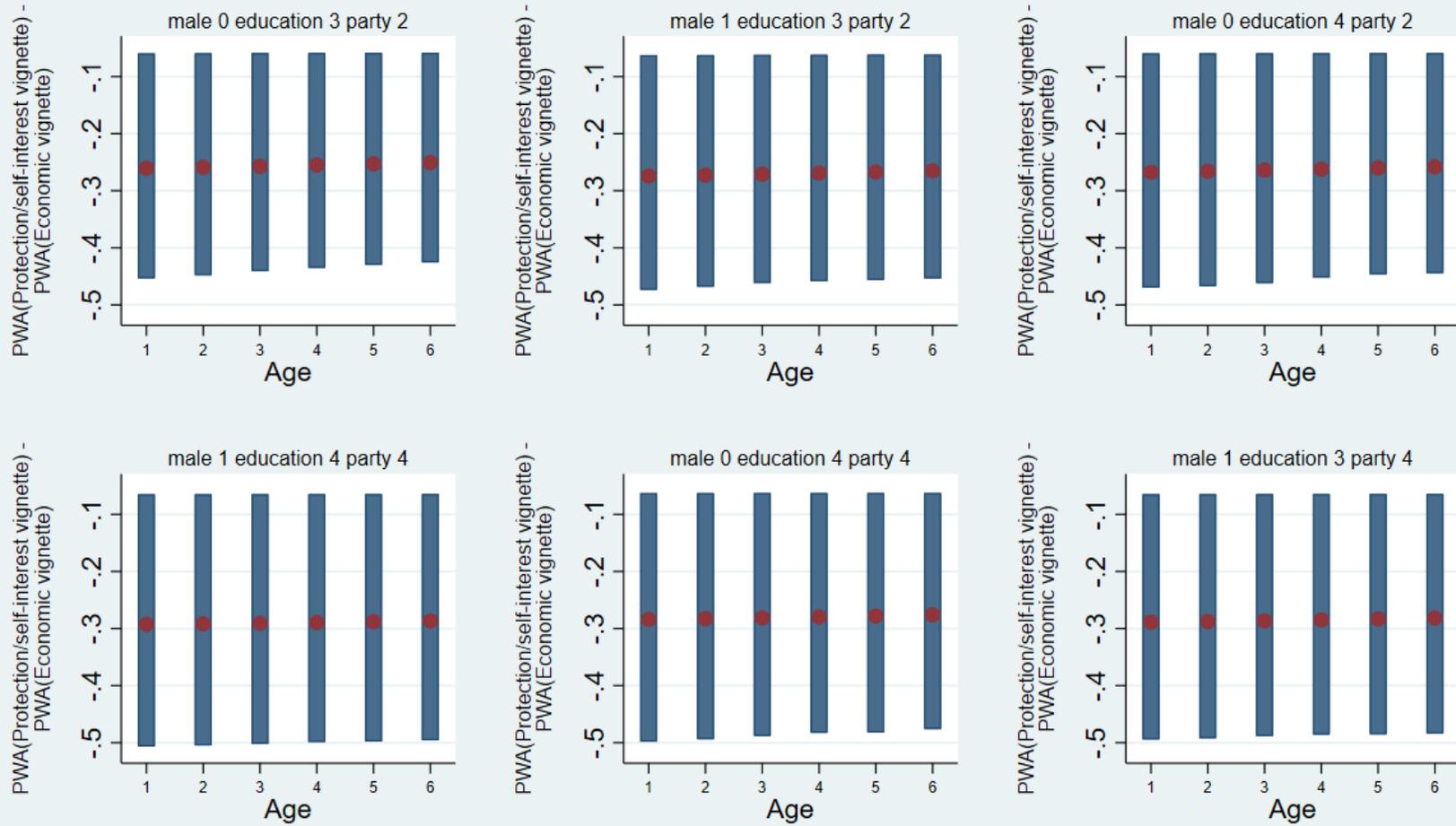
Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

図 14 : Probability of favor-oppose



Favor-oppose(5-point scale): 1 = Favor strongly, 2 = Favor not strongly,  
 3 = Neither/Both, 4 = Oppose not strongly, 5 = Oppose strongly  
 ordered logistic regression model  
 25-34 years old, Male, Some college education completed, Leans Democrat

図 15 : Difference in predicted weighted average of favor-oppose  
 PWA(Protection/self-interest vignette) - PWA(Economic vignette)



Favor-Oppose(5-point scale): 1 = Favor strongly, 2 = Favor not strongly, 3 = Neither/Both, 4 = Oppose not strongly, 5 = Oppose strongly  
 Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat  
 Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+  
 Male: 1=male, 0=female/other  
 Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

## 第六章 『美しき魂－正義の戦士』のフレームの影響力とジェンダー・ステレオタイプ

### 6.1. 本章の目的と仮説

本章の目的は三点ある。第一に、「正義の戦士が脆弱な被害者を救う」というフレームが、世論の戦争に対する関心・自国と他国をめぐる二項対立な世界観・軍事派遣に対する選好に与える影響が、保護者である戦士が男性であり、被保護者である被害者が女性であるとする、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに支えられていることを明らかにすることにある。第二に、この伝統的なジェンダー・ステレオタイプが、米国女性兵の進出によって破られた場合に、先進的な国家としての米国の正当性が高まるというという予想についても検討を行う。第三に、個人レベルのジェンダー・ステレオタイプに対する賛同の度合いが、『美しき魂－正義の戦士』のフレームに影響したのか否かを検討する。この目的を達成するために、本章では、以下の三つの仮説の妥当性を検証した。

仮説 5: 「正義の戦士が脆弱な被害者を救う」というフレームの、世論の関心を高め、二項対立的な世界観を形成し、軍事政策に対する選好を高める効果は、救済者が男性、被救済者が女性であることで、より強く見られる。

仮説 6: 「正義の戦士が脆弱な被害者を救う」というフレームの、世論の関心を高め、二項対立的な世界観を形成し、軍事政策に対する選好を高める効果は、救済者が女性、被救済者が男性であることで、より強く見られる。

仮説 7: 『美しき魂－正義の戦士』のフレームの、世論の関心を高め、二項対立的な世界観を形成し、軍事政策に対する選好を高める効果は、伝統的なジェンダー・ステレオタイプにより強い共感を見せる人々の間でより強く見られる。

分析の結果、仮説 5 は、限定的にデータによる支持を得ることができたものの、仮説 6 と仮説 7 については、ほとんどデータによる支持を得ることができなかった。本章では、データの分析を行うと共に、データの支持を受けることがなかった理由について考察した上で、今後の研究に向けた改善案についても言及する。

## 6.2 変数

ジェンダー・ステレオタイプによる効果を見るために、本章では、前章とは異なる文章を用いてサーベイ実験を行った。本章では、以下の変数により分析を行った。

従属変数: 本章での従属変数は、前章と同様である。すなわち、戦争に対する関心の度合い、アメリカおよび架空の紛争国であるハヤザニア国に対する 10 ポイント・スケールの好感度、軍事派遣をめぐる態度（軍事派遣がうまくいっているか否か、軍事派遣を正当だととらえるか否か、軍事派遣を支持するか否か）に対する参加者の回答が、フレーム間でどのように異なるのかを検討した。

独立変数: 仮説 5 および仮説 6 の検証においては、『美しき魂—正義の戦士』のフレームの影響力が、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに支えられていることを見るために、四つのグループに、「勇敢な米兵が現地の紛争地市民を救う」というフレームを割り当てた。フレームが四種類に派生したのは、救済者であるアメリカ兵の性別と、被救済者である架空の紛争国の市民の性別を操作したためである。すなわち、アメリカ兵が女性あるいは男性の場合と、現地市民が男性あるいは女性の場合の、計 4 パターンの中で、参加者の軍事政策に対する態度が変容するのかが否かを観察した。性別を操作するために、各フレームでは、兵士あるいは紛争地市民の名前・敬称を変化させた。たとえば、アメリカ兵が男性の場合には *Sergeant Robert Smith*、アメリカ兵が女性の場合には *Sergeant Rachel Smith* が、文章の中で提示された。また、紛争地市民の性別操作においては、市民個人の性別を操作することに加えて、紛争地市民が、女性一般であるか、あるいは市民一般であるかという操作も加えた。

また、仮説 7 の検証においては、ジェンダー・ステレオタイプへの共感度を測るために、米国の全国的な世論調査である *American National Election Studies* で問われていた 5 つの質問を被験者に対して行った。具体的には、「女性の平等の要求は、実質的に特別な待遇を求めていることに等しい」「差別により、女性はしばしば職業の好機を逃す」、「女性のハラスメントに対する苦情は、問題を解決するよりも、より多くの問題を引き起こすことにつながる」、「働いている母親は、働いていない母親と同じくらい、暖かくて安定した関係を子どもとの間に築くことができる」、「すべての人にとって、男性が家の外における成功者となり、女性が家と家族の面倒を見るのが望ましい」という五つの質問への賛同の度合いを、7 ポイント・スケールで質問した。

### 6.3 結果

本仮説の妥当性は、操作チェックで尋ねた軍事派遣の主体国に関する問いに答えることができた参加者のうち、米国兵が紛争地市民を救うというフレームに割り当てられた 880 名の参加者の回答を分析することによって検証された。880 名のうち、44%は男性、55%は女性であり、0.3%の人々がその他の性を選択した。全体の 10%は強固な共和党主義者、約 17%は共和党寄りであり、21%は強固な民主党主義者、27%は民主党寄りであった。一方で、約 25%はどちらの政党にも与さないことを表明した。高校卒業以下の学歴を持つ人は 1%、高校を卒業した人は 11%、何らかのカレッジの課程を修了した人は 36%、大学学部以上を修了した人は 52%であった。また、18 歳から 24 歳が 10%、25 歳から 34 歳が 40%、35 歳から 44 歳が 27%、45 歳から 54 歳が 11%、55 歳から 64 歳が 10%、65 歳以上が 2%であった。また、参加者が、米国兵の性別を誤った形で認識していたケースについては、実際に参加者が割り当てられた兵士の性別ではなく、操作チェックで確認された、参加者が認識した兵士の性別にもとづいて分析を行った。すなわち、実際は米国女性兵のグループに割り当てられたのにも関わらず、参加者が米国男性兵のグループに割り当てられたと認識していた場合は、参加者は米国男性兵のグループに割り当てられていたものとして扱った。本実験のサンプルは、CCES のサンプルと比べて、若く、民主党寄りであり、教育レベルが高かった。

仮説 5: 「正義の戦士が脆弱な被害者を救う」というフレームの、世論の関心を高め、二項対立的な世界観を形成し、軍事政策に対する選好を高める効果は、救済者が男性、被救済者が女性であることで、より強く見られる。

最初に、表 8 で、兵士の性別と紛争地市民の性別の組み合わせが、人々の戦争に対する関心に影響を与えるのかを、順序ロジスティックス回帰モデルによって検討した。その結果、兵士・紛争地市民が共に男性であった場合に、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせと比べて、戦争に対する関心が高まる（従属変数の値が小さくなる）ことが確認された（ $p < 0.05$  もしくは  $p < 0.01$ ）。女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせ、および、女性兵士・女性紛争地市民の組み合わせについては、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせと比べて、有意差は確認されなかった（ $p \geq 0.05$ ）。すなわち、男性兵士・女性紛争地市民の場合に、他の組み合わせと比べて人々の関心が高まるとする仮説とは逆の結果が示された。

図 16 では、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせから、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせへと移行した場合に、戦争に対する関心をめぐる問いへの回答の各値（1 から 5）を選択する予想確率が変容するのかを、25 歳から 34 歳男性、なんらかのカレッジ教育を修了、民主

党寄りというカテゴリーに属する人々について検討した。その結果、男性兵士・女性紛争地市民に割り当てられた場合、男性兵士・男性紛争地市民に割り当てられた場合と比べて、「極めて関心がある (1) 」もしくは「とても関心がある (2) 」を選択する確率が減少し、「いくらか関心がある (3) 」もしくは「そこまで関心がない (4) 」を選択する確率が上昇することが確認された。とりわけ、従属変数の 1 から 3 を選択する予想確率は、およそ 5% 程度の違いが見られた。

図 17 では、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせから、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせに移行した場合に、戦争に対する関心をめぐる質問に対する回答の予想される加重平均がどの程度異なるのかを、典型的な六カテゴリーに属する人々について検討した。その結果、いずれのカテゴリーについても、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合は、男性兵士・女性紛争地市民のフレームに割り当てられた場合と比べて、0.2 ポイント程度戦争に対する関心が高まることが確認された。

仮説 5 に反して、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合と比べて、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合の方が、参加者の戦争に対する関心を高めた理由としては、伝統的なジェンダー・ステレオタイプとは異なる二つの因果関係が機能した可能性が考えられる。第一に、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせに比べて、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせの方が、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに反するために、目新しく聴衆の気を引きやすかった可能性が考えられる。第二に、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせの方が、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせと比べて、紛争地に対して優越感を感じやすく、その感情が、より強い関心につながった可能性に言及できる。

次に、表 9 では、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせに比べて、その他の性別の組み合わせに割り当てられた場合に、ハヤザニア国に対する好感度に変容するの否かを、順序ロジスティックモデルを用いて検討した。その結果、仮説 5 を部分的に支持する形で、男性兵士・女性紛争地市民の場合には、男性兵士・男性紛争地市民の場合に比べて、ハヤザニア国に対する好感度が有意に下がることが確認された ( $p < 0.01$ )。一方で、他の兵士・紛争地市民の性別の組み合わせについては、男性兵士・紛争地市民の場合と比して有意差が見られなかった ( $p \geq 0.05$ )。

次に、図 18 で、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合と、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合で、ハヤザニア国に対する好感度の各値をとる予想確率が異なるのかを、25 歳から 34 歳男性、何らかのカレッジを修了、民主党寄りという典型的なカテゴリーに属する人々について検討した。その結果、ハヤザニア国を最も好ましく思わない 1 を選択する予想確率が、男性兵士・女性紛争地市民の場合には、男性兵

士・男性紛争地市民の場合と比べて、10%以上も上昇することが確認された。また、男性兵士・男性紛争地市民に割り当てられた場合、2を選択する予想確率が下降する一方で、3以上を選択する予想確率は僅かに上昇することが示された。

さらに、図 19 では、典型的なデモグラフィックな性質を持つ六カテゴリーに属する人々について、予想されるハヤザニア国に対する好感度の加重平均が、男性兵士・女性紛争地市民を割り当てられた場合と、男性兵士・男性紛争地市民を割り当てられた場合の間で、どのように異なるのかを検討した。その結果、およそ 0.4 ポイントから 0.6 ポイント程度、男性兵士・女性紛争地市民の場合には、男性兵士・男性紛争地市民の場合と比べて、ハヤザニア国に対する好感度が低くなる（値が減少する）ことが確認された。また、両者の差は年齢が高くなるほど小さくなることも示された。したがって、仮説 5 を部分的に支持する形で、男性保護者・女性被保護者の組み合わせの場合には、男性保護者・男性被保護者の組み合わせの場合と比べて、相手国に対する好感度が低下しやすいことが確認された。

表 10 では、男性米国兵・女性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合に、その他の組み合わせに割り当てられた場合に比して、米国に対する好感度が変化するか否かを検討した。その結果、いずれの組み合わせについても、好感度に変化は見られなかった ( $p \geq 0.05$ )。

次に、三つの変数により、世論の軍事派遣に対する選好が、男性米国兵・女性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合と、その他の組み合わせに割り当てられた場合で異なるのかを、三つの従属変数について順序ロジスティクス回帰を用いて検討した。まず、表 11 で見られるように、軍事政策がうまくいっているか否かという質問については、男性米国兵・女性紛争地市民の組み合わせと、その他の組み合わせの間で、有意差が確認されなかった ( $p \geq 0.05$ )。

一方で、表 12 に示されるように、対外軍事派遣が正しいか否かという質問については、男性米国兵・女性紛争地市民の組み合わせと、女性米国兵・女性紛争地市民の間で、有意差が確認された ( $p < 0.05$ )。すなわち、仮説で述べたように、前者の組み合わせの場合には、後者の組み合わせと比べて、軍事派遣を正しいととらえる（値が小さくなる）傾向にあることが示された。一方で、男性米国兵・女性紛争地市民と、その他の組み合わせの間では、有意差が見られなかった ( $p \geq 0.05$ )。

次に、図 20 では、25 歳から 34 歳男性、何らかのカレッジを修了、民主党寄りという典型的なカテゴリーに属する人々について、軍事派遣の正当性をめぐる問いに対して、各回答を選択する予想確率が、男性米国兵・女性紛争地市民と、女性米国兵・女性紛争地市民の間でどのように異なるのかを検討した。その結果、軍事派遣を「正しい」と答える確率が、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせの場合には、女性兵士・女性紛争地市民の場合と比べておよそ 5% 高くなることが確認された。また、「状況による／中立」「いくらか誤っている」「誤ってい

る」を選択する予想確率は、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせの場合に、女性兵士・女性紛争地市民の場合と比べて低くなることが示された。

さらに、図 21 では、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせが割り当てられた場合と、女性兵士・女性紛争地市民の組み合わせが割り当てられた場合で、従属変数の予想される加重平均が異なるのかについて、典型的なデモグラフィックな性質を持つ六カテゴリーに属する人々について検討を行った。その結果、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせの場合には、女性兵士・女性紛争地市民の場合と比べて、約 0.1 ポイント弱、戦争が正しい（値が小さくなる）という方向に回答をする傾向にあることが示された。

世論の対外軍事派遣に対する選好を測る三つ目の従属変数は、米国軍の地上派遣に対する支持・不支持の度合いである（表 13）。この質問では、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせが割り当てられた場合と、女性兵士・女性紛争地市民の組み合わせが割り当てられた場合と比べて、対外軍事派遣を支持する（値が小さくなる）傾向が示された（ $p < 0.05$ ）。一方で、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせと、その他の組み合わせについては、有意差が見られなかった（ $p \geq 0.05$ ）。

次に、図 22 では、25 歳から 34 歳男性、何らかのカレッジを修了、民主党寄りという典型的なカテゴリーに属する人々について、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせを割り当てられるか、それとも、女性兵士・女性紛争地市民の組み合わせを割り当てられるのかの間で、軍事派遣の支持に対する各回答の予想確率が異なるのかを検討した。その結果、従属変数のすべての組み合わせについて、両者の組み合わせの間で予想確率が異なることが確認された。軍事派遣に「強固に賛成」もしくは「強固にはではないが賛成」を回答する予想確率は、男性兵士・女性紛争地市民の場合に、女性兵士・女性紛争地市民の場合と比べて約 5%ほど高かった。一方で、軍事派遣に「賛成も反対もしない／賛成も反対もする」、「強固にはではないが反対」、「強固に反対」を回答する予想確率は、女性兵士・女性紛争地市民の場合と比べて、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせの場合に低かった。

さらに、図 23 では、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合と、女性兵士・女性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合で、予想される加重平均が異なるのかを、典型的な六カテゴリーに属する人々について検討した。その結果、すべてのカテゴリーについて、約 0.2 ポイント以上、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせの場合には、賛成に近い選択をすることが示された。

以上の三つの従属変数の検討から、世論の対外軍事派遣をめぐる選好については、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせを割り当てられた場合は、女性兵士・女性紛争地市民の組み合わせを割り当てられた場合以上に、軍事派遣を正当だと考え、賛成する傾向にあることが確

認された。一方で、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせと、男性兵士・男性紛争地市民、および女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせについては、有意差が見られなかった。

仮説5では、勇敢な保護者が脆弱な被保護者が救うというフレームの、世論の戦争に対する関心を高め、自国と他国に対する二項対立的な世界観の形成し、軍事派遣に対する支持を高める効果は、保護者を男性、被保護者を女性とする、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに支えられてきたのか否かを検証した。分析の結果、仮説5は、限定的なデータの支持を受ける形となった。戦争に対する関心については、仮説に反して、男性兵士・女性紛争地市民の場合以上に、男性兵士・男性紛争地市民の場合に関心が高くなることが確認された。また、ハヤザニア国に対する好感度については、仮説に限定的に合致する形で、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせを割り当てられた場合に、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせを割り当てられた場合と比して、ハヤザニア国に対する好感度が低下することが確認された。さらに、仮説に限定的に合致する形で、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせが割り当てられた場合には、女性兵士・女性紛争地市民の組み合わせが割り当てられた場合以上に、参加者が軍事派遣を正当なものとして考え、軍事派遣に賛成する傾向があることが明らかにされた。

仮説5に反して、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせ以上に、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせが参加者の関心を集めた理由、あるいは男性兵士・女性紛争地市民とその他の組み合わせの間には、参加者の関心の有意差が見られなかった理由としては、フレーム毎に、互いに相殺しうる異なる因果関係が機能した可能性に言及できる。第一に、男性が男性を救うという状況が、男性が女性を救うという状況に比べて珍しく、参加者の注意を引いた可能性が考えられる。この課題を克服するためには、参加者が、女性が男性を救うという状況をどの程度珍しいものとしてとらえるのかを検討することが必要となってこよう。こうした中で、紛争地に派兵されている米軍女性兵の割合の期待値を参加者に問い、期待値のカテゴリーごとに、男性兵士・男性紛争地市民と男性兵士・女性紛争地市民の効果の差がどの程度見られたのかを分析することが、今後の一つの選択肢として入ってくる。第二に、敵国の男性が自国の男性によって救われるという状況が、（好感度などの質問では測り切れない）敵国の男性に対する同情、あるいは自国に対する優越感を感じさせるものであり、これらの感情が、参加者の興味を引くことにつながった可能性がある。この可能性を検討するために、たとえば、今後の研究では、ハヤザニア国の自治能力に関する質問を挿入し、その回答のカテゴリー毎に、保護者も被保護者も男性であることによる効果を検討することが考えられよう。

また、仮説5が限定的にのみ実証され、必ずしもすべてのデータによる支持を受けなかった理由としては、以下の二点が考えられる。第一に、異なるフレームと従属変数の間には、互いに効果を相殺しうる別個の因果関係が働いていた可能性が挙げられる。すなわち、本仮説で検

討したように、一方では、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに沿う、保護者である米国男性が被保護者である紛争地女性を救うというフレームが、二項対立的な世界観を強化し、軍事派遣をめぐる選好を高めた可能性に言及できる。だが、他方では、伝統的なジェンダー観念を打破して軍隊に進出した女性が、米国の先進性を象徴的に表す可能性についても言及ができる。仮説6でも言及するが、この場合には、女性が保護者となることで、世論の軍事派遣に対する選好は高まるであろう。さらに、伝統的に保護者であるべき男性が被保護者となることで、紛争地国の弱さを露呈する役割を果たす可能性もある。この場合には、男性が被保護者となることで、軍事派遣に対する選好の高まりにつながろう。このように、保護者と被保護者の性別を変更することで、全く別個の論理が働く可能性がある。そして、伝統的なジェンダー観念を保持する傾向と、伝統的なジェンダー観念の打破により自国の優越性を感じる傾向が、一人の個人内で併存する可能性も指摘できよう。したがって、保護者と被保護者の性別を変更することで、一つの因果関係が断ち切られると同時に、別の因果関係が生まれ、その因果関係によって、元の因果関係の効果を測ることが困難になってしまうのである。このような困難を克服するために、今後の研究では、保護者と被保護者の性別を操作することに加えて、自国と他国に対する好感度や軍事派遣に対する選好をめぐる問いに対して特定の回答を行った理由を、参加者に問う必要が出てこよう。そして、回答の理由を分析することで、仮説で意図した通りの因果関係が検証できているのかを、確かめることができよう。

第二に、今回の実験では、戦争のテーマは、人権保護の一環としての女性の保護であり、敵を殺すといった、伝統的なジェンダー・ステレオタイプにとってよりセンシティブな「殺戮」や「母性」などの側面に光を当てなかった。そして、人権フレームは、平和といった女性的要素とも折り合いが良かったために、女性兵士が保護者になったとしても、世論の特段の反発が見られなかった可能性がある。この説明の妥当性を検証するために、今後の研究では、たとえば、米国女性兵が敵国のリーダーを殺すことに成功したことに言及したり、米国女性兵が男性自爆テロリストに殺されたことを明示するなど、伝統的なステレオタイプに対してより挑戦的な内容を含んだ文章を提供した上で、フレームによる効果を計測することが有効であろう。

仮説6: 「正義の戦士が脆弱な被害者を救う」というフレームの、世論の関心を高め、二項対立的な世界観を形成し、軍事政策に対する選好を高める効果は、救済者が女性、被救済者が男性であることで、より強く見られる。

次に、仮説6を検証するために、ベースラインを、男性兵士・女性紛争地市民から、女性兵士・男性紛争地市民に変えて順序ロジスティクス回帰モデルによる分析を行った。その結果、

表 14 で見られるように、戦争に対する関心は、女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせの場合と、その他の組み合わせの場合で、有意差が見られないことが示された ( $p \geq 0.05$ )。

表 15 では、ハヤザニア国に対する好感度がフレーム間で異なるのかを検証した。その結果、女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせを割り当てられた場合は、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせを割り当てられた場合に比して、ハヤザニア国に対する好感度が低下する（値が小さくなる）ことが確認された ( $p < 0.01$ )。一方で、女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせを割り当てられた場合と、その他の組み合わせが割り当てられた場合との間で、有意差は見られなかった ( $p \geq 0.05$ )。

図 24 では、ハヤザニア国に対する好感度について、参加者が「好ましく感じない (1) 」から「好ましく感じる (10) 」の各値をとる予想確率が、女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせを割り当てられた場合と、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせを割り当てられた場合の間でどのように異なるのかを、25 歳男性、何らかのカレッジ教育を修了、民主党寄りというカテゴリーに属する人々について検討した。その結果、もっとも好ましくない値である 1 を選択する予想確率が、女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせを割り当てられた場合、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせを割り当てられた場合と比べて、およそ 10% も高くなることが観察された。また、3 以上の各値をとる予想確率は、女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせを割り当てられた場合に、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせを割り当てられた場合と比べて低くなった。

次に、ハヤザニア国に対する好感度について、回答の予想される加重平均が、女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合と、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合の間でどのように異なるのかを、典型的なデモグラフィックの六カテゴリーに属する人々について分析した。その結果、いずれのカテゴリーについても、女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合は、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合と比べて、予想される加重平均が約 0.5 ポイントから 0.6 ポイント程度低下する（好感度が下がる）ことが示された。

女性兵士・男性紛争地市民に割り当てられた場合に、男性兵士・男性紛争地市民に割り当てられた場合と比べて、ハヤザニア国に対する好感度が下がる理由としては、ハヤザニア国の男性が米国女性に救われることは、本来被保護者である女性米兵に救われる、ハヤザニア国の男性の弱さを表していると考えられることが背景にある可能性がある。

一方で、表 16 から表 19 に見られるように、戦争に対する選好については、軍事派遣をうまくいっていると捉えるか否か、軍事派遣を正当であると考えるか否か、軍事派遣に賛成するか否かの三つの従属変数のすべてについて、女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせに割り当て

られた場合と、その他の組み合わせに割り当てられた場合の間で、有意差が見られなかった ( $p \geq 0.05$ )。

女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合と、その他の組み合わせに割り当てられた場合で、ハヤザニア国に対する好感度で見られた限定的な効果を除いては、有意差が見られなかった理由については、以下の可能性が考えられる。第一に、女性の軍隊への進出が進む中で、女性が紛争地市民の保護者となることに対して、それほど人々の抵抗が見られなくなってきた可能性が考えられる。今回の実験は短時間で行われたものであったため、被験者に実験の意図が伝わらないよう、女性軍人の態度に関する質問項目を設けなかった。今後の研究では、女性軍人に対する支持そのものを質問項目に入れ、女性軍人に対する支持の度合い毎に、女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせから他の組み合わせに移行する効果を見るべきかもしれない。第二に、仮に、米国女性が軍人として保護者となることが、先進的な女性として軍事派遣の正当性を高める動きと、米国女性が保護者となることが伝統的なステレオタイプに反するとして正当性を低める動きが、相殺し合った可能性が考えられる。この可能性を検証するために、今後の研究では、参加者に女性軍人に対する態度を聞いたうえで、女性軍人を好ましく思うグループと、女性軍人を好ましく思わないグループそれぞれの効果を計測するなどの工夫が必要となってくるであろう。

仮説 7: 『美しき魂－正義の戦士』のフレームの、世論の関心を高め、二項対立的な世界観を形成し、軍事政策に対する選好を高める効果は、伝統的なジェンダー・ステレオタイプにより強い共感を見せる人々の間でより強く見られる。

最後に、仮説 7 の検証を試みた。仮説 7 の検証は、前章の 590 名の参加者の回答を分析することで行われた。仮説 7 で注目した個人レベルのジェンダー・ステレオタイプは、7 ポイント・スケールの五つの質問を通して計測した。値が最大の 7 に近づくほど男女の役割に対してリベラルな立場を支持し、値が最小の 1 に近づくほど男女の役割に対して保守的な立場を支持している。次ページのグラフで見られるように、ジェンダー役割に対して最もリベラルな回答をしている参加者が最も多い。一方で、いずれの回答においても、最もリベラルな回答をしている人は全体の 50% 未満に留まった。本研究では、五つの質問の合計点を求め、この合計点によってジェンダー・ステレオタイプの強さとして扱うこととした。その結果、ジェンダー・ステレオタイプの強さは、最も保守的な立場をとる最小値 5 から最もリベラルな立場をとる最大値 35 まで、1 ポイント差で表された。

次に見るように、個人のジェンダー・ステレオタイプの程度による影響力が見られなかった要因として、被験者がジェンダー・ステレオタイプに対する質問に対し、自身の本来の選好を反映しなかった可能性があることは否めない。男女差別を理由とした女性の職業機会の損失についての質問を除くすべての質問項目において、最もリベラルな立場に対する賛同を示した参加者が、二番目にリベラルな立場に対する賛同を示した参加者に比して極端に多い。あくまで可能性として示唆できるに過ぎないが、本来は男女の役割を同じものとしてとらえていないのにも関わらず、社会的望ましさを考慮し、最もリベラルな立場に賛同した可能性は否めないであろう。すなわち、従属変数は1から7の値をとったが、1から6までの1ポイントの差と、6と7の1ポイントの差が、均一ではない可能性に言及できる。

個人レベルのジェンダー・ステレオタイプの強さが、フレームによる効果に影響を与えたのか否かを検証するために、本節では、前章のままに、戦争に対する関心、自国と相手国に対する好感度、軍事政策の選好を従属変数に設定した。その上で、ジェンダー・ステレオタイプ野強さ、および、ジェンダー・ステレオタイプの強さと各フレームの交互作用を加えたモデルによる分析を行った。その結果、表20から表25に見られるように、戦争に対する関心、自国と相手国に対する好感度、軍事派遣がうまくいっているか否かの評価、軍事派遣の正当性の各項目について、交互作用による有意な差はほとんど認められなかった ( $p \geq 0.05$ )。唯一有意差が見られたのは、軍事派遣に対する支持を従属変数とした場合に、ジェンダー・ステレオタイプと女性の保護フレームの交互作用によって表れた効果であった ( $p < 0.05$ )。だが、仮説で述べていたこととは逆に、ジェンダー・ステレオタイプと女性の保護の交互作用によって、軍事派遣に対する支持が高まる傾向にあることが確認された。

以上より、仮説7で実証を試みた、個人レベルのジェンダー・ステレオタイプとフレームの交互作用による効果は、ほとんどの場合観察されないことが確認された。軍事派遣に対する支持が従属変数の場合に限り、交互作用の有意差が認められたが、その効果は仮説のものとは反対の矢印を向く、すなわち、ジェンダー的にリベラルなほど、女性の保護フレームによるものであった。ジェンダー・ステレオタイプによる効果が否定された可能性も否めない。だが、本実験に置いて、ジェンダー・ステレオタイプの測定において社会的な望ましさの影響を排除できなかった可能性は否定できない。この限界を踏まえて、今後ジェンダー・ステレオタイプなどのセンシティブな問いを扱う場合には、二つのうちのどちらに近いか回答してもらう代わりに、女性と男性が同一の行為（たとえば、幼子を置いて戦地に一年間赴く）を行った場合に、女性に対する評価と男性に対する評価が異なるのかを比べるなど、社会的望ましさが表れにくい質問文の設計の仕方をする必要があるであろう。また、質問文の冒頭に、「伝統的な価値観と革新的な価値観は、どちらも同じくらい価値のあるものである」という立場がある」といった

文面を挿入するなど、特定のジェンダー・ステレオタイプを実験内で批判しないことを明示する必要があったであろう。

加えて、本研究で着目した『美しい魂－正義の戦士』のフレームの効力は、男女に求められる役割が異なることに依拠していた。だが、本実験で計測したジェンダー・ステレオタイプは、主に両性の平等や女性の権利に対する態度であり、役割分担という意味合いでのジェンダー・ステレオタイプと、重なりはするものの完全に合致はしていない。そのため、今後の実験では、同一の反道徳的な行為（たとえば殺戮など）を行った男女に対する評価の差等を通して、ジェンダー・ステレオタイプを計測する必要が出てこよう。

さらに、本実験では、ジェンダー・ステレオタイプを計測する際に、回答者個人との関わりは明示せずに、「すべての人にとって～が望ましい」など、一般的な立場に対する賛同の度合いを問う質問を行った。その結果、回答者が、自分の利害とは直接のかかわりのない他者が、ジェンダー的にリベラルな立場がとることは否定しないという立場を、リベラルな立場として表明した可能性は否定できない。このような課題を克服するために、今後の研究では、たとえば、「連日仕事で深夜帰りで、家族のためにご飯を作る時間のない妻」に対する評価と、「連日仕事で深夜帰りで、家族のためにご飯を作る時間のない夫」に対する評価に差が見られるかどうかなど、より個人に身近に感じられる形で質問項目を設定することが望ましかったであろう。本研究を通して、ジェンダー・ステレオタイプのより精密な計測に基づいた実験設計が、今後の課題として残った。

#### 6.4. 小括

本章の目的は三点に分けられた。第一に、「勇敢な米国兵士が脆弱な紛争地の被害者を救う」というフレームが世論の関心・世界観・選好に対して持つ影響力が、保護者を男性、被保護者を女性とする、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに支えられたものなのか否かを検討した。第二に、保護者を男性とし、被保護者を女性とする、伝統的なジェンダー・ステレオタイプが打破され、女性が保護者となり紛争地の男性が被保護者となった場合に、「勇敢な米国兵士が脆弱な紛争地の被害者を救う」というフレームの影響力がどのように変容するのかを検討した。第三に、勇敢な男性兵士が脆弱な紛争地女性を救うという、『美しき魂－正義の戦士』の影響力が、個人レベルのジェンダー・ステレオタイプに対する共感度の強さによって異なるのか否かを検討した。分析の結果、一つ目の点については、限定的にデータの支持を受けた。一方で、二つ目および三つ目の点については、データの支持を受けることができなかった。

一つ目と二つ目の点については、米国兵の性別と紛争地市民の性別の組み合わせを変更することで、複数の因果関係が惹起され、それぞれの効果を相殺し合った可能性に言及できる。たとえば、仮説5で述べたように、男性が保護者・女性が被保護者の場合、伝統的なジェンダー・ステレオタイプに共鳴するために、軍事行為の正当性が担保される可能性に言及できる。同時に、仮説6で述べたように、女性が保護者・男性が被保護者の場合には、その伝統的なジェンダー・ステレオタイプに反することが、自国の優越性を示し、軍事行為の正当性を示す可能性が指摘できる。この二つの効果は互いに相殺しうるものであり、また、一人の個人は両効果は同時に経験しうる。そのため、性別の組み合わせの変更による効果が観察されなかった可能性がある。また、二つ目の点については、女性の軍隊への進出が進み、女性兵に対する抵抗が少なくなってきた可能性にも言及できよう。

さらに、三つ目の点について、仮説そのものが誤っていた可能性は否定できないが、ジェンダー・ステレオタイプの計測方法が不十分であったことは認めざるを得ない。すなわち、社会的望ましさのバイアスがかかりやすい質問文を用いてしまったことや、質問文が回答者の利害と離れた形で設計されていたことは否めない。社会的望ましさを排除した上で分析を行うために、直接的に女性の権利をめぐる立場を問うのではなく、同一の行為を行った場合に、行為者の性別によって行為に対する評価が異なるのかを問う等の工夫がありえたであろう。また、社会的に望ましくない回答を許す文面を挿入することの効果については議論があるものの(Näher & Krumpal, 2012)、多くの人が伝統的なジェンダー・ステレオタイプに対して強い共感を覚えていることを表す一文を、質問文の冒頭に入れる等の工夫も考えられよう。加えて、本研究の目的は、『美しい魂－正義の戦士』のフレームに見られるように、男女の求められる役割が異なることが、戦争の正当性につながってきたことを明らかにすることであった。だが、本研究で計測したジェンダー・ステレオタイプは、両性の平等な立場に対する態度であり、本研究で意図したジェンダー・ステレオタイプとは多少なずれがあると言わざるを得ない。そのため、今後の研究では、社会的に受け入れられない同一の行為（たとえば殺人など）に従事した男女に対する評価の差を計測するなどの手法をもって、ジェンダー・ステレオタイプを計測することが求められよう。さらに、今後の研究では、より回答者の日常生活が身近に感じられる質問の仕方をするのが臨まれるであろう。センシティブな項目について、どのようにして被験者の真意に近い立場を導き出すことができるのかという点は、今後の課題である。

表8: What would you say is your level of interest in war?

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	Interest in war				
v_sol_woman_vic_man	-0.105 (-0.58)	-0.103 (-0.56)	-0.0919 (-0.50)	-0.00135 (-0.01)	-0.105 (-0.58)
v_sol_woman_vic_woman	0.115 (0.67)	0.117 (0.69)	0.114 (0.67)	0.193 (1.14)	0.115 (0.67)
v_sol_man_vic_man	-0.459** (-2.67)	-0.457** (-2.66)	-0.437* (-2.56)	-0.398* (-2.34)	-0.461** (-2.69)
party	-0.0300 (-0.59)		0.0109 (0.22)	0.0215 (0.43)	-0.0346 (-0.68)
age	-0.239*** (-4.49)	-0.233*** (-4.45)		-0.188*** (-3.56)	-0.240*** (-4.51)
male	-0.910*** (-6.93)	-0.899*** (-6.92)	-0.828*** (-6.39)		-0.914*** (-6.96)
education	-0.122 (-1.42)	-0.125 (-1.46)	-0.126 (-1.47)	-0.134 (-1.57)	
N	880	880	880	880	880

Interest in war(5-point scale)1 = Extremely interested, 2 = Very interested, 3 = Somewhat interested, 4 = Not so interested, 5 = Not at all interested

Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat

Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+

Male: 1=male, 0=female/other

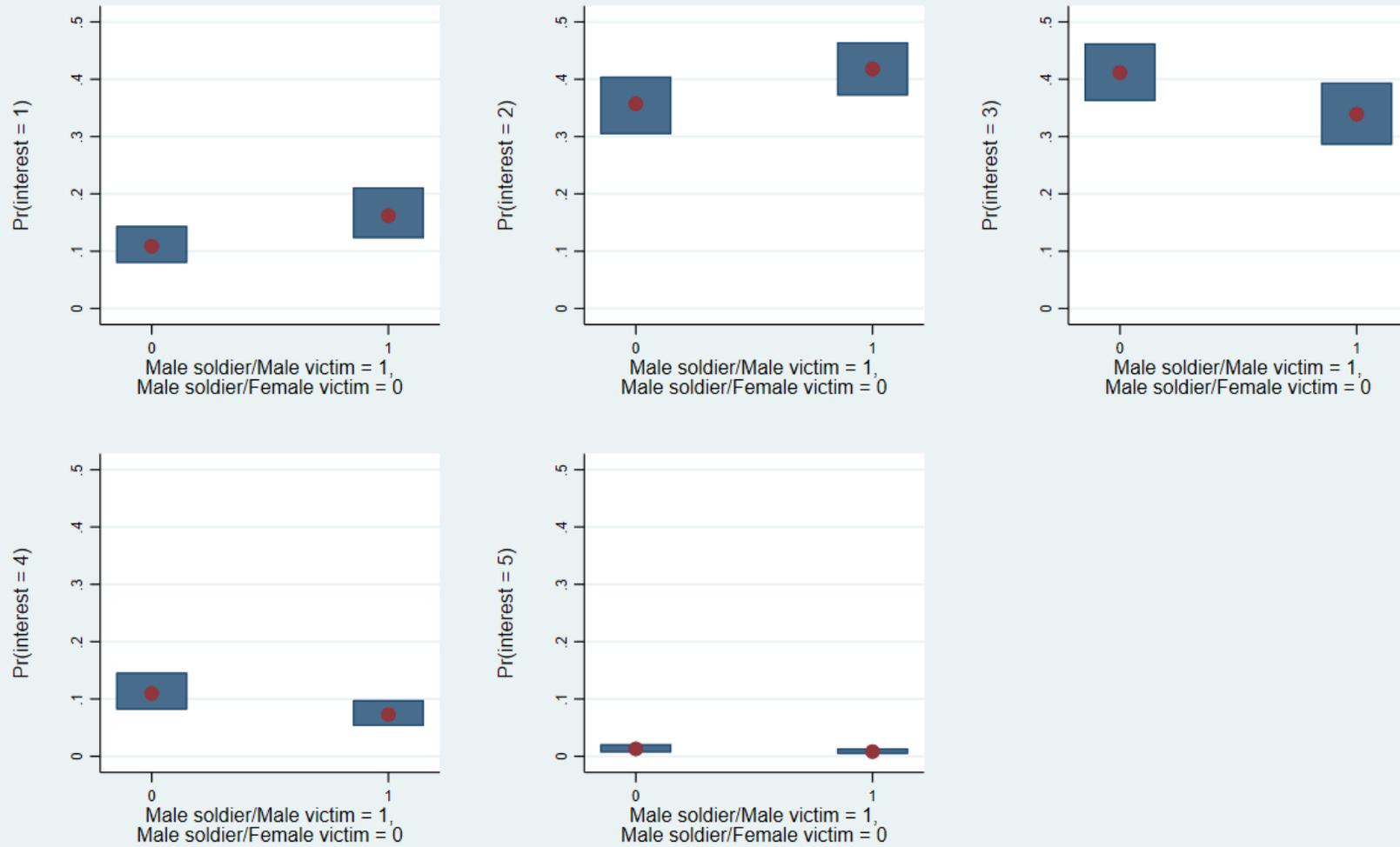
Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

Ordered logistic regression model

Baseline: Male soldier and female victim

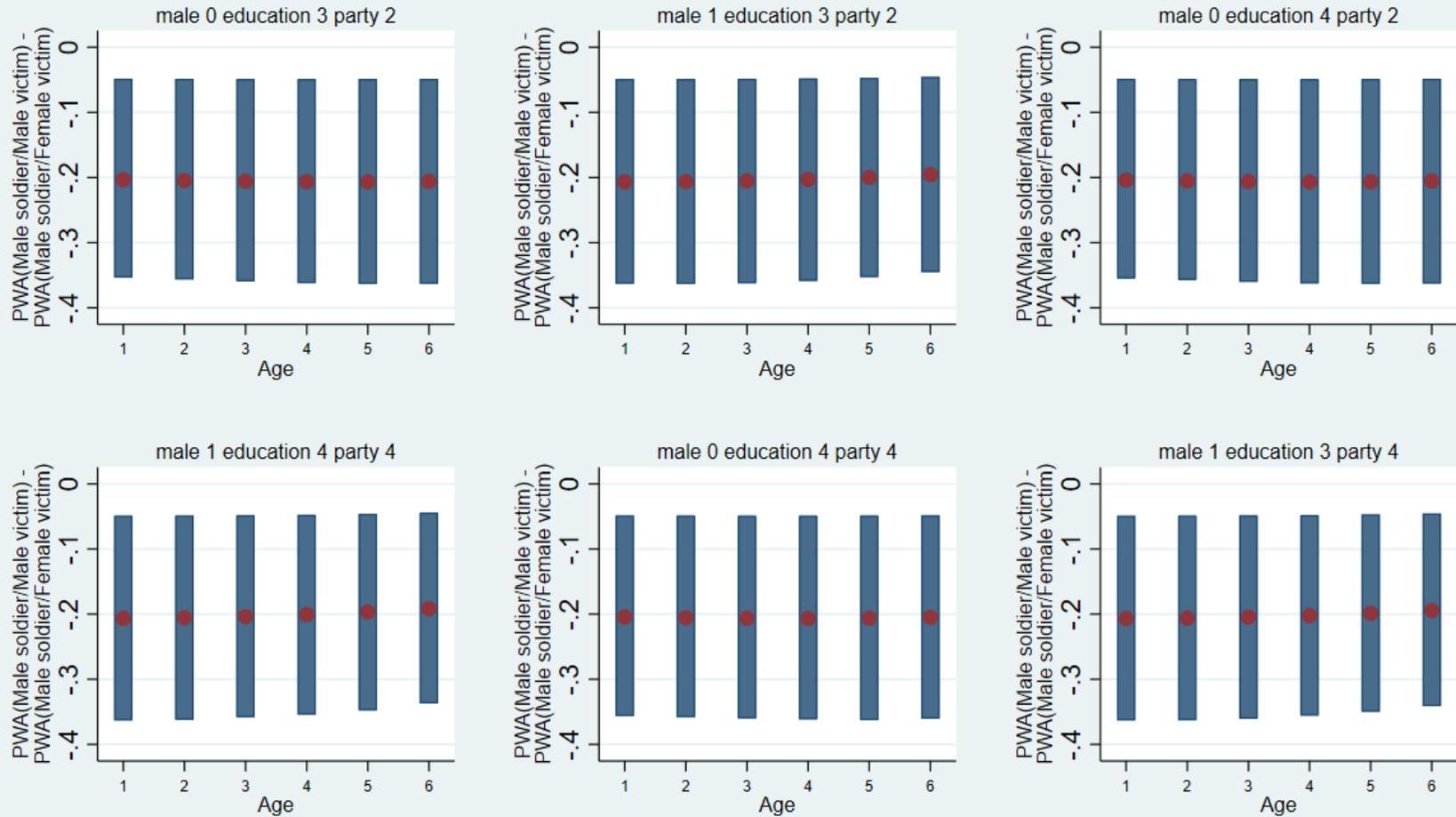
\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

図 16 : Probability of interest



Interest in war: 1 = Extremely interested, 2 = Very interested, 3 = Somewhat interested, 4 = Not so interested, 5 = Not at all interested  
 25-34 years old, Male, Some college completed, Leans Democrat  
 Ordered logistic model

図 17 : Difference in predicted weighted average of interest  
 PWA(Male soldier/Male victim) - PWA(Male soldier/Female victim)



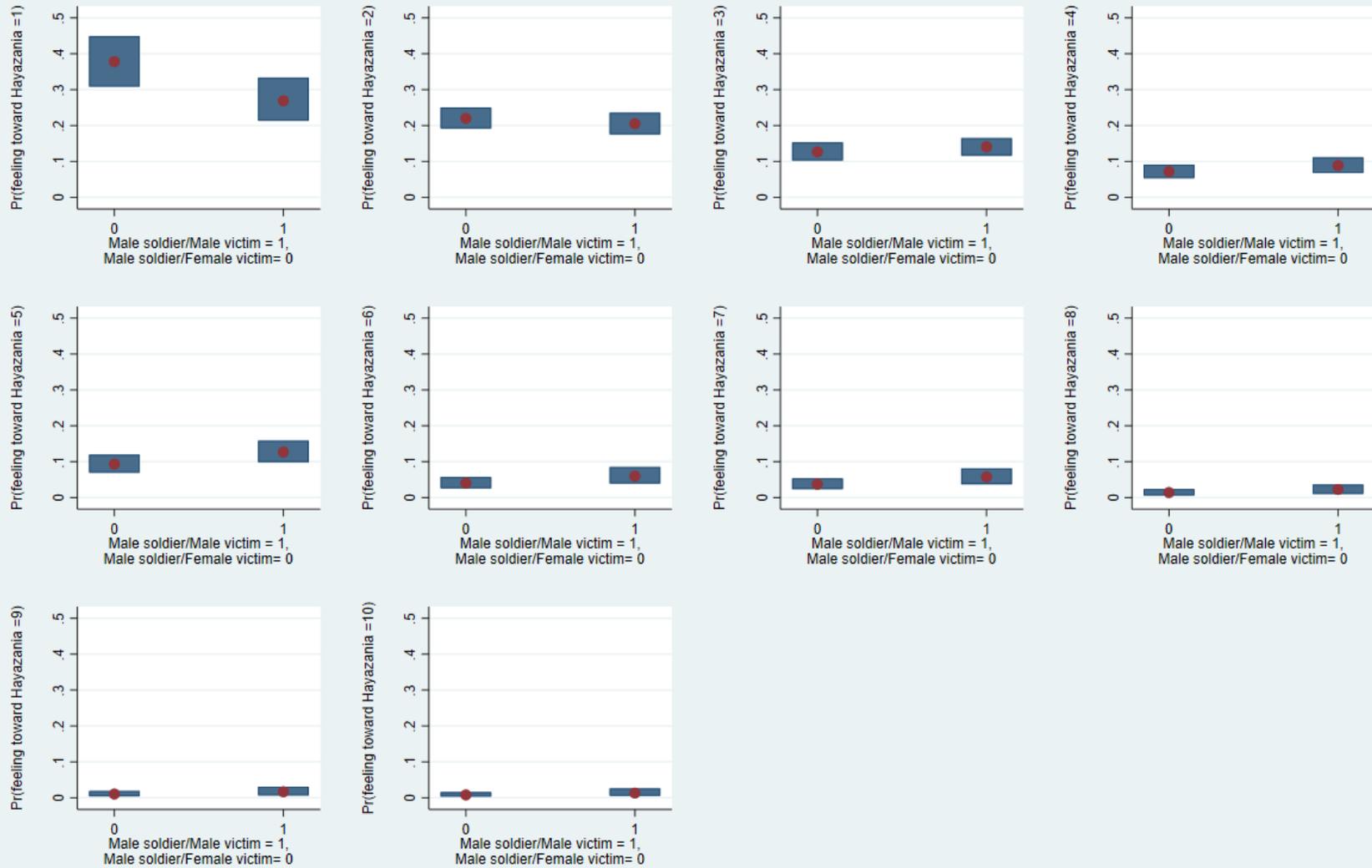
Interest in war: 1 = Extremely interested, 2 = Very interested, 3 = Somewhat interested, 4 = Not so interested, 5 = Not at all interested  
 Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat  
 Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+  
 Male: 1=male, 0=female/other  
 Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

表9 : Feeling toward Hayazania

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	Feeling toward Hayazania				
feeling_Hayazania					
v_sol_woman_vic_man	0.0289 (0.16)	0.0283 (0.16)	0.0454 (0.26)	0.0144 (0.08)	0.0305 (0.17)
v_sol_woman_vic_woman	0.0462 (0.28)	0.0527 (0.32)	0.0485 (0.29)	0.0325 (0.20)	0.0461 (0.28)
v_sol_man_vic_man	0.511** (3.06)	0.519** (3.11)	0.528** (3.17)	0.502** (3.01)	0.512** (3.07)
party	-0.104* (-2.05)		-0.0783 (-1.57)	-0.113* (-2.24)	-0.101* (-2.00)
age	-0.141** (-2.64)	-0.120* (-2.30)		-0.150** (-2.85)	-0.140** (-2.63)
male	0.180 (1.46)	0.210 (1.72)	0.221 (1.81)		0.182 (1.47)
education	0.0560 (0.68)	0.0434 (0.53)	0.0510 (0.62)	0.0582 (0.70)	
N	880	880	880	880	880

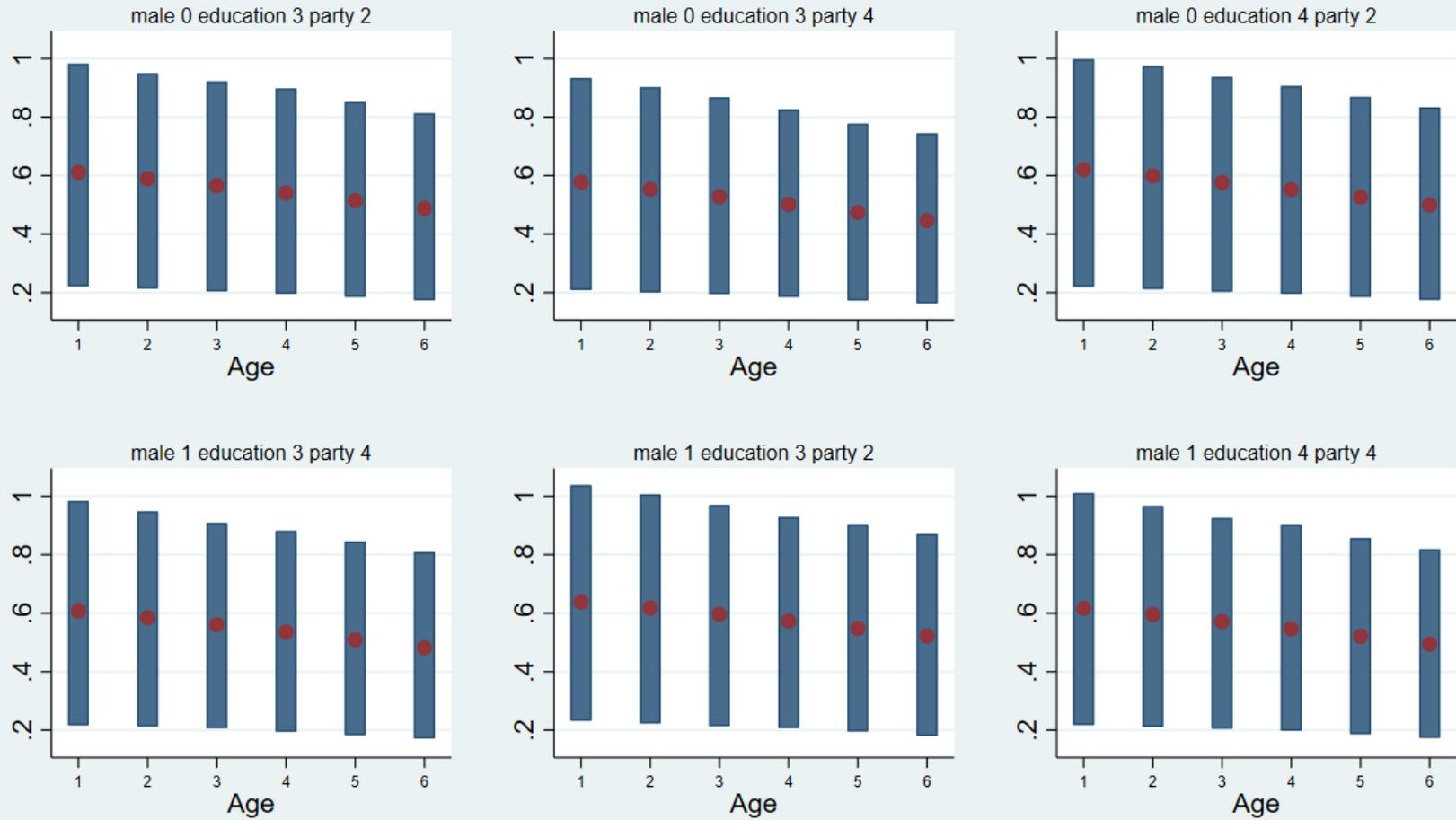
Feeling toward Hayazania(10-point scale): 1 = don't feel favorable, 10 = feel favorable  
 Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat  
 Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+  
 Male: 1=male, 0=female/other  
 Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher  
 Ordered logistic regression  
 \* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

図 18 : Probability of feeling toward Hayazania



Feeling toward Hayazania(10-point scale):1 = don't feel favorable, 10 = feel favorable  
 25-34 years old, Male, Some college completed, Leans Democrat

☒ 19 : Difference in predicted weighted average of feeling toward Hayazania  
PWA(Male soldier/Male victim) - PWA(Male soldier/Female victim)



Feeling toward Hayazania(10-point scale): 1=don't feel favorable, 10=feel favorable  
 Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat  
 Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+  
 Male: 1=male, 0=female/other  
 Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

表10: Feeling toward the US

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	Feeling toward the US				
v_sol_woman_vic_man	0.115 (0.67)	0.108 (0.63)	0.0895 (0.52)	0.115 (0.67)	0.113 (0.66)
v_sol_woman_vic_woman	-0.108 (-0.67)	-0.0880 (-0.54)	-0.122 (-0.76)	-0.108 (-0.67)	-0.109 (-0.67)
v_sol_man_vic_man	0.0289 (0.18)	0.0419 (0.26)	-0.00829 (-0.05)	0.0291 (0.18)	0.0289 (0.18)
party	-0.299*** (-6.10)		-0.337*** (-6.93)	-0.299*** (-6.13)	-0.302*** (-6.16)
age	0.275*** (5.42)	0.320*** (6.35)		0.275*** (5.44)	0.274*** (5.41)
male	-0.00368 (-0.03)	0.0832 (0.69)	-0.0592 (-0.49)		-0.00649 (-0.05)
education	-0.0693 (-0.86)	-0.0992 (-1.23)	-0.0616 (-0.77)	-0.0694 (-0.86)	
N	880	880	880	880	880

Feeling toward the US(10-point scale): 1 = don't feel favorable, 10 = feel favorable

Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat

Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+

Male: 1=male, 0=female/other

Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

Ordered logistic regression

Baseline: male soldier and female victim

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表11: How well is the U.S. military campaign going?

	(1)	(2) Well-Bad	(3)	(4)	(5)
v_sol_woman_vic_man	-0.0380 (-0.20)	-0.0395 (-0.21)	-0.0255 (-0.14)	-0.0351 (-0.19)	-0.0379 (-0.20)
v_sol_woman_vic_woman	0.208 (1.18)	0.207 (1.17)	0.216 (1.23)	0.211 (1.20)	0.208 (1.18)
v_sol_man_vic_man	-0.0709 (-0.40)	-0.0714 (-0.40)	-0.0594 (-0.33)	-0.0697 (-0.39)	-0.0707 (-0.40)
party	0.0196 (0.37)		0.0418 (0.80)	0.0220 (0.42)	0.0199 (0.38)
age	-0.147** (-2.68)	-0.151** (-2.77)		-0.145** (-2.66)	-0.148** (-2.69)
male	-0.0475 (-0.36)	-0.0538 (-0.41)	0.000210 (0.00)		-0.0474 (-0.36)
education	0.00741 (0.08)	0.00948 (0.11)	0.0136 (0.15)	0.00715 (0.08)	
N	880	880	880	880	880

Well-Bad(5-point scale): 1 = Very well, 2 = Well, 3 = Neutral, 4 = Bad, 5 = Very bad

Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat

Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+ Male: 1=male, 0=female/other

Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

Ordered logistic regression

Baseline: male soldier and female victim

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表12: Do you think the decision to dispatch the military was the right thing?

	(1)	(2) Right-Wrong	(3)	(4)	(5)
v_sol_woman_vic_man	0.256 (1.41)	0.262 (1.45)	0.273 (1.51)	0.238 (1.32)	0.257 (1.42)
v_sol_woman_vic_woman	0.363* (2.14)	0.370* (2.18)	0.364* (2.15)	0.350* (2.07)	0.365* (2.16)
v_sol_man_vic_man	0.174 (1.01)	0.178 (1.03)	0.196 (1.14)	0.168 (0.97)	0.180 (1.04)
party	-0.0831 (-1.63)		-0.0608 (-1.21)	-0.0939 (-1.86)	-0.0791 (-1.56)
age	-0.150** (-2.79)	-0.136* (-2.57)		-0.163** (-3.08)	-0.150** (-2.81)
male	0.203 (1.59)	0.231 (1.83)	0.259* (2.06)		0.205 (1.61)
education	0.0952 (1.12)	0.0854 (1.01)	0.0976 (1.15)	0.0976 (1.15)	
N	880	880	880	880	880

Right-Wrong(5-point scale):1=Right, 2=Somewhat right, 3=Depends/Neutral, 4=Somewhat wrong, 5=Wrong

Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat

Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+

Male: 1=male, 0=female/other

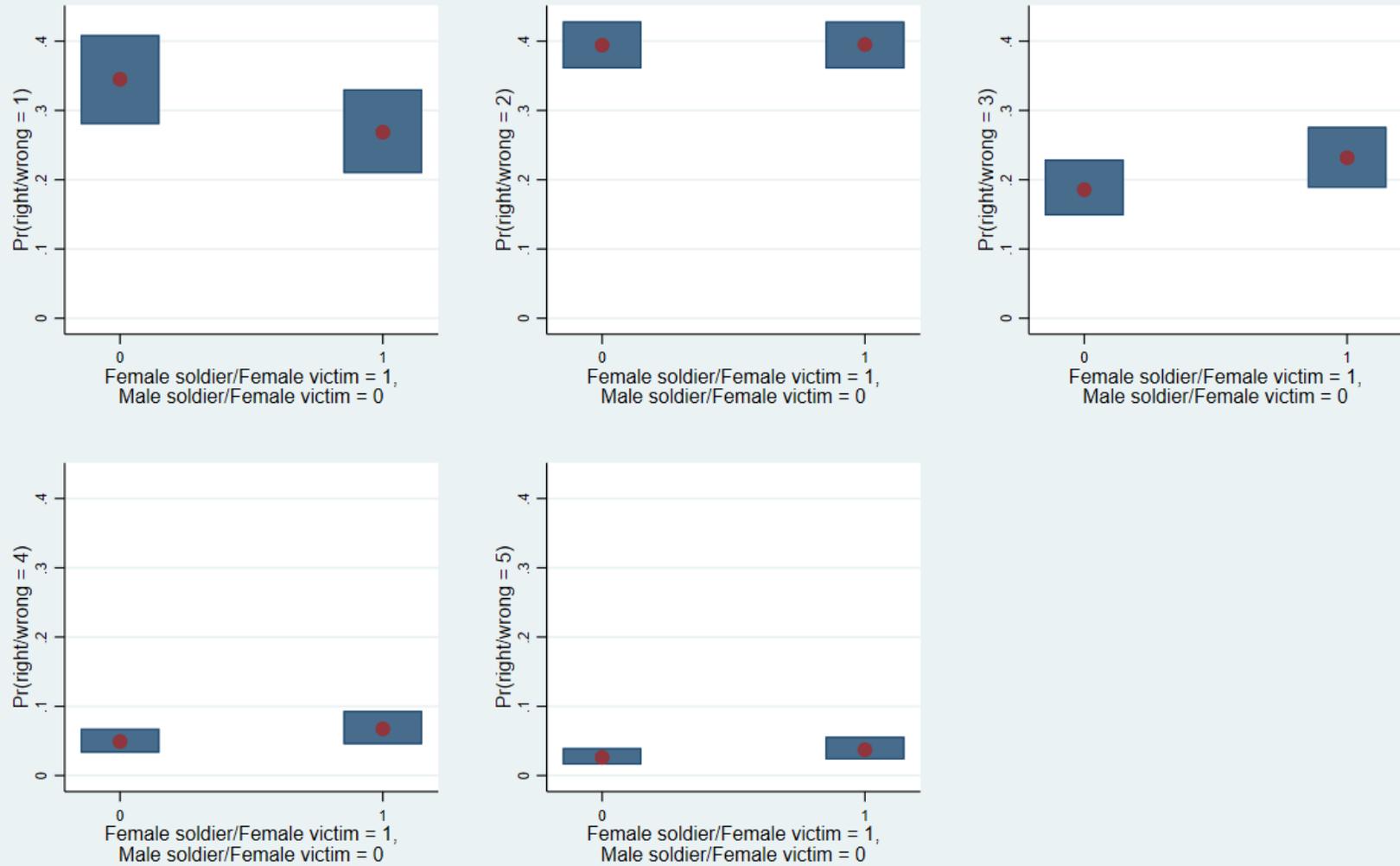
Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

Ordered logistic regression

Baseline: male soldier and female victim. Ordered logistic regression model

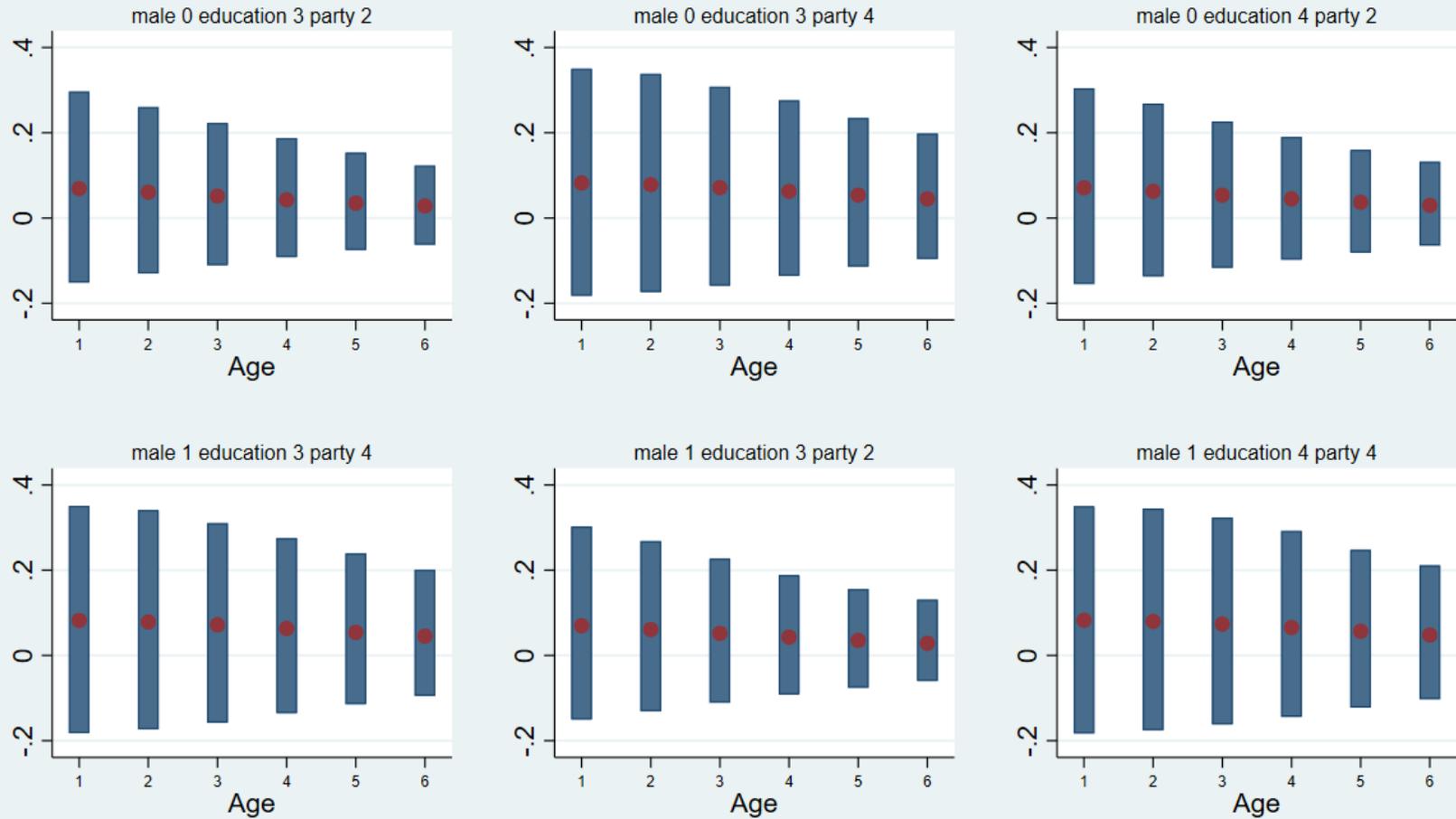
\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

図 20 : Probability of thinking right/wrong



Right-Wrong(5-point scale): 1=Right, 2=Somewhat right, 3=Depends/Neutral, 4=Somewhat wrong, 5=Wrong, 25-34 years old, Male, Some college completed, Leans Democrat

図 21 : Difference in predicted weighted average of Right/Wrong  
PWA(Female soldier/Female victim)-PWA(Male soldier/Female victim)



Right-Wrong(5-point scale): 1=Right, 2=Somewhat right, 3=Depends/Neutral, 4=Somewhat wrong, 5=Wrong,  
 Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat  
 Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+  
 Male: 1=male, 0=female/other  
 Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

表13: Would you favor or oppose sending U.S. ground troops?

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	Favor-Oppose				
v_sol_woman_vic_man	0.249 (1.39)	0.251 (1.40)	0.265 (1.48)	0.214 (1.20)	0.249 (1.39)
v_sol_woman_vic_woman	0.379* (2.28)	0.381* (2.29)	0.382* (2.29)	0.355* (2.14)	0.379* (2.28)
v_sol_man_vic_man	0.228 (1.35)	0.231 (1.36)	0.242 (1.43)	0.218 (1.29)	0.230 (1.35)
party	-0.0286 (-0.56)		-0.00993 (-0.20)	-0.0465 (-0.92)	-0.0234 (-0.46)
age	-0.112* (-2.14)	-0.107* (-2.07)		-0.130* (-2.48)	-0.114* (-2.16)
male	0.370** (2.96)	0.379** (3.04)	0.400** (3.22)		0.374** (2.99)
education	0.109 (1.31)	0.106 (1.27)	0.113 (1.35)	0.115 (1.38)	
N	880	880	880	880	880

Favor-Oppose(5-point scale): 1 = Favor strongly, 2 = Favor not strongly, 3 = Neither/Both, 4 = Oppose not strongly, 5 = Oppose strongly

Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat

Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+

Male: 1=male, 0=female/other

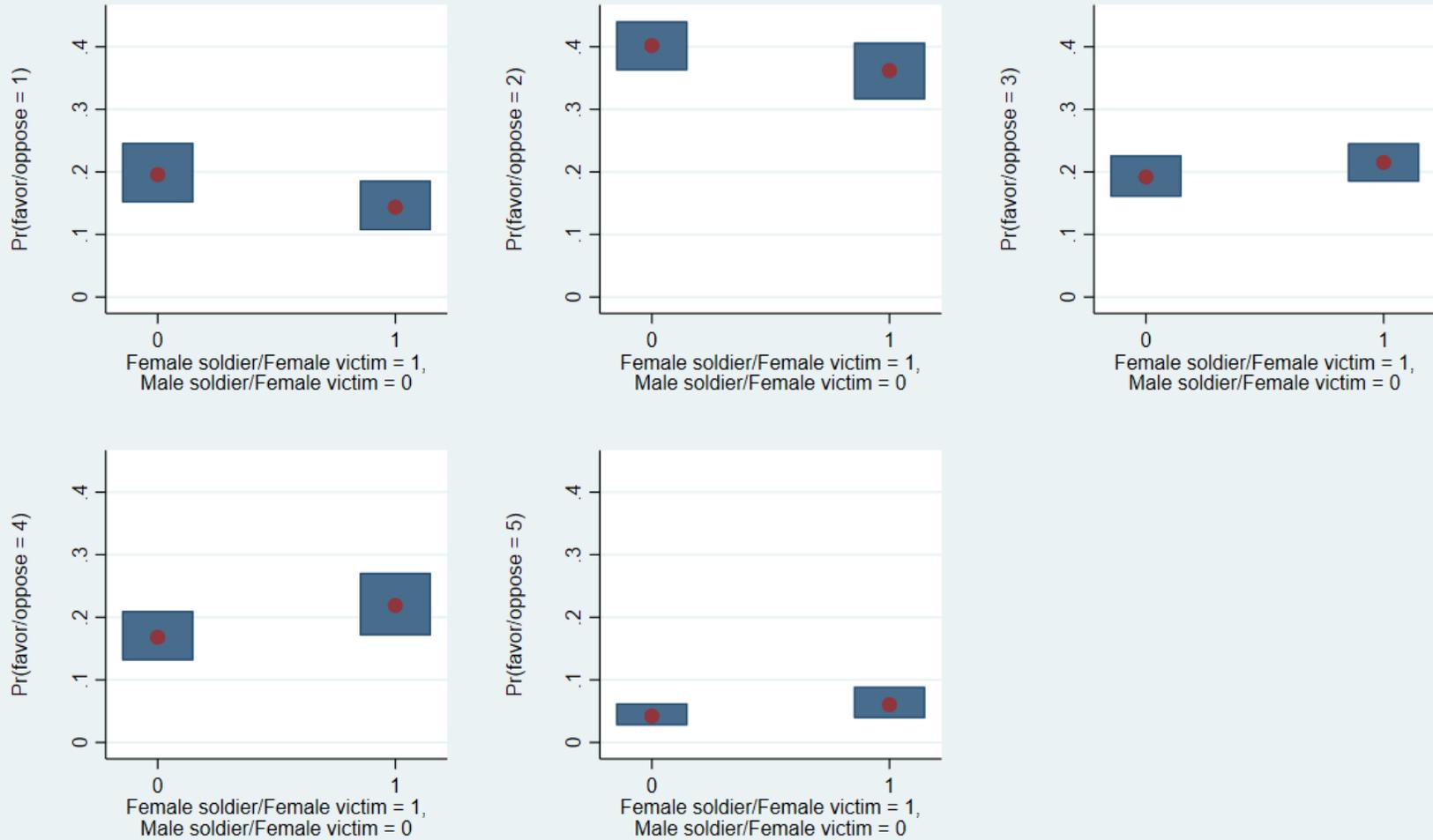
Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

Ordered logistic regression

Baseline: male soldier and female victim

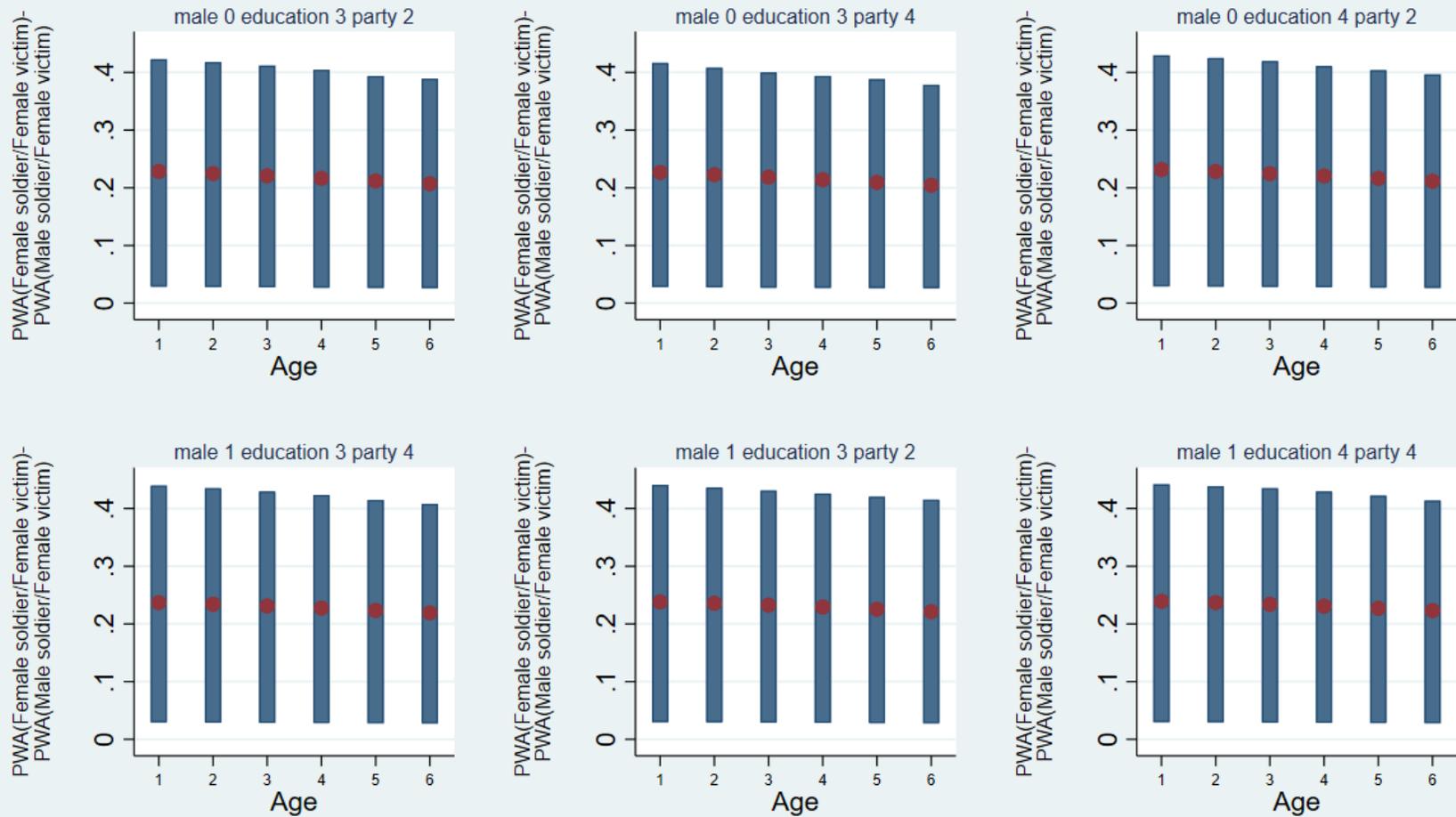
\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

図 22 : Probability of favor/oppose



Favor-Oppose(5-point scale): 1 = Favor strongly, 2 = Favor not strongly, 3 = Neither/Both, 4 = Oppose not strongly, 5 = Oppose strongly  
 25-34 years old, Male, Some college completed, Leans Democrat

図 23 : Difference in predicted weighted average of favor\_oppose  
 $PWA(\text{Female soldier}/\text{Female victim}) - PWA(\text{Male soldier}/\text{Female victim})$



Favor-Oppose(5-point scale): 1 = Favor strongly, 2 = Favor not strongly, 3 = Neither/Both, 4 = Oppose not strongly, 5 = Oppose strongly  
 Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat  
 Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+  
 Male: 1=male, 0=female/other  
 Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

表14: What would you say is your level of interest in war?

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	interest_war	interest_war	interest_war	interest_war	interest_war
interest_war					
v_sol_man_vic_woman	0.105 (0.58)	0.103 (0.56)	0.0919 (0.50)	0.00135 (0.01)	0.105 (0.58)
v_sol_woman_vic_woman	0.220 (1.19)	0.220 (1.19)	0.206 (1.11)	0.194 (1.06)	0.220 (1.19)
v_sol_man_vic_man	-0.353 (-1.91)	-0.354 (-1.91)	-0.345 (-1.86)	-0.397* (-2.15)	-0.356 (-1.92)
party	-0.0300 (-0.59)		0.0109 (0.22)	0.0215 (0.43)	-0.0346 (-0.68)
age	-0.239*** (-4.49)	-0.233*** (-4.45)		-0.188*** (-3.56)	-0.240*** (-4.51)
male	-0.910*** (-6.93)	-0.899*** (-6.92)	-0.828*** (-6.39)		-0.914*** (-6.96)
education	-0.122 (-1.42)	-0.125 (-1.46)	-0.126 (-1.47)	-0.134 (-1.57)	
N	880	880	880	880	880

Interest in war: 1 = Extremely interested, 2 = Very interested, 3 = Somewhat interested, 4 = Not so interested, 5 = Not at all interested

Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat

Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+ Male: 1=male, 0=female/other

Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

Ordered logistic regression model. Baseline: female soldier and male victim

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

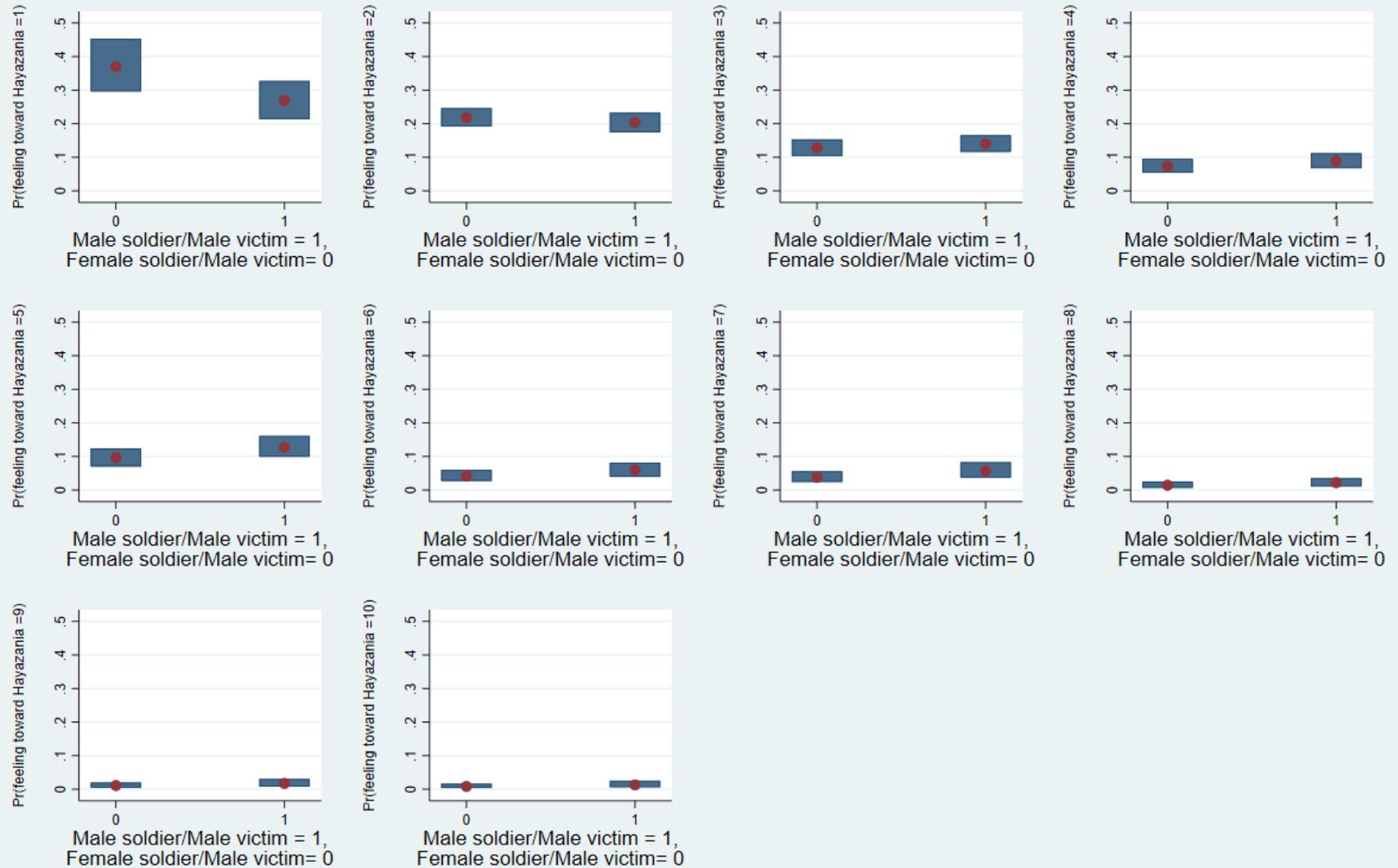
表 15: Feeling toward Hayazania

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	Feeling toward Hayazania				
feeling_Hayazania					
v_sol_man_vic_woman	-0.0289 (-0.16)	-0.0283 (-0.16)	-0.0454 (-0.26)	-0.0144 (-0.08)	-0.0305 (-0.17)
v_sol_woman_vic_woman	0.0174 (0.10)	0.0243 (0.14)	0.00310 (0.02)	0.0181 (0.10)	0.0156 (0.09)
v_sol_man_vic_man	0.482** (2.67)	0.491** (2.73)	0.483** (2.68)	0.488** (2.71)	0.482** (2.67)
party	-0.104* (-2.05)		-0.0783 (-1.57)	-0.113* (-2.24)	-0.101* (-2.00)
age	-0.141** (-2.64)	-0.120* (-2.30)		-0.150** (-2.85)	-0.140** (-2.63)
male	0.180 (1.46)	0.210 (1.72)	0.221 (1.81)		0.182 (1.47)
education	0.0560 (0.68)	0.0434 (0.53)	0.0510 (0.62)	0.0582 (0.70)	
N	880	880	880	880	880

Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+ Male: 1=male, 0=female/other Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher Feeling toward Hayazania(10-point scale): 1 = don't feel favorable, 10 = feel favorable ordered logistic regression

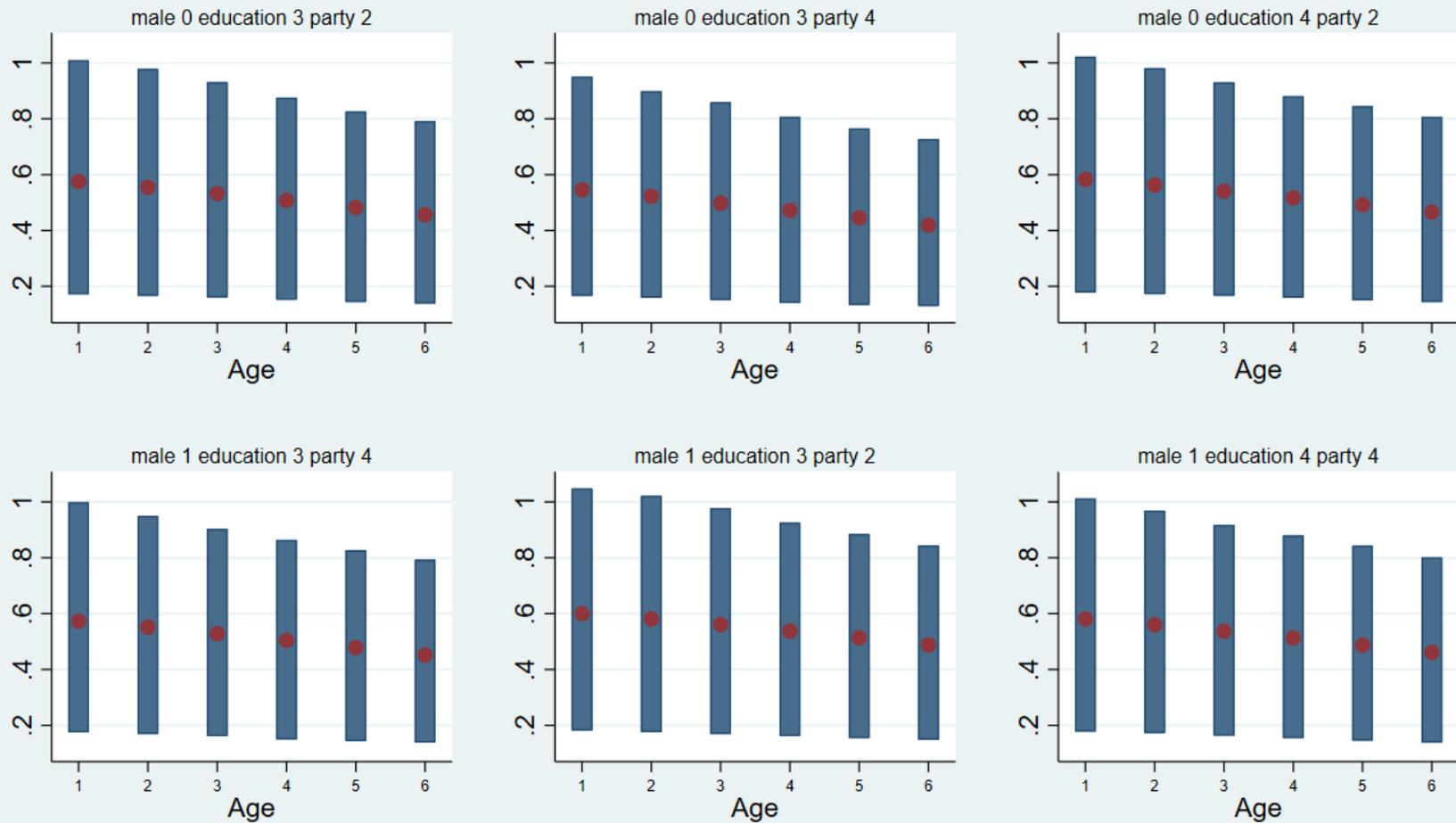
\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

図 24 : Probability of feeling toward Hayazania



Feeling toward Hayazania(10-point scale):1 = don't feel favorable, 10 = feel favorable  
 25-34 years old, Male, Some college completed, Leans Democrat

図 25 : Difference in predicted weighted average of feeling toward Hayazania  
PWA(Male soldier/Male victim) - PWA(Female soldier/Male victim)



Feeling toward Hayazania(10-point scale): 1=don't feel favorable, 10=feel favorable  
 Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat  
 Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+  
 Male: 1=male, 0=female/other  
 Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

表16: Feeling toward the US

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	Feeling toward the US				
v_sol_man_vic_woman	-0.115 (-0.67)	-0.108 (-0.63)	-0.0895 (-0.52)	-0.115 (-0.67)	-0.113 (-0.66)
v_sol_woman_vic_woman	-0.223 (-1.29)	-0.196 (-1.13)	-0.212 (-1.22)	-0.223 (-1.29)	-0.222 (-1.28)
v_sol_man_vic_man	-0.0860 (-0.49)	-0.0664 (-0.38)	-0.0978 (-0.56)	-0.0862 (-0.49)	-0.0842 (-0.48)
party	-0.299*** (-6.10)		-0.337*** (-6.93)	-0.299*** (-6.13)	-0.302*** (-6.16)
age	0.275*** (5.42)	0.320*** (6.35)		0.275*** (5.44)	0.274*** (5.41)
male	-0.00368 (-0.03)	0.0832 (0.69)	-0.0592 (-0.49)		-0.00649 (-0.05)
education	-0.0693 (-0.86)	-0.0992 (-1.23)	-0.0616 (-0.77)	-0.0694 (-0.86)	
N	880	880	880	880	880

Feeling toward the US(10-point scale): 1 = don't feel favorable, 10 = feel favorable Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+ Male: 1=male, 0=female/other Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher Ordered logistic regression  
Baseline: Female soldier and male victim

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表17: How well is the U.S. military campaign going?

	(1)	(2) Well-Bad	(3)	(4)	(5)
v_sol_man_vic_woman	0.0380 (0.20)	0.0395 (0.21)	0.0255 (0.14)	0.0351 (0.19)	0.0379 (0.20)
v_sol_woman_vic_woman	0.246 (1.31)	0.246 (1.31)	0.242 (1.28)	0.246 (1.31)	0.246 (1.31)
v_sol_man_vic_man	-0.0328 (-0.17)	-0.0319 (-0.17)	-0.0339 (-0.18)	-0.0347 (-0.18)	-0.0329 (-0.17)
party	0.0196 (0.37)		0.0418 (0.80)	0.0220 (0.42)	0.0199 (0.38)
age	-0.147** (-2.68)	-0.151** (-2.77)		-0.145** (-2.66)	-0.148** (-2.69)
male	-0.0475 (-0.36)	-0.0538 (-0.41)	0.000210 (0.00)		-0.0474 (-0.36)
education	0.00741 (0.08)	0.00948 (0.11)	0.0136 (0.15)	0.00715 (0.08)	
N	880	880	880	880	880

Well-Bad(5-point scale): 1 = Very well, 2 = Well, 3 = Neutral, 4 = Bad, 5 = Very bad  
 Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat  
 Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+  
 Male: 1=male, 0=female/other  
 Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher  
 Ordered logistic regression  
 Baseline: Female soldier and male victim  
 Ordered logistic regression model  
 \* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表18: Do you think the decision to dispatch the military was the right thing?

	(1) right_wrong	(2) right_wrong	(3) right_wrong	(4) right_wrong	(5) right_wrong
v_sol_man_vic_woman	-0.256 (-1.41)	-0.262 (-1.45)	-0.273 (-1.51)	-0.238 (-1.32)	-0.257 (-1.42)
v_sol_woman_vic_woman	0.107 (0.60)	0.108 (0.60)	0.0914 (0.51)	0.112 (0.62)	0.108 (0.60)
v_sol_man_vic_man	-0.0822 (-0.45)	-0.0841 (-0.46)	-0.0764 (-0.42)	-0.0706 (-0.39)	-0.0771 (-0.42)
party	-0.0831 (-1.63)		-0.0608 (-1.21)	-0.0939 (-1.86)	-0.0791 (-1.56)
age	-0.150** (-2.79)	-0.136* (-2.57)		-0.163** (-3.08)	-0.150** (-2.81)
male	0.203 (1.59)	0.231 (1.83)	0.259* (2.06)		0.205 (1.61)
education	0.0952 (1.12)	0.0854 (1.01)	0.0976 (1.15)	0.0976 (1.15)	
N	880	880	880	880	880

Right-Wrong(5-point scale):1 = Right, 2= Somewhat right, 3 = Depends/Neutral, 4 = Somewhat wrong, 5 = Wrong

Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat

Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+

Male: 1=male, 0=female/other

Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

Ordered logistic regression

Baseline: Female soldier and male victim Ordered logistic regression model

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表19: Would you favor or oppose sending U.S. ground troops?

	(1)	(2) Favor-Oppose	(3)	(4)	(5)
v_sol_man_vic_woman	-0.249 (-1.39)	-0.251 (-1.40)	-0.265 (-1.48)	-0.214 (-1.20)	-0.249 (-1.39)
v_sol_woman_vic_woman	0.130 (0.73)	0.130 (0.73)	0.117 (0.65)	0.141 (0.79)	0.130 (0.73)
v_sol_man_vic_man	-0.0204 (-0.11)	-0.0199 (-0.11)	-0.0230 (-0.13)	0.00386 (0.02)	-0.0193 (-0.11)
party	-0.0286 (-0.56)		-0.00993 (-0.20)	-0.0465 (-0.92)	-0.0234 (-0.46)
age	-0.112* (-2.14)	-0.107* (-2.07)		-0.130* (-2.48)	-0.114* (-2.16)
male	0.370** (2.96)	0.379** (3.04)	0.400** (3.22)		0.374** (2.99)
education	0.109 (1.31)	0.106 (1.27)	0.113 (1.35)	0.115 (1.38)	
N	880	880	880	880	880

Favor-Oppose(5-point scale): 1 = Favor strongly, 2 = Favor not strongly, 3 = Neither/Both, 4 = Oppose not strongly, 5 = Oppose strongly

Party: 1=Strongly Republican, 2=Leans Republican, 3=Undecided/Independent, 4=Leans Democrat, 5=Strongly Democrat

Age: 1=18-24, 2=25-34, 3=35-44, 4=45-54, 5=55-64, 6=65+

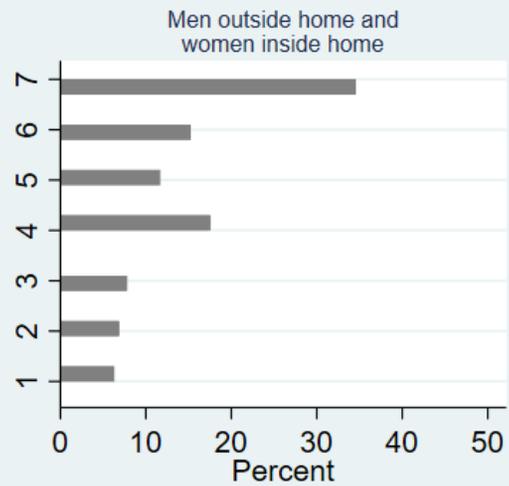
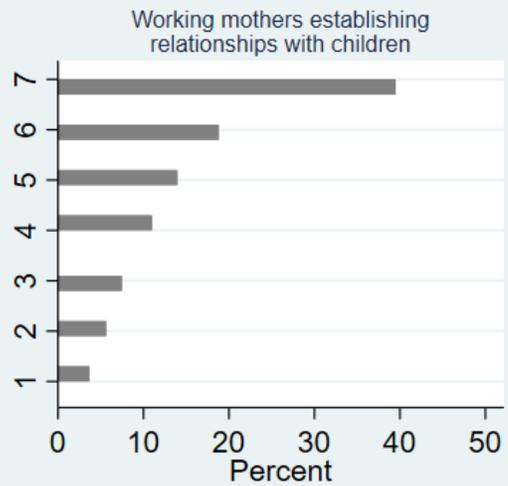
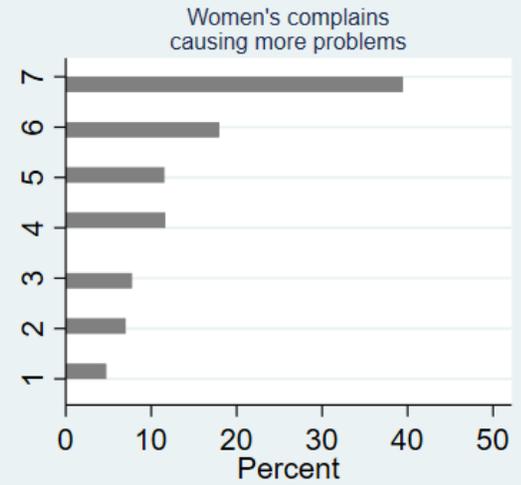
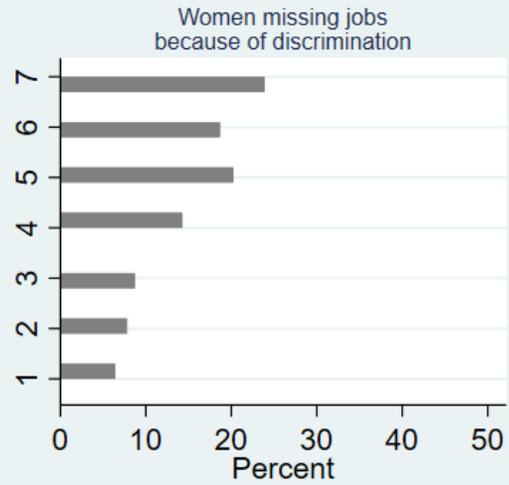
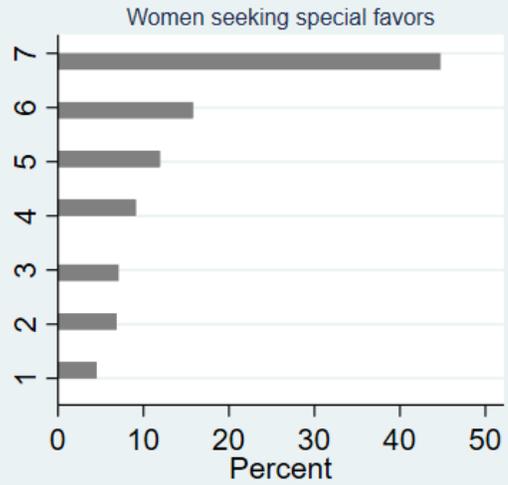
Male: 1=male, 0=female/other Education: 1=Less than high school, 2=High school, 3=Some college, 4=Bachelor's degree or higher

Ordered logistic regression

Baseline: Female soldier and male victim

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

図 26 : Gender stereotypes scores



7-point scale: 1=Conservative view, 7=Liberal view

表20: What would you say is your level of interest in war?

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	Interest in war				
interest_war					
v_protection	0.872 (1.17)	0.867 (1.16)	0.823 (1.10)	1.033 (1.39)	0.900 (1.21)
v_prot_self_interest	-0.557 (-0.73)	-0.516 (-0.69)	-0.595 (-0.79)	-0.417 (-0.56)	-0.455 (-0.60)
gen_stereotype	0.00551 (0.28)	0.0147 (0.75)	0.00355 (0.18)	0.00716 (0.36)	-0.00349 (-0.18)
stereotype_protection	-0.0332 (-1.20)	-0.0343 (-1.24)	-0.0323 (-1.16)	-0.0355 (-1.28)	-0.0338 (-1.22)
stereotype_prot_self	0.0342 (1.21)	0.0324 (1.16)	0.0343 (1.22)	0.0311 (1.11)	0.0307 (1.09)
party	-0.122 (-1.78)	-0.122 (-1.79)	-0.118 (-1.73)	-0.0837 (-1.24)	
age	-0.304*** (-4.63)	-0.248*** (-3.86)	-0.307*** (-4.68)		-0.290*** (-4.46)
education	-0.210 (-1.95)	-0.213* (-1.99)		-0.222* (-2.06)	-0.205 (-1.90)
male	-0.934*** (-5.78)		-0.935*** (-5.79)	-0.826*** (-5.20)	-0.933*** (-5.78)
N	590	590	590	590	590

1 = Extremely interested, 2 = Very interested, 3 = Somewhat interested, 4 = Not so interested, 5 = Not at all interested ordered logistic regression model

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表 21 : Feeling toward Hayazania

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	Feeling toward Hayazania				
v_protection	-0.424 (-0.61)	-0.423 (-0.61)	-0.429 (-0.61)	-0.382 (-0.55)	-0.407 (-0.58)
v_prot_self_interest	0.191 (0.27)	0.191 (0.27)	0.185 (0.26)	0.239 (0.34)	0.0939 (0.13)
gen_stereotype	-0.0109 (-0.59)	-0.0110 (-0.59)	-0.0112 (-0.60)	-0.0103 (-0.56)	-0.00176 (-0.10)
stereotype_protection	-0.0238 (-0.91)	-0.0239 (-0.91)	-0.0238 (-0.91)	-0.0238 (-0.91)	-0.0251 (-0.96)
stereotype_prot_self	-0.0273 (-1.03)	-0.0273 (-1.03)	-0.0273 (-1.03)	-0.0281 (-1.06)	-0.0237 (-0.89)
party	0.119 (1.77)	0.119 (1.77)	0.119 (1.78)	0.131 (1.96)	
age	-0.105 (-1.73)	-0.106 (-1.75)	-0.106 (-1.75)		-0.116 (-1.93)
education	-0.0347 (-0.34)	-0.0345 (-0.34)		-0.0440 (-0.43)	-0.0385 (-0.38)
male	0.00884 (0.06)		0.00710 (0.05)	0.0334 (0.22)	0.0119 (0.08)
N	590	590	590	590	590

10-point scale, 1 = don't feel favorable, 10 = feel favorable. Ordered logistic regression.

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表 22 : Feeling toward the US

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	Feeling toward the US				
v_protection	-0.0709 (-0.10)	-0.0717 (-0.10)	-0.0455 (-0.06)	-0.180 (-0.25)	-0.0785 (-0.11)
v_prot_self_interest	0.708 (0.99)	0.705 (0.99)	0.722 (1.01)	0.609 (0.85)	0.915 (1.29)
gen_stereotype	-0.0424* (-2.23)	-0.0422* (-2.23)	-0.0419* (-2.21)	-0.0404* (-2.12)	-0.0648*** (-3.53)
stereotype_protection	0.0247 (0.92)	0.0247 (0.92)	0.0245 (0.92)	0.0248 (0.93)	0.0262 (0.97)
stereotype_prot_self	-0.0184 (-0.69)	-0.0184 (-0.69)	-0.0179 (-0.67)	-0.0180 (-0.68)	-0.0252 (-0.95)
party	-0.292*** (-4.37)	-0.292*** (-4.37)	-0.292*** (-4.36)	-0.321*** (-4.82)	
age	0.279*** (4.65)	0.280*** (4.71)	0.283*** (4.73)		0.303*** (5.07)
education	0.148 (1.46)	0.148 (1.46)		0.171 (1.69)	0.147 (1.44)
male	-0.0343 (-0.23)		-0.0311 (-0.21)	-0.113 (-0.77)	-0.0438 (-0.30)
N	590	590	590	590	590

10-point scale, 1 = don't feel favorable, 10 = feel favorable. Ordered logistic regression

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表 23: How well is the U.S. military campaign going?

	(1)	(2) Well_Bad	(3)	(4)	(5)
well_bad					
v_protection	0.742 (1.01)	0.739 (1.00)	0.728 (0.99)	0.832 (1.13)	0.742 (1.01)
v_prot_self_interest	-0.271 (-0.35)	-0.273 (-0.36)	-0.267 (-0.35)	-0.214 (-0.28)	-0.336 (-0.44)
gen_stereotype	0.0110 (0.53)	0.0114 (0.55)	0.0104 (0.51)	0.0111 (0.53)	0.0161 (0.81)
stereotype_protection	-0.0302 (-1.09)	-0.0301 (-1.08)	-0.0300 (-1.08)	-0.0305 (-1.10)	-0.0306 (-1.10)
stereotype_prot_self	-0.000805 (-0.03)	-0.000665 (-0.02)	-0.00147 (-0.05)	-0.00107 (-0.04)	0.00157 (0.06)
party	0.0696 (0.98)	0.0693 (0.98)	0.0703 (0.99)	0.104 (1.49)	
age	-0.220*** (-3.36)	-0.217*** (-3.34)	-0.222*** (-3.40)		-0.229*** (-3.54)
education	-0.0885 (-0.81)	-0.0899 (-0.83)		-0.105 (-0.97)	-0.0898 (-0.83)
male	-0.0536 (-0.34)		-0.0583 (-0.37)	0.00789 (0.05)	-0.0520 (-0.33)
N	590	590	590	590	590

5-point scale, 1 = Very well, 2 = Well, 3 = Neutral, 4 = Bad, 5 = Very bad ordered logistic regression model

\* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表 24: Do you think the decision to dispatch the military was the right thing?

	(1)	(2) Right-Wrong	(3)	(4)	(5)
right_wrong					
v_protection	0.479 (0.65)	0.477 (0.65)	0.495 (0.67)	0.513 (0.70)	0.488 (0.66)
v_prot_self_interest	0.547 (0.73)	0.531 (0.71)	0.562 (0.75)	0.567 (0.76)	0.431 (0.58)
gen_stereotype	0.0457* (2.29)	0.0442* (2.23)	0.0464* (2.32)	0.0459* (2.29)	0.0555** (2.87)
stereotype_protection	-0.0530 (-1.92)	-0.0528 (-1.92)	-0.0532 (-1.93)	-0.0537 (-1.95)	-0.0539 (-1.96)
stereotype_prot_self	-0.0404 (-1.46)	-0.0399 (-1.44)	-0.0404 (-1.46)	-0.0407 (-1.47)	-0.0363 (-1.32)
party	0.127 (1.84)	0.126 (1.83)	0.126 (1.82)	0.137* (2.01)	
age	-0.0610 (-0.97)	-0.0699 (-1.12)	-0.0583 (-0.93)		-0.0787 (-1.27)
education	0.0826 (0.79)	0.0888 (0.86)		0.0769 (0.74)	0.0782 (0.75)
male	0.189 (1.23)		0.195 (1.27)	0.206 (1.35)	0.186 (1.22)
N	590	590	590	590	590

5-point scale, 1 = Right, 2 = Somewhat right, 3 = Depends/Neutral, 4 = Somewhat wrong, 5 = Wrong  
 ordered logistic regression model. \* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

表 25: Would you favor or oppose sending U.S. ground troops?

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)
	Favor-Oppose				
v_protection	0.716 (1.01)	0.705 (1.00)	0.723 (1.02)	0.737 (1.04)	0.684 (0.97)
v_prot_self_interest	0.769 (1.05)	0.728 (0.99)	0.797 (1.09)	0.788 (1.07)	0.536 (0.74)
gen_stereotype	0.0384* (2.03)	0.0351 (1.87)	0.0393* (2.08)	0.0387* (2.04)	0.0525** (2.85)
stereotype_protection	-0.0625* (-2.35)	-0.0616* (-2.32)	-0.0620* (-2.33)	-0.0629* (-2.36)	-0.0622* (-2.34)
stereotype_prot_self	-0.0476 (-1.75)	-0.0460 (-1.70)	-0.0476 (-1.75)	-0.0480 (-1.77)	-0.0396 (-1.47)
party	0.200** (2.90)	0.200** (2.91)	0.199** (2.89)	0.205** (3.00)	
age	-0.0334 (-0.53)	-0.0499 (-0.80)	-0.0293 (-0.47)		-0.0581 (-0.94)
education	0.147 (1.43)	0.160 (1.56)		0.144 (1.40)	0.144 (1.41)
male	0.315* (2.05)		0.329* (2.14)	0.325* (2.14)	0.317* (2.06)
N	590	590	590	590	590

Favor-Oppose (5-point scale): 1 = Favor strongly, 2 = Favor not strongly, 3 = Neither/Both, 4 = Oppose not strongly, 5 = Oppose strongly  
 Ordered logistic regression model  
 \* p<0.05, \*\* p<0.01, \*\*\* p<0.001

## 第七章 総括

本章の目的は、以下の三つに分けられる。第一に、本研究の目的と意義、理論と仮説を振り返る。第二に、本研究を通して得られた分析結果を振り返り、本研究のインプリケーションについて述べる。第三に、本研究の分析結果を踏まえて、今後の課題と展望に言及する。

### 7.1. 本研究の概略

どのような条件下で、人々は、戦争を通して見ず知らずの他者の命を奪うことを許可するのか。また、人々の日常生活を規定しているどのような社会観念が、彼ら・彼女らの戦争に対する選好を高めるのか。本研究では、世論の戦争をめぐる態度や選好を、ジェンダー国際関係論の視角を導入して分析することで、これらの問いに答えることを目指した。

とりわけ、本研究では、多様な社会観念の中でも、勇敢な男性兵士が脆弱な犠牲者である女性を救うという、『美しき魂－正義の戦士』のフレームに着目して分析を行った。ジェンダー国際関係論者によれば、この『美しき魂－正義の戦士』をめぐる考え方を通して、男性は軍事行為の担い手として弱者である女性を守ることが求められた。その一方で、無垢で純粋であるとされる女性は、戦場の軍事行為から隔離された場所で、適切な振る舞いを維持することを通して、文化の価値や伝統を伝えることが求められた(Elshtain, 1987; Sjoberg, 2014; J. A. Tickner, 2002; Yuval-Davis, 1997a)。

本研究を通して、この『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、戦争の正当性に与えた影響を、以下の二つの仮説群の検証に取り組むことで解明することを試みた。一つ目の仮説群では、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、自己利益に焦点を当てたフレームに比べ、世論の戦争に対する関心を高め（仮説1）、自国と他国をめぐる世界観を形成し（仮説2および仮説3）、戦争をめぐる選好を高める（仮説4）という仮説を設定し、その妥当性を検証した。この仮説の論拠としては、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、シンプルで理解の容易いフレームであることと、文化的共鳴性の高いフレームであることに言及した。すなわち、人間個人の感情や経験に焦点を当てることで聴衆にとって理解が容易くなった(Baum, 2002)『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、人々の戦争に対する関心につながりやすいこと、また、聴衆の文化的背景と「共鳴(Snow & Benford, 1988)」する『美しき魂－正義の戦士』のフレームは、

聴衆の世界観や政策選好に対して影響力を持ちやすいと考えられることを、本仮説群を通して明らかにすることを試みた。

二つ目の仮説群では、この『美しき魂－正義の戦士』のフレームの影響力が、世論の戦争に対する関心・世界観・政策選好に与えた影響は、男性が保護者であり、女性が被保護者であるべきであるとする、伝統的なジェンダー観念に支えられてきたことを予想し、実証を試みた。二つ目の仮説群では、保護者である米兵が男性であり、被保護者の紛争地市民が女性であるという伝統的なジェンダー観念に沿った性別の組み合わせ（仮説5）、および、個人レベルのジェンダー・ステレオタイプに対する共感度の度合い（仮説7）が、一つ目の仮説群で検討した効果に影響することを予想した。さらに二つ目の仮説群では、保護者である米兵が女性であり、被保護者である紛争地市民が男性であることで、先進的なジェンダー観念を受け入れている女性の正当性が上昇することに言及した仮説も立て、実証を試みた（仮説6）。次節で述べるように、この仮説群については、限定的なデータの支持のみを受けることとなった。

本研究の意義は、以下の二点に求めることができる。第一に、本研究では、人々の日常生活を規定する社会観念の中でも、ジェンダー観念に着目することで、世論の軍事政策に対する選好をめぐる問いを解明することを試みた。これまでも、人々の日常生活を規定してきた、人間社会を自集団と他集団に区分する世界観の一つである、エスノセントリズムに焦点を当てることで、世論の戦争をめぐる選好をめぐる分析が行われてきた(Kam & Kinder, 2007; Kinder & Kam, 2010)。一方で、世論と戦争をめぐる研究は、ジェンダー観念については、ほとんどの場合関心を払ってこなかった。

だが、軍事力の正当性とジェンダー観念は複雑に絡み合っている。ジェンダー国際関係論者が述べるように、軍事力の存在の正当性や軍事行為の正当性は、軍隊が男性によって構成される「男らしい」組織であることや、弱者である女性を守る組織であることに大きく依存してきた(C. Enloe, 1993)。弱者である女性のために英雄的に命を落とすという語りによって、男性は不承不承戦地に赴くことを受け入れてきたし(C. Enloe, 2000; Sjoberg, 2010)、このような英雄男性を称える女性によっても、戦争の正当性は支えられてきた(Elshtain, 1987; Goldstein, 2003)。そのため、本研究では、軍事力や軍事行為の正当性そのものを支えるジェンダー観念に焦点を当てることに意義があると考えた。

第二に、本研究は、ジェンダー国際関係論と、世論と戦争をめぐる研究を架橋することで、ジェンダー国際関係論と世論研究の双方に貢献する意義を持つ。軍事力の正当性がジェンダー観念に支えられてきたこと自体については、すでにジェンダー国際関係論による研究が積み重ねられている。だが、ジェンダー国際関係論は、時代や地域の文脈を重視し、また、一つの現象は複雑な相互関係の結果発生するとする立場をとることから、言説分析の手法等を用いるこ

とが多かった。そのため、二変数間の因果関係の解明を目的とした上で、第三の因子の影響を排除するために、定量手法や実験手法等を用いてきた伝統的な世論研究とは距離を置くことが多かった。ジェンダー国際関係論と伝統的な国際関係論は、共通の問いに取り組みつつも、異なる手法を用いていることから、その間には断絶が存在したのである(Mary Caprioli, 2004)。今日、ジェンダー観念を分析視角として用いる有用性に着目し、ジェンダーの視角を導入しながら、定量手法や実験手法を用いた分析を行う世論研究が現れつつあるものの(Scott Sigmund Gartner, 2008a; Johns & Davies, 2017)、これらの手法を用いて、ジェンダー国際関係論における問いを主眼に置いて分析を行った世論研究は、管見の限り見当たらない。本研究では、実験手法や定量手法を導入しながら、ジェンダー観念が軍事力の正当性につながることをすることで、ジェンダー国際関係論と伝統的な世論研究を架橋することを目指した。

## 7.2. 本研究の分析結果とインプリケーション

本研究の分析を通して、第一の仮説群で提示した、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、世論の戦争をめぐる世界観や戦争選好に与える点については、おおむねデータの支持を受けた。『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、戦争に対する関心に与える影響については、有意差が見られなかった。一方で、第二の仮説群で提示した、「勇敢な兵士が脆弱な紛争地被害者を救う」というフレームの影響力が、保護者を男性とし、被保護者を女性とする伝統的なジェンダー・ステレオタイプに支えられていたことについては、限定的なデータの支持を受ける形となった。また、伝統的なジェンダー・ステレオタイプを打破したとして、女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせが割り当てられた場合には、戦争の正当性が上昇すること、また、個人レベルのジェンダー・ステレオタイプに対する共感度に依存していたことについては、十分なデータの支持を受けることができなかった。

第一の仮説群の検証を通して明らかになったことは、以下の通りである。第一に、紛争国の女性の利益のために命を賭して戦うという『美しき魂－正義の戦士』のフレームを割り当てられることで、兵士の自己利益と米国の国益の双方に焦点を当てた経済フレームに焦点に割り当てられた場合以上に、紛争国に対する好感度が低下し、自国に対する好感度が上昇し、戦争に対する選好が高まることが確認された。第二に、『美しき魂－正義の戦士』のフレームのうち、正義の戦士の側面を弱めたフレーム（兵士の軍隊参加の理由が、女性の保護ではなく自己利益の追求であるフレーム）に割り当てられた場合は、経済フレームに割り当てられた場合以上に、紛争国に対する好感度が低下し、戦争に対する選好が高まることが確認された。第三

に、『美しき魂－正義の戦士』のフレームによる効果は、『美しき魂－正義の戦士』を弱めたフレームによる効果以上に、大きいことが確認された。

第二の仮説群の分析を通して得られた結果は以下のものであった。まず、保護者である米兵が男性・被保護者である紛争地市民が女性であることによる、他の組み合わせに対する効果で、有意差が見られたものは以下のものであった。戦争に対する関心については、仮説に反して、男性兵士・女性紛争地市民に割り当てられた場合以上に、男性兵士・男性紛争地市民に割り当てられた場合に、関心が高くなることが確認された。また、ハヤザニア国に対する好感度については、仮説に限定的に合致する形で、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合に、男性兵士・男性紛争地市民の組み合わせに割り当てられた場合と比して、ハヤザニア国に対する好感度が低下することが確認された。さらに、仮説に限定的に合致する形で、男性兵士・女性紛争地市民の組み合わせが割り当てられた場合には、女性兵士・女性紛争地市民の組み合わせが割り当てられた場合以上に、参加者が軍事派遣を正当なものとして考え、軍事派遣に賛成する傾向があることが明らかにされた。

一方で、女性兵士・男性紛争地市民の組み合わせを割り当てられた場合に、他の組み合わせを割り当てられた場合以上に、戦争の関心が高まり、二項対立的な世界観が形成され、戦争に対する政策選好が高まるという仮説についてはデータの支持を受けなかった。また、個人レベルの伝統的なジェンダー・ステレオタイプに対する共感性が高ければ高いほど、『美しき魂－正義の戦士』のフレームの影響力が大きくなるという仮説も、データに支持されなかった。

仮説の実証が必ずしも達成されなかったという分析結果を受けて、本研究においては、変数の操作化をめぐる、以下で挙げた四点の限界点と改善の余地があることが確認された。第一に、戦争に対する関心の計測が、本研究で実証しなかった理論と仮説に照らして、適切なものではなかったことを指摘できる。本研究では、『美しき魂－正義の戦士』のフレームが、シンプルで理解が容易であることによって、人々が戦争に対する関心を高めることを予想した。だが、本実験では、参加者の集中力を保つために、短い文章を用いて戦争をめぐる情報を参加者に提供した。そのため、本実験で比較対象として用いた経済フレームも、短文であり、理解が容易なものであった。このことが、『美しき魂－正義の戦士』のフレームの影響力を見出す上で、不都合であった可能性がある。したがって、今後の研究では、実際の新聞記事で提供される程度の長さによって、人々に戦争をめぐる情報を提供する必要があるかもしれない。

第二に、兵士と紛争地市民の性別の組み合わせを変更することで、複数の因果関係が同時に発生し、互いに効果を相殺した結果、フレーム間で効果の差が見られなかった可能性に言及できる。たとえば、保護者である米兵が男性であり、被保護者である紛争地市民が女性であった場合に、伝統的なジェンダー観念に沿うことから、軍事行為の正当性が高まることが予想で

きる。同時に、保護者である米兵が女性で被保護者である紛争市民が男性であった場合に、敵国男性を弱い立場に追いやることに成功したとして、戦争の正当性が高まる可能性がある。この相手国に対する優越感に基づく軍事行為の正当性の高まりは、米兵が男性で紛争地市民が男性の場合にも働こう。また、米兵も紛争地市民もともに女性であった場合には、平和的な者が平和的な者を助けているとして、戦争が平和的なものであるという認識が強くなった結果、軍事行為の正当性が上昇するかもしれない。このように、各性別の組み合わせごとに、異なる論理が働き、互いの効果が相殺された結果、フレーム毎の効果の差を十分に確認できなかった可能性がある。こうした可能性を検討するために、今後の研究では、戦争をめぐる態度や選好に関する質問に対し、実験参加者が特定の回答を選択した理由を述べてもらい、その回答をもとに因果関係の特定を行う等の工夫が必要となつてこよう。

第三に、ジェンダー・ステレオタイプの計測時に、社会的望ましさの影響を排除できなかったことによる弊害は大きい。第六章で見たように、参加者のジェンダー・ステレオタイプの回答は、明らかにリベラルな側に偏っていた。そして、最もリベラルな値を回答する人の人数が、二番目にリベラルな値を回答する人の人数と比べて、極端に多かった。そのため、参加者が、社会的に望ましい回答を意識して、ジェンダー・ステレオタイプをめぐる問いに回答した可能性を排除できない。センシティブな問いに対していかに本音に基づいた回答を引き出すかは難しい課題だが、たとえば、「社会のかなりの人々は、本音では今日のジェンダーの変容に戸惑っている」等の一文を、質問文の前に挿入することで、参加者が社会的望ましさを意識することをできる限り防ぐことが考えられよう。また、本研究では、男女の平等に対する立場を通してジェンダー・ステレオタイプを計測した。だが、本研究で焦点を当てたのは、男性と女性で求められる役割が異なるという認識という意味合いでのジェンダー・ステレオタイプであった。そのため、本実験で行ったような、男女の平等や女性の権利に対する態度という観点でのジェンダー・ステレオタイプの計測は、本研究の仮説を実証する上では不向きであったかもしれない。今後の研究では、たとえば、男性の殺人犯と女性の殺人犯に対する評価が異なるのか等、同一の行為を行った男女に対する評価の異なりによって、ジェンダー・ステレオタイプを計測することが求められるであろう。さらに、ジェンダー・ステレオタイプの計測の際には、「女性のハラスメントに対する苦情は、問題を解決するよりも、より多くの問題を引き起こすことにつながる」等、女性一般や男性一般に対する態度を問い、回答者が自身の生活と結びつけて考えられるような質問文になっていなかった。このような限界を踏まえ、今後の研究では、たとえば、男女の家事分担の望ましい割合について聞くなど、より参加者の生活に身近なトピックを扱うことが望ましいであろう。

第四に、次節でも言及するが、本実験で焦点を当てた人権保護の一環としての女性の保護というテーマは、女性性とも折り合いの良いものであったため、女性兵士が伝統的なジェンダー観念に反していたことが見えにくかった点が、本研究の反省点として挙げられる。女性が殺戮に従事する、母親が子どもを置いて戦地に向かう、女性が戦争捕虜となる、といった、伝統的なジェンダー観念の観点からは、受け入れがたい事象に焦点を当てて分析を行うべきであった。

今後克服していくべき手法上の課題は残るものの、本研究は、戦争とジェンダー観念をめぐる今日の課題に対し、以下の三点のインプリケーションを持つ。第一に、『美しい魂－正義の戦士』のフレームが、個人や自国の利益に焦点を当てたフレーム以上に、戦争の正当性を高めたことは、戦争が必ずしも自己利益や自集団の追求という論理で動いていないという可能性を示唆するものであろう。もちろん世論の意向がそのまま対外政策に反映されるわけではないが、先行研究を踏まえると、世論の意向は無視できるものでは決してない(Baum & Potter, 2015; Tomz, 2007)。その上で、国家の安全保障行動を見る上で、マキャベリやホップズが述べるような自己利益や自集団の利益の追求に基づいた世界観がどこまで現実を表しているのかについては、疑問を挟む余地があろう。

第二に、本研究を通して、ジェンダー国際関係論で投げかけられてきた興味深い問いに取り組むうえで、実験手法や定量手法といった、いわゆる科学的な手法が有用であることに言及できよう。本研究は、言説分析をはじめとするその他の手法の重要性を否定するものではない。だが、特定の手法を拒絶することによって、目的を同じくする他分野との交流が阻まれているのなら、その現状に勿体なさを感じざるを得ない。本研究を通して、ジェンダー国際関係論の問いに多様な手段で回答していくことの重要性を、示唆することができたであろう。

第三に、本研究は、実務の世界に対するインプリケーションをも持ちうるものであろう。今日において、ジェンダー観念は大きく変容する兆しを見せている。一方で、安全保障領域においては、伝統的な男らしさに基づいた論理が依然として正当なものとして受け容れられているかに見える。今後、社会におけるジェンダー観念がより一層の多様化を見せ、また、マイノリティという数にとどまらない女性が安全保障領域に参入していくことで、安全保障領域はどのような変化を見せていくのか。本研究で取り組んだ課題は、これらの問いに答えるための端緒となろう。

### 7.3. 今後の展望

本研究では、勇敢な男性兵士が脆弱な犠牲者の女性を救うという『美しき魂－正義の戦士』のフレームの効果を、軍事行為が女性の保護を目的としたものか否かという点、保護者である兵士と被保護者である紛争地市民の性別の組み合わせ、個人の伝統的なジェンダー・ステレオタイプに対する共感度という三点から分析した。この本研究の分析を踏まえて、研究の今後の研究の三つの方向性を述べることで、本研究を終えたい。

第一に、次のステップとして、「殺戮」「母性」「戦争捕虜」「戦争犯罪」「性的暴行」などの、戦争とジェンダー観念をめぐる、よりセンシティブなテーマを扱うことが求められよう。本研究で扱った女性の人権保護というテーマは、戦争とジェンダーをめぐる多様な事象の中でも、それほど論争を呼ばないテーマであった。戦争とは言いつつも、軍事行為の殺戮の側面は全面には出ず、戦争をめぐる情報は、あくまでも女性の保護・人権擁護を目的としており、道徳面からの疑義は挟みにくいものであった。紛争地女性の保護に対して異論を唱える人はほとんどいないであろうし、女性兵士の役割も、人権擁護という「女らしさ」と相性の良いものであった。また、たとえ女性が保護者になり、男性が被保護者となったとしても、保護者と被保護者の間に横たわる権力関係は変化せず、あくまで米国は強者で紛争地国市民は弱者であった。

だが、戦争とジェンダー観念をめぐる領域は、はるかに際どい、戦争の正当性を根本から覆す可能性を持つ事象で溢れている。命を生み出す集団に属するとされる女性が殺戮に携わった場合、また、戦争犯罪に与した場合に、戦争や軍隊の正当性はどのように変容するのか。また、他者に対する加害を行う主体が子を持つ母親であった場合に、変容の度合いは異なるのか。また、自国の女性兵が敵国の男性の戦争捕虜となり、強者である自国と弱者である紛争国という権力関係が逆転した場合に、社会は敵国や自国軍に対してどのような反応を見せるのか。伝統的な『美しき魂－正義の戦士』のフレームにおいては、戦闘から隔離された場所で、当該集団が価値を置いている純粋さや無垢さを保持することが、女性の役割として求められてきた(Elshtain, 1987)が、この伝統的なジェンダー観念を正面から打ち破る事象を対象に分析を行うことで、女性が無垢でも純粋でもないことが顕在化した時に、軍事力の正当性がどのように変容するのかを検討することができよう。

第二に、時代や地域の枠組みを超えた形で、『美しき魂－正義の戦士』のフレームの影響力を検討することが、今後の研究の幅を広げよう。ジェンダー国際関係論が述べているように、時代や地域の文脈の影響を受けるジェンダー観念は多種多様なものがあり、必ずしも均一なものではない。一方で、ジェンダー国際関係論によれば、多くの地域・社会は、男性性を軍事力の基盤に置いている。また、近年のMeToo運動に見られるように、現代のグローバリゼーションは、女性の社会進出を、地域差を超えたある一定の基準の下に推し進めている。言い換え

れば、現在のジェンダー権力関係を変容させる可能性もはらむ、伝統的なジェンダー観念と新しいジェンダー観念のせめぎ合いは、一定の共通性を持つ方向性をもって、特定地域の枠組みを超えた広い範囲で見られている。こうした中で、グローバルなレベルで、ジェンダー観念が軍事力の正当性に与える影響の有無を検討することで、軍事力と男性性の関係性は普遍的なものであるのか、それとも、特定の条件下ではその普遍性は崩れるものであるのかを、検証することの重要性が浮かび上がってこよう。

また、ジェンダー観念と軍事力の正当性の関係が、時代によりジェンダー観念が変化していくことの影響を受けるものなのかという点も、今後の研究で掘り下げる価値があるであろう。近年のジェンダー観念をめぐる変容は、たとえ同一の社会内であっても、非常に興味深いものである。一世代異なれば、特定社会で望ましいとされるジェンダー観念は変容しうる。このような中で、ジェンダー観念の変容の結果、軍事力の正当性も変容していくのかを、10年、20年単位の長期にわたるスパンで見ていく必要がある。長期間にわたって幾度も同一のサーベイを行うこと、あるいは、長期間にわたって行われた世論調査の中から、適切な質問文を見つけることには困難も伴う。だが、近年のサーベイのコストの劇的な低下や技術の向上は、長いスパンで、同一テーマをめぐるサーベイを繰り返すことを可能にしている。ジェンダー観念の変容と軍事力の正当性の関係性を長期にわたって観察することは、ジェンダー観念が急激に変化しながらも、軍事力のプレゼンスが依然として衰えない今日の世界において、学術的にも実務的にも、意義のあることであろう。

第三に、長期的な課題として、戦時のジェンダー観念を覆す事象が、国家の対外行動に実際に影響を与えたのか否かを検証する試みを挙げたい。世論・メディア・政策決定者（行政・議会）の各アクターに対し、ジェンダー観念はそれぞれどのような影響を与え、アクター間の関係性をどのように変容させたのか。そして、その結果、アクター間の権力関係や相互作用のアウトプットとしての対外政策は変容したのか。ジェンダー国際関係論が挑んできた問いに、世論研究の見地から答えることを長期的な課題としたい。

上記で挙げたように、ジェンダー国際関係論と世論研究・伝統的な世論研究のはざまには、興味深い問いが無数に存在することに言及することで、本研究を終えたい。

## 謝辞

最大の感謝を、青野利彦先生に捧げる。学部時代からの青野先生のご指導を通して、自分が惚れ込んだ研究テーマを恐れずに追究することの醍醐味を学ばせて頂いた。修士の学生だった頃、「今までの先行研究のあり方のすべてを打ち壊すような面白い研究をしてみよ」とおっしゃられていたことは、著者の大学院生活を通してずっと心に残っている。実際にそのような研究を行うには、あまりにも遠く力及ばなかったが、青野先生のそうした研究スタンスの下で研究生生活を送れたからこそ、大学院という知的自由が許された場を楽しむことができたように思う。知的にも物理的にも彷徨うことの多い未熟な学生であったが、最後まで面倒を見て頂いたことには、感謝を伝えきれない。

山田敦先生には、研究領域の論争の最先端に対する貢献を、どん欲に追い求める姿勢を学ばせて頂いた。斬新なアイデアと白熱した議論に満ちた論争の最先端を追うことはこの上ない至福であったが、この至福の消費者に甘んじずに挑戦をし続ける研究者としての責任は、山田先生を通して学ばせて頂いた。また、著者の論文執筆中は、副学長の任の中で非常にご多忙であったにもかかわらず、お洒落な紅茶と和やかなお時間とともに、論文の方向性について鋭いご指摘を頂いてきた。心からの感謝を捧げたい。

クォン・ヨンソク先生には、研究と自分自身を切り離すことなく、研究のために自分の人生を生き、自分の人生を生きるために研究を行うことを教えて頂いた。パーソナルな個人としての経験から研究上のアイデアを得、また、研究から自身の経験を考察するというサイクルは、研究生生活と人生の双方に代えがたい充足感を与えてくれたが、こうした充足感はクォン先生に頂いたものに他ならない。深い感謝を捧げたい。

前田真理子先生には、幅広い教養を備えることが、研究の幅を広げることを学ばせて頂いた。前田先生との出会いを通して、ディズニー・プリンセスの映画や戦争映画などに触れることで、アカデミアの外の世界におけるジェンダーの語りを経験してきたが、このような論文以外の素材から得る視角は、想像を超える形で研究の幅を広げてくれた。広い世界に目を向けることを促して頂いた前田先生に、心から感謝申し上げたい。

佐藤文香先生には、ジェンダーをめぐる議論を通して、他者の視点や立場を想像することの大切さを学ばせて頂いた。一見すると当たり前のことではあるが、自分が経験していない他者の経験を想像し、その想像の上で適切な言葉を選ぶことは難しく、自分がマジョリティと言われる立場の視点を当然視していたことに驚くこともあった。かけがえのないこの気づきを与えてくださった佐藤先生に、深い感謝を申し上げたい。

岸野幸枝

大林一広先生からは、複雑な概念を鋭利に切り取ることで、変数間の因果関係を明確にすることを学ばせて頂いた。自分が何を目的として何を行っているのかを理解するという、研究活動の基本を教えて頂いたことに、心からの感謝を捧げる。

また、これまでの研究生活を通して、多くの方々にご支援と研究へのコメントを頂いた。以下の方々にも、初めてお会いした時点での苗字・敬称略の形で、心からの感謝を捧げたい。阿津坂祐貴、アーラ・ウー、アンドリュー・ウッド、石井雅裕、李孝連、恵藤ちひろ、大庭万里奈、大山貴稔、岡田知子、加藤智裕、川口遼、金芽凜、辛女林、鈴木麻央、関根里奈子、サンティアゴ・ソーサ、高萩光紀、田口結子、徳安慧一、長谷川隼人、濱田・キンタナ・アツィリ・マリアナ、平井和子、藤井有希、スティーヴン・ペリー、増古剛久、マリア・アロカ、三好文、八代拓、兪炳完、横山陸、ノーラ・ワイネクをはじめとする多くの方々のお力添えなくしては、研究生活を続けることはできなかつたであろう。また、研究分野も所属団体も異なる同朋である青野桃子・今泉瑠璃に、気楽な雑談の時間と研究活動を続けるモチベーションを与えてもらったことにも心からの感謝を捧げる。

私事となるが、父・洋久と母・香代子は、いつも気の赴くままに行動してばかりの娘を自由にさせてくれた。また、妹・友子は、遊んだり小競り合ったり、気を遣わずに過ごせる相手となってくれている。今日までの家族のサポートへの感謝は欠くことができない。

最後になるが、著者は、一箇所に腰を落ち着けて一つの物事を深く追究するということが得意ではなく、興味の対象を四方八方へと広げてしまう傾向を持っていることから、アカデミアとの相性を振り返ることも多かつた。それでも大学院に居ついたのは、先人たちが築いた最高にクールな研究に魅了されたからに他ならない。惜しみない知的興奮を授けてくれた、アカデミアの先人たちへの感謝と敬意をもって、謝辞を終えたい。

岸野幸枝

## 参照資料

以下は、本サーベイ実験で Survey Monkey を通して参加者に提供した文書のうち、コンセン  
ト・フォームと最後の謝礼手続きを除いた全文である。最初のセクションの戦争をめぐる文書  
については、全7つの文書のうち、ランダムに一つの文章のみ各参加者に割り当てられた(グル  
ープ A からグループ G)。

The following questions are about U.S. relations with other countries around the world. You will read  
about a situation our country has faced many times in the past and will probably face again. I will  
describe the situation of a hypothetical country, Hayazania, and ask for your opinion on what decisions  
you would make.

### (グループ A) The Right War

News reports of oppressed women under the Hayazania government convinced international society that  
it had witnessed evil in the raw. “Our major concern over Hayazania is the dictatorship,” an international  
advocacy organization said. U.S. troops have been dispatched to Hayazania and have given their lives to  
protect the rights of women there.

Sergeant Smith is one of the fallen heroes. Before entering the armed forces, Mr. Smith, watching news  
reports of civilians in Hayazania who were suffering under the dictatorship, said to his mother, “I can’t  
watch them die.” Mr. Smith joined the army to confront evil and restore order in Hayazania.

“U.S. troops have made a great difference. Now, we can exercise control over our lives,” a Hayazanian  
woman said with tears in her eyes. The U.S. military reports that U.S. intervention is “crucial to  
maintaining regional peace.”

### (グループ B) The Right War

News reports of oppressed women under the Hayazania government convinced international society that  
it had witnessed evil in the raw. “Our major concern over Hayazania is the dictatorship,” an international  
advocacy organization said. U.S. troops have been dispatched to Hayazania and have given their lives to  
protect the rights of women there.

A recent survey suggests that many of the soldiers killed in Hayazania entered the military for career  
advancement and financial security. Indeed, the military offers a good opportunity in terms of benefits,  
job stability, and pay. Soldiers worked as professionals and helped restore order in Hayazania.

The U.S. military’s efforts are paying off handsomely and enhancing the ability of Hayazanian women to  
exercise control over their lives. The U.S. military reports that U.S. intervention is “crucial to maintaining  
regional peace.”

### (グループ C) The Right War

News reports about the Hayazania government threatening a major disruption of world oil supplies convinced international society that it is facing significant geopolitical risk. “Our major concern over Hayazania is the dictatorship,” an international think tank said. U.S. troops have been dispatched to Hayazania and have given their lives to open up access to blocked oil pipelines.

A recent survey suggests that many of the soldiers killed in Hayazania entered the military for career advancement and financial security. Indeed, the military offers a good opportunity in terms of benefits, job stability, and pay. Soldiers worked as professionals and helped restore order in Hayazania.

The U.S. military's efforts are paying off handsomely and helping international society exercise control over the region. The U.S. military reports that U.S. intervention is “crucial to maintaining regional peace.”

(グループ D) The Right War

The government Hayazania has been involved in widespread human rights abuses against its own people. To help safeguard fundamental human rights, U.S. soldiers have been dispatched to Hayazania.

U.S. troops have given their lives to protect the rights of women in Hayazania. Sergeant Robert Smith is one of the fallen heroes. Before entering the armed forces, Mr. Smith, watching news reports of women in Hayazania suffering under the dictatorship, said to his mother, “I can’t watch them die.” In 2018, he joined the army to confront evil and restore order in Hayazania.

The U.S. military's efforts in Hayazania are paying off handsomely. Bibi Hussaini, a 35-year old Hayazanian woman, said with tears in her eyes, “U.S. troops have made a great difference. Now, we can exercise control over our lives.” The U.S. military reports that U.S. intervention is “crucial to maintaining regional stability.”

(グループ E) The Right War

The government Hayazania has been involved in widespread human rights abuses against its own people. To help safeguard fundamental human rights, U.S. soldiers have been dispatched to Hayazania.

U.S. troops have given their lives to protect the rights of women in Hayazania. Sergeant Rachel Smith is one of the fallen heroes. Before entering the armed forces, Ms. Smith, watching news reports of women in Hayazania suffering under the dictatorship, said to her mother, “I can’t watch them die.” In 2018, she joined the army to confront evil and restore order in Hayazania.

The U.S. military's efforts in Hayazania are paying off handsomely. Bibi Hussaini, a 35-year old Hayazanian woman, said with tears in her eyes, “U.S. troops have made a great difference. Now, we can exercise control over our lives.” The U.S. military reports that U.S. intervention is “crucial to maintaining regional stability.”

(グループ F) The Right War

The government Hayazania has been involved in widespread human rights abuses against its own people. To help safeguard fundamental human rights, U.S. soldiers have been dispatched to Hayazania.

岸野幸枝

U.S. troops have given their lives to protect the rights of civilians in Hayazania. Sergeant Robert Smith is one of the fallen heroes. Before entering the armed forces, Mr. Smith, watching news reports of civilians in Hayazania suffering under the dictatorship, said to his mother, “I can’t watch them die.” In 2018, he joined the army to confront evil and restore order in Hayazania.

The U.S. military's efforts in Hayazania are paying off handsomely. Muhammad Hussaini, a 35-year old Hayazanian man, said with tears in his eyes, “U.S. troops have made a great difference. Now, we can exercise control over our lives.” The U.S. military reports that U.S. intervention is “crucial to maintaining regional stability.”

(グループ G) The Right War

The government Hayazania has been involved in widespread human rights abuses against its own people. To help safeguard fundamental human rights, U.S. soldiers have been dispatched to Hayazania.

U.S. troops have given their lives to protect the rights of civilians in Hayazania. Sergeant Rachel Smith is one of the fallen heroes. Before entering the armed forces, Ms. Smith, watching news reports of civilians in Hayazania suffering under the dictatorship, said to her mother, “I can’t watch them die.” In 2018, she joined the army to confront evil and restore order in Hayazania.

The U.S. military's efforts in Hayazania are paying off handsomely. Muhammad Hussaini, a 35-year old Hayazanian man, said with tears in his eyes, “U.S. troops have made a great difference. Now, we can exercise control over our lives” The U.S. military reports that U.S. intervention is “crucial to maintaining regional stability.”

2. Some people don’t pay much attention to foreign affairs such as war. How about you? What would you say is your level of interest in war?

Extremely interested  
Very interested  
Somewhat interested  
Not so interested  
Not at all interested

3. I’d like to get your feelings toward Hayazania and the United States. I’ll read the name of a government, and I’d like you to rate them from {1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10}. Rating from 6 to 10 means that you feel favorable and warm toward the government. Ratings between 1 and 5 mean that you don’t feel favorable toward the government and that you don’t care too much for that government.

1 (don’t feel favorable) 2 3 4 5 6 7 8 9 10 (feel favorable)

4. How well is the U.S. military campaign in Hayazania going?\*

Very well  
Well  
Neutral  
Bad

岸野幸枝

Very bad

5. Do you think the decision to dispatch the military to Hayazania was the right thing?\*

Right

Somewhat right

Depends/Neutral

Somewhat wrong

Wrong

6. Would you favor or oppose sending U.S. ground troops to Hayazania?\*

Favor strongly

Favor not strongly

Neither/Both

Oppose not strongly

Oppose strongly

7. What do you think today about how many casualties will eventually result from this military operation in Hayazania?

0-500

501-1000

1001-2000

2001-3000

3001-4000

4001-5000

5001+

8. What is your gender?\*

Male

Female

Other

9. What racial or ethnic group best describes you? \*

White or Caucasian

Black or African American

Hispanic or Latino

Asian or Asian American

American Indian or Alaska Native

Native Hawaiian or other Pacific Islander

Another race

10. To which age category do you belong?\*

18-24

岸野幸枝

25-34

35-44

45-54

55-64

65+

11. What is the highest level of education you have completed?\*

Less than high school

High school

Some college

Bachelor's degree or higher

12. When it comes to politics, would you describe yourself as liberal, conservative, or neither liberal nor conservative?

Extremely liberal

Moderately liberal

Slightly liberal

Neither liberal nor conservative

Slightly conservative

Moderately conservative

Extremely conservative

13. Generally speaking, do you usually think of yourself as a Republican, a Democrat, an Independent, or something else?

Strongly Republican

Leans Republican

Undecided/Independent

Leans Democrat

Strongly Democrat

Please answer the following two questions to the best of your ability. Many people have trouble with these kinds of questions, so you shouldn't worry if you do not know the answers.

14. Which party had most members of Congress before the 2018 election?\*

Republican

Democrat

15. Which party had most members of Congress after the 2018 election?\*

Republican

Democrat

Now we're interested in your views on a number of different issues. There are no right or wrong answers; please read the questions carefully and choose the responses that best describe your views.

16. Suppose you were given the choice between two different offers:

A. A payment of \$100 now B. A payment of \$X one year from now

岸野幸枝

How much would X have to be to make you want to choose option B over option A?

17. Now, suppose you were given the choice between two different offers:

A. A payment of \$100 now B. A payment of \$X 10 years from now

How much would X have to be to make you want to choose option B over option A?

How much would you be willing to pay for a lottery ticket for each of the following lotteries?

18. A lottery with a 60% chance to win \$100, otherwise nothing

19. A lottery with a 60% chance to win \$400, otherwise nothing

Recently, there has been a lot of talk about women's rights. Some people feel that a woman's place is in the home. (Suppose these people are at the other end, at point 1.) Others feel that women should have an equal role with men in running business, industry, and government. (Suppose these people are at one end of a continuum or scale, at point 7.) And, of course, other people have opinions that fall somewhere in between, at points 2, 3, 4, 5 or 6. Where would you place yourself on this scale?

20. "When women demand equality these days, they are actually seeking special favors."\*

21. "Women often miss out on good jobs because of discrimination."

22. "Women who complain about harassment cause more problems than they solve."

23. "A working mother can establish just as warm and secure a relationship with her children as a mother who does not work."

24. "It is much better for everyone involved if the man is the achiever outside the home, and the woman takes care of the home and family."

Now I have some questions about different groups in our society. I'm going to show you a seven-point scale on which the characteristics of the people in a group can be rated. In the first statement a score of 1 means that you think almost all of the people in that group tend to be "lazy." A score of 7 means that you think most people in the group are "hard-working." A score of 4 means that you think that most people in the group are not closer to one end or the other, and of course, you may choose any number in between.

25. Where would you rate Whites/Blacks/Hispanic-Americans in general on this scale?

1 (Lazy) 2 3 4 5 6 7 (Hardworking)

26. Where would you rate Whites/Blacks/Hispanic-Americans in general on this scale?\*

1 (Untrustworthy) 2 3 4 5 6 7 (Trustworthy)

27. What country dispatched its troops in the vignette at the beginning of this survey?\*

Russia

岸野幸枝

United States  
China  
Other

28. What was the gender of the U.S. soldier(s) in the vignette at the beginning of this survey?\*

Male  
Female  
Not mentioned

29. What was the gender of the Hayazanian victim(s) in the vignette at the beginning of this survey?\*

Male  
Female  
Not mentioned

参照文献

- AAhäll, L. (2012). Motherhood, myth and gendered agency in political violence. *International Feminist Journal of Politics*, 14(1), 103–120.
- Aday, S. (2010). Leading the Charge: Media, Elites, and the Use of Emotion in Stimulating Rally Effects in Wartime. *Journal of Communication*, 60(3), 440–465. <https://doi.org/10.1111/j.1460-2466.2010.01489.x>
- Baum, M. A. (2002). Sex, lies, and war: How soft news brings foreign policy to the inattentive public. *American Political Science Review*, 96(01), 91–109.
- Baum, M. A. (2003). Soft news and political knowledge: Evidence of absence or absence of evidence? *Political Communication*, 20(2), 173–190.
- Baum, M. A. (2004). How public opinion constrains the use of force: The case of Operation Restore Hope. *Presidential Studies Quarterly*, 34(2), 187–226.
- Baum, M. A. (2005). *Soft news goes to war: Public opinion and American foreign policy in the new media age*. Retrieved from [https://books.google.com/books?hl=en&lr=&id=g33bpvzQ3pUC&oi=fnd&pg=PP2&dq=matthew+baum&ots=6yxtl2\\_OCH&sig=g2If6kpKq7AOGxbmNKFwBRNpZSs](https://books.google.com/books?hl=en&lr=&id=g33bpvzQ3pUC&oi=fnd&pg=PP2&dq=matthew+baum&ots=6yxtl2_OCH&sig=g2If6kpKq7AOGxbmNKFwBRNpZSs)
- Baum, M. A. (2007). Soft news and foreign policy: How expanding the audience changes the policies. *Japanese Journal of Political Science*, 8(1), 115–145.
- Baum, M. A., & Groeling, T. (2009a). Shot by the Messenger: Partisan Cues and Public Opinion regarding National Security and War. *Political Behavior*, 31(2), 157–186.
- Baum, M. A., & Groeling, T. J. (2009b). *War Stories: The Causes and Consequences of Public Views of War*. Princeton University Press.

Baum, M. A., & Jamison, A. S. (2006). The Oprah Effect: How Soft News Helps Inattentive Citizens Vote Consistently. *The Journal of Politics*, 68(4), 946–959. <https://doi.org/10.1111/j.1468-2508.2006.00482.x>

Baum, M. A., & Potter, P. B. (2008). The relationships between mass media, public opinion, and foreign policy: Toward a theoretical synthesis. *Annu. Rev. Polit. Sci.*, 11, 39–65.

Baum, M. A., & Potter, P. B. (2015). *War and democratic constraint: How the public influences foreign policy*. Princeton University Press.

Benford, R. D., & Snow, D. A. (2000). Framing processes and social movements: An overview and assessment. *Annual Review of Sociology*, 26(1), 611–639.

Bennett, S. E., & Flickinger, R. S. (2009a). Americans' Knowledge of U.S. Military Deaths in Iraq, April 2004 to April 2008. *Armed Forces & Society*, 35(3), 587–604.  
<https://doi.org/10.1177/0095327X08324764>

Bennett, S. E., & Flickinger, R. S. (2009b). Americans' Knowledge of U.S. Military Deaths in Iraq, April 2004 to April 2008 , Americans' Knowledge of U.S. Military Deaths in Iraq, April 2004 to April 2008. *Armed Forces & Society*, 35(3), 587–604. <https://doi.org/10.1177/0095327X08324764>

Berinsky, A. J. (2007). Assuming the Costs of War: Events, Elites, and American Public Support for Military Conflict. *The Journal of Politics*, 69(4), 975–997. <https://doi.org/10.1111/j.1468-2508.2007.00602.x>

Berinsky, A. J. (2009). *In time of war: Understanding American public opinion from World War II to Iraq*.

Retrieved from

<https://books.google.com/books?hl=en&lr=&id=jdYPG8i5ZoMC&oi=fnd&pg=PR7&dq=americans+on+iraq+three+years+on&ots=mPFvBbIdL5&sig=h3edEEqx37taD0p7R2KXYwjiTE>

- Berinsky, A. J., & Kinder, D. R. (2006). Making Sense of Issues Through Media Frames: Understanding the Kosovo Crisis. *The Journal of Politics*, 68(3), 640–656. <https://doi.org/10.1111/j.1468-2508.2006.00451.x>
- Blanchard, E. M. (2003). Gender, International Relations, and the Development of Feminist Security Theory. *Signs*, 28(4), 1289–1312. <https://doi.org/10.1086/368328>
- Boas, T. C., Christenson, D. P., & Glick, D. M. (2018). Recruiting large online samples in the United States and India: Facebook, Mechanical Turk, and Qualtrics. *Political Science Research and Methods*, 1–19. <https://doi.org/10.1017/psrm.2018.28>
- Boettcher, W. A., & Cobb, M. D. (2006). Echoes of Vietnam? Casualty Framing and Public Perceptions of Success and Failure in Iraq. *The Journal of Conflict Resolution*, 50(6), 831–854.
- Boettcher, W. A., & Cobb, M. D. (2009). “Don’t Let Them Die in Vain”: Casualty Frames and Public Tolerance for Escalating Commitment in Iraq. *The Journal of Conflict Resolution*, 53(5), 677–697.
- Brewer, P., Aday, S., & Gross, K. (2003). Rallies all around: The dynamics of system support. *Framing Terrorism: The News Media, the Government, and the Public*, 229–54.
- Brooks, D. J., & Valentino, B. A. (2011). A War of One’s Own: Understanding the Gender Gap in Support for War. *Public Opinion Quarterly*, 75(2), 270–286. <https://doi.org/10.1093/poq/nfr005>
- Brown, M. T. (2012). “A Woman in the Army Is Still a Woman”: Representations of Women in US Military Recruiting Advertisements for the All-Volunteer Force. *Journal of Women, Politics & Policy*, 33(2), 151–175.
- Brown, S. E. (2014). Female perpetrators of the Rwandan genocide. *International Feminist Journal of Politics*, 16(3), 448–469.
- Buhrmester, M., Kwang, T., & Gosling, S. D. (2011). Amazon’s Mechanical Turk: A New Source of Inexpensive, Yet High-Quality, Data? *Perspectives on Psychological Science*, 6(1), 3–5.
- Butler, M. (2012). *Selling a’just’war: Framing, Legitimacy, and Us Military Intervention*. Springer.

- Cappella, J. N., & Jamieson, K. H. (1996). News frames, political cynicism, and media cynicism. *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, 546(1), 71–84.
- Caprioli, M. (2005). Primed for Violence: The Role of Gender Inequality in Predicting Internal Conflict. *International Studies Quarterly*, 49(2), 161–178.
- Caprioli, Mary. (2004). Feminist IR Theory and Quantitative Methodology: A Critical Analysis. *International Studies Review*, 6(2), 253–269.
- Carpenter, R. C. (2003). “Women and Children First”: Gender, Norms, and Humanitarian Evacuation in the Balkans 1991–95. *International Organization*, 57(4), 661–694.
- Carpenter, R. C. (2016). *“Innocent Women and Children”: Gender, Norms and the Protection of Civilians*. Routledge.
- Carreiras, H. (2015). *Gender and Civil-Military Relations in Advanced Democracies*. 18.
- Chong, D., & Druckman, J. N. (2007a). Framing theory. *Annu. Rev. Polit. Sci.*, 10, 103–126.
- Chong, D., & Druckman, J. N. (2007b). Framing Theory. *Annual Review of Political Science*, 10(1), 103–126. <https://doi.org/10.1146/annurev.polisci.10.072805.103054>
- Chong, D., & Druckman, J. N. (2011). Public–Elite Interactions. *The Oxford Handbook of American Public Opinion and the Media*. <https://doi.org/10.1093/oxfordhb/9780199545636.003.0011>
- Cloud, D. (2004). “To veil the threat of terror”: Afghan women and the *clash of civilizations* in the imagery of the U.S. war on terrorism. <https://doi.org/10.1080/0033563042000270726>
- Cockburn, C. (2000). The Anti-Essentialist Choice: Nationalism and Feminism in the Interaction between Two Women’s Projects. *Nations and Nationalism*, 6(4), 611–629. <https://doi.org/10.1111/j.1354-5078.2000.00611.x>
- De Vreese, C., & Boomgaarden, H. (2003). Valenced news frames and public support for the EU. *Communications*, 28(4), 361–381.

岸野幸枝

De Vreese, C. H. (2004). The effects of frames in political television news on issue interpretation and frame salience. *Journalism & Mass Communication Quarterly*, 81(1), 36–52.

Dillman, D. A., Smyth, J. D., & Christian, L. M. (2014). *Internet, Phone, Mail, and Mixed-Mode Surveys: The Tailored Design Method* (4 edition). Hoboken: Wiley.

Dimitrova, D. V. (2006). Episodic frames dominate early coverage of Iraq War in the NYTimes. com. *Newspaper Research Journal*, 27(4), 79–83.

Dowler, L. (2002). Women on the frontlines: Rethinking war narratives post 9/11. *GeoJournal*, 58(2/3), 159–165.

Druckman, J. N. (2001a). On the limits of framing effects: Who can frame? *Journal of Politics*, 63(4), 1041–1066.

Druckman, J. N. (2001b). The implications of framing effects for citizen competence. *Political Behavior*, 23(3), 225–256.

Druckman, J. N. (2001c). Using credible advice to overcome framing effects. *Journal of Law, Economics, and Organization*, 17(1), 62–82.

Eager, P. W. (2016). *Waging Gendered Wars: U.S. Military Women in Afghanistan and Iraq*. Routledge.

Eckles, D. L., & Schaffner, B. F. (2011). Risk tolerance and support for potential military interventions. *Public Opinion Quarterly*, 75(3), 533–544.

Elshstain, J. B. (1987). *Women and War*. University of Chicago Press.

Enloe, C. (1993). *The Morning After: Sexual Politics at the End of the Cold War*. University of California Press.

Enloe, C. (2000). *Maneuvers: The International Politics of Militarizing Women's Lives*. University of California Press.

Enloe, C. (2016). *Globalization and Militarism: Feminists Make the Link*. Rowman & Littlefield.

Enloe, C. H. (2007). *Globalization and Militarism: Feminists Make the Link*. Rowman & Littlefield.

岸野幸枝

Entman, R. M. (1993). Framing: Toward clarification of a fractured paradigm. *Journal of Communication*, 43(4), 51–58.

Entman, R. M. (2009). *Projections of Power: Framing News, Public Opinion, and U.S. Foreign Policy*. University of Chicago Press.

Foyle, D. C. (2006). LEADING THE PUBLIC TO WAR? THE INFLUENCE OF AMERICAN PUBLIC OPINION ON THE BUSH ADMINISTRATION'S DECISION TO GO TO WAR IN IRAQ. *International Journal of Public Opinion Research*, 26.

Gamson, W. A. (1992). *Talking politics*. Cambridge university press.

Gartner, Scott S. (2011). On Behalf of a Grateful Nation: Conventionalized Images of Loss and Individual Opinion Change in War. *International Studies Quarterly*, 55(2), 545–561.  
<https://doi.org/10.1111/j.1468-2478.2011.00655.x>

Gartner, Scott Sigmund. (2008a). Secondary Casualty Information: Casualty Uncertainty, Female Casualties, and Wartime Support. *Conflict Management and Peace Science*, 25(2), 98–111.  
<https://doi.org/10.1080/07388940802007215>

Gartner, Scott Sigmund. (2008b). The Multiple Effects of Casualties on Public Support for War: An Experimental Approach. *The American Political Science Review*, 102(1), 95–106.

Gartner, Scott Sigmund. (2008c). Ties to the Dead: Connections to Iraq War and 9/11 Casualties and Disapproval of the President. *American Sociological Review*, 73(4), 690–695.

Gartner, Scott Sigmund, & Segura, G. M. (1998). War, Casualties, and Public Opinion. *The Journal of Conflict Resolution*, 42(3), 278–300.

Gartner, Scott Sigmund, Segura, G. M., & Wilkening, M. (1997). All Politics Are Local: Local Losses and Individual Attitudes toward the Vietnam War. *The Journal of Conflict Resolution*, 41(5), 669–694.

Gelpi, C. (2010). Performing on Cue? The Formation of Public Opinion Toward War. *The Journal of Conflict Resolution*, 54(1), 88–116.

Gelpi, C., Feaver, P. D., & Reifler, J. (2006). *Success matters: Casualty sensitivity and the war in Iraq*.

Retrieved from <http://www.mitpressjournals.org/doi/abs/10.1162/isec.2005.30.3.7>

Gelpi, C., Feaver, P. D., & Reifler, J. (2009). *Paying the Human Costs of War: American Public Opinion and Casualties in Military Conflicts*. Princeton University Press.

Gelpi, C., & Reifler, J. (2008). Review: Reply to Berinsky and Druckman: Success Still Matters. *The Public Opinion Quarterly*, 72(1), 125–133.

Gelpi, C., Reifler, J., & Feaver, P. (2007). Iraq the Vote: Retrospective and Prospective Foreign Policy Judgments on Candidate Choice and Casualty Tolerance. *Political Behavior*, 29(2), 151–174.

Gelpi, C., Roselle, L., & Barnett, B. (2013). Polarizing Patriots: Divergent Responses to Patriotic Imagery in News Coverage of Terrorism. *American Behavioral Scientist*, 57(1), 8–45.

<https://doi.org/10.1177/0002764212463358>

Gilens, M. (2009). *Why Americans hate welfare: Race, media, and the politics of antipoverty policy*. University of Chicago Press.

Gitlin, T. (2003). *The whole world is watching: Mass media in the making and unmaking of the new left*. Univ of California Press.

Goffman, E. (1974). *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. Harvard University Press.

Goldstein, J. S. (2003). *War and gender*. Retrieved from [http://link.springer.com/10.1007/0-387-29907-6\\_11](http://link.springer.com/10.1007/0-387-29907-6_11)

Gonzalez-Perez, M. (2011). The False Islamization of Female Suicide Bombers. *Gender Issues*, 28(1/2), 50–65. <https://doi.org/10.1007/s12147-011-9097-0>

Grant, J. T., & Rudolph, T. J. (2003). Value conflict, group affect, and the issue of campaign finance. *American Journal of Political Science*, 47(3), 453–469.

- Groeling, T., & Baum, M. A. (2008). Crossing the water's edge: Elite rhetoric, media coverage, and the rally-round-the-flag phenomenon. *The Journal of Politics*, 70(4), 1065–1085.
- Guardino, M., & Hayes, D. (2017). Foreign Voices, Party Cues, and U.S. Public Opinion about Military Action. *International Journal of Public Opinion Research*. <https://doi.org/10.1093/ijpor/edx009>
- H. De Vreese, C. (2001). Framing politics at the launch of the Euro: A cross-national comparative study of frames in the news. *Political Communication*, 18(2), 107–122.
- Haider-Markel, D. P., & Joslyn, M. R. (2001). Gun policy, opinion, tragedy, and blame attribution: The conditional influence of issue frames. *Journal of Politics*, 63(2), 520–543.
- Haring, E. L. (2013). What Women Bring to the Fight. *Army War College*, 2(43), 27–32.
- Harp, D., Loke, J., & Bachmann, I. (2011). More of the Same Old Story? Women, War, and News in Time Magazine. *Women's Studies in Communication*, 34(2), 202–217.  
<https://doi.org/10.1080/07491409.2011.619470>
- Hayes, A. F., & Myers, T. A. (2009). Testing the “Proximate Casualties Hypothesis”: Local Troop Loss, Attention to News, and Support for Military Intervention. *Mass Communication & Society*, 12(4), 379–402. <https://doi.org/10.1080/15205430802484956>
- Hayes, D., & Guardino, M. (2011). The Influence of Foreign Voices on U.S. Public Opinion. *American Journal of Political Science*, 55(4), 831–851.
- Hegel, G. W. F. (1998). *Phenomenology of Spirit*. Motilal Banarsidass Publ.
- Herrmann, R. K., Tetlock, P. E., & Visser, P. S. (1999). Mass Public Decisions to Go to War: A Cognitive-Interactionist Framework. *The American Political Science Review*, 93(3), 553–573.  
<https://doi.org/10.2307/2585574>
- Hetherington, M. J., & Suhay, E. (2011). Authoritarianism, Threat, and Americans' Support for the War on Terror. *American Journal of Political Science*, 55(3), 546–560.

Hoganson, K. L. (1998a). *Fighting for American Manhood: How Gender Politics Provoked the Spanish-American and Philippine-American Wars*. Yale University Press.

Hoganson, K. L. (1998b). *Fighting for American Manhood: How Gender Politics Provoked the Spanish-American and Philippine-American Wars*. Yale University Press.

Holsti, O. R. (1992a). Public Opinion and Foreign Policy: Challenges to the Almond-Lippmann Consensus Mershon Series: Research Programs and Debates. *International Studies Quarterly*, 36(4), 439–466. <https://doi.org/10.2307/2600734>

Holsti, O. R. (1992b). Public Opinion and Foreign Policy: Challenges to the Almond-Lippmann Consensus Mershon Series: Research Programs and Debates. *International Studies Quarterly*, 36(4), 439–466. <https://doi.org/10.2307/2600734>

Huddy, L., Feldman, S., Taber, C., & Lahav, G. (2005). Threat, anxiety, and support of antiterrorism policies. *American Journal of Political Science*, 49(3), 593–608.

Hunt, K. (2010). The 'war on terrorism.' In *Gender Matters in Global Politics: A Feminist Introduction to International Relations* (pp. 116–126).

Iyengar, S. (1994). *Is anyone responsible?: How television frames political issues*. University of Chicago Press.

Iyengar, S., & Simon, A. (1993). News Coverage of the Gulf Crisis and Public Opinion: A Study of Agenda-Setting, Priming, and Framing. *Communication Research*, 20(3), 365–383. <https://doi.org/10.1177/009365093020003002>

Jacinto, L., & ABC.com. (2006, January 6). The Cost of Women in Combat. Retrieved July 30, 2018, from ABC News website: <https://abcnews.go.com/International/story?id=79646&page=1>

Jentleson, B. W. (1992). The Pretty Prudent Public: Post Post-Vietnam American Opinion on the Use of Military Force. *International Studies Quarterly*, 36(1), 49–73. <https://doi.org/10.2307/2600916>

Jentleson, B. W., & Britton, R. L. (1998). Still Pretty Prudent: Post-Cold War American Public Opinion on the Use of Military Force. *The Journal of Conflict Resolution*, 42(4), 395–417.

Johns, R., & Davies, G. A. M. (2017). Civilian Casualties and Public Support for Military Action: Experimental Evidence. *Journal of Conflict Resolution*, 0022002717729733.  
<https://doi.org/10.1177/0022002717729733>

Johnson, Z. (2015, April 22). Everyone chooses the answer to the left: Scale order. Retrieved June 4, 2019, from QuestionPro website: <https://www.questionpro.com/blog/everyone-chooses-the-answer-to-the-left-scale-order/>

Kam, C. D., & Kinder, D. R. (2007). Terror and Ethnocentrism: Foundations of American Support for the War on Terrorism. *The Journal of Politics*, 69(2), 320–338. <https://doi.org/10.1111/j.1468-2508.2007.00534.x>

Kaufman, J. P. (2016). Women and children, war and peace: Political agency in time of conflict. *International Affairs*, 92(6), 1499–1504. <https://doi.org/10.1111/1468-2346.12756>

Kertzer, J. D. (2016). *Resolve in International Politics*. Princeton University Press.

Kertzer, J. D., & Zeitzoff, T. (2017). A Bottom-Up Theory of Public Opinion about Foreign Policy. *American Journal of Political Science*, 61(3), 543–558. <https://doi.org/10.1111/ajps.12314>

Kinder, D. R., & Kam, C. D. (2010). *Us Against Them: Ethnocentric Foundations of American Opinion*. Retrieved from [http://books.google.com/books/about/Us\\_Against\\_Them.html?id=\\_k41AsvwmMgC](http://books.google.com/books/about/Us_Against_Them.html?id=_k41AsvwmMgC)

Kinder, D. R., & Nelson, T. E. (2005). Democratic Debate and Real Opinions. In *Framing American Politics* (pp. 103–122). University of Pittsburgh Press.

Kinder, D. R., & Sanders, L. M. (1996). *Divided by Color: Racial Politics and Democratic Ideals*. University of Chicago Press.

岸野幸枝

King, A. (2016). The female combat soldier. *European Journal of International Relations*, 22(1), 122–143.

<https://doi.org/10.1177/1354066115581909>

King, A. C. (2015). Women Warriors: Female Accession to Ground Combat. *Armed Forces & Society*,

41(2), 379–387. <https://doi.org/10.1177/0095327X14532913>

Kosicki, G. M., & Pan, Z. (2001). Framing as a strategic action in public deliberation. In *Framing Public*

*Life: Perspectives on Media and Our Understanding of the Social World* (pp. 51–82). Routledge.

Kriner, D. L., & Shen, F. X. (2012). How Citizens Respond to Combat Casualties. *Public Opinion Quarterly*,

76(4), 761–770. <https://doi.org/10.1093/poq/nfs048>

Kriner, D. L., & Shen, F. X. (2014). Reassessing American Casualty Sensitivity: The Mediating Influence of

Inequality. *Journal of Conflict Resolution*, 58(7), 1174–1201.

<https://doi.org/10.1177/0022002713492638>

Larson, E. V. (1996). *Casualties and consensus: The historical role of casualties in domestic support for US military operations*. Retrieved from

<https://books.google.com/books?hl=en&lr=&id=aY8NdBJQolkC&oi=fnd&pg=PR3&dq=casualties+and+consensus+the+historical+role+of+casualties&ots=JARPTIJuq6&sig=On3BU8KhclSMdtsw3DM-GBhljkw>

Lau, R. R., & Schlesinger, M. (2005). Policy frames, metaphorical reasoning, and support for public policies. *Political Psychology*, 26(1), 77–114.

Lemmon, G. T. (2015). *Ashley's War: The Untold Story of a Team of Women Soldiers on the Special Ops Battlefield*. HarperCollins.

Lippmann, W. (1922). *Public Opinion*. Harcourt, Brace.

Litman, L., Robinson, J., & Abberbock, T. (2017). TurkPrime.com: A versatile crowdsourcing data

acquisition platform for the behavioral sciences. *Behavior Research Methods*, 49(2), 433–442.

<https://doi.org/10.3758/s13428-016-0727-z>

岸野幸枝

- McDermott, M. L. (2016). *Masculinity, Femininity, and American Political Behavior*. Oxford University Press.
- Medrano, J. D. (2010). *Framing Europe: Attitudes to European Integration in Germany, Spain, and the United Kingdom*. Princeton University Press.
- Merskin, D. (2004). The Construction of Arabs as Enemies: Post-September 11 Discourse of George W. Bush. *Mass Communication & Society*, 7(2), 157–175.
- Miller, R. A. (2016). Audience Costs, News Media, and Foreign Policy. *Oxford Research Encyclopedia of Politics*. <https://doi.org/10.1093/acrefore/9780190228637.013.59>
- Morton, R. B., & Williams, K. C. (2010). *Experimental Political Science and the Study of Causality: From Nature to the Lab*. Cambridge University Press.
- Moss, M. (2005). Hard Look at Mission That Ended in Inferno for 3 Women. *New York Times*, p. A1.
- Mueller, J. (2011). Public Opinion, the Media, and War. *The Oxford Handbook of American Public Opinion and the Media*. <https://doi.org/10.1093/oxfordhb/9780199545636.003.0041>
- Mueller, J. E. (1973). *War, Presidents, and Public Opinion*. John Wiley & Sons Inc.
- Mutz, D. (2011). *Population-Based Survey Experiments*. Retrieved from <http://press.princeton.edu/titles/9620.html>
- Mutz, D. C., & Pemantle, R. (2015). Standards for Experimental Research: Encouraging a Better Understanding of Experimental Methods. *Journal of Experimental Political Science*, 2(2), 192–215. <https://doi.org/10.1017/XPS.2015.4>
- Myers, T. A., & Hayes, A. F. (2010). Reframing the Casualties Hypothesis: (Mis)Perceptions of Troop Loss and Public Opinion about War. *International Journal of Public Opinion Research*, 22(2), 256–275. <https://doi.org/10.1093/ijpor/edp044>
- Nacos, B. L. (2005). The portrayal of female terrorists in the media: Similar framing patterns in the news coverage of women in politics and in terrorism. *Studies in Conflict & Terrorism*, 28(5), 435–451.

- Nacos, B. L., & Torres-Reyna, O. (2004). Framing Muslim-Americans before and after 9/11. In *Framing terrorism: The news media, the government, and the public* (pp. 134–157). Routledge.
- Näher, A.-F., & Krumpal, I. (2012). Asking sensitive questions: The impact of forgiving wording and question context on social desirability bias. *Quality & Quantity*, 46(5), 1601–1616.  
<https://doi.org/10.1007/s11135-011-9469-2>
- Nantais, C., & Lee, M. F. (1999a). Women in the United States Military: Protectors or protected? The case of prisoner of war... *Journal of Gender Studies*, 8(2), 181.
- Nantais, C., & Lee, M. F. (1999b). Women in the United States military: Protectors or protected? The case of prisoner of war Melissa Rathbun-Nealy. *Journal of Gender Studies; Abingdon*, 8(2), 181–191.
- Nelson, T. E. (2004). Policy goals, public rhetoric, and political attitudes. *The Journal of Politics*, 66(2), 581–605.
- Nelson, T. E. (2011). Issue Framing. In *The Oxford Handbook of American Public Opinion and the Media*. Retrieved from  
<http://www.oxfordhandbooks.com/view/10.1093/oxfordhb/9780199545636.001.0001/oxfordhb-9780199545636-e-12>
- Nelson, T. E., Oxley, Z. M., & Clawson, R. A. (1997). Toward a Psychology of Framing Effects. *Political Behavior*, 19(3), 221–246.
- Neuman, W. R., Just, M. R., & Crigler, A. N. (1992). *Common Knowledge: News and the Construction of Political Meaning*. University of Chicago Press.
- Norris, P., Kern, M., & Just, M. R. (2003). *Framing terrorism: The news media, the government, and the public*. Psychology Press.

- Oneal, J. R., Lian, B., & Joyner, J. H. (1996). Are the American People “Pretty Prudent”? Public Responses to U.S. Uses of Force, 1950–1988. *International Studies Quarterly*, 40(2), 261–279.  
<https://doi.org/10.2307/2600959>
- O’Rourke, L. A. (2009). What’s Special about Female Suicide Terrorism? *Security Studies*, 18(4), 681–718.  
<https://doi.org/10.1080/09636410903369084>
- Paolacci, G., Chandler, J., & Ipeirotis, P. G. (2010). Running experiments on amazon mechanical turk. *Judgment and Decision Making*, 5(5), 411–419.
- Perla, H. (2011). Explaining Public Support for the Use of Military Force: The Impact of Reference Point Framing and Prospective Decision Making. *International Organization*, 65(1), 139–167.
- Pettman, J. J. (1996a). *Worlding women. A Feminist International Politics. St Leonards: Allen&Unwin.*  
Retrieved from <http://www.victoria.ac.nz/atp/articles/ArticlesWord/pettmanj-1995.doc>
- Pettman, J. J. (1996b). *Worlding Women: A Feminist International Politics.* Psychology Press.
- Powell, K. A. (2011). Framing Islam: An analysis of US media coverage of terrorism since 9/11. *Communication Studies*, 62(1), 90–112.
- Quenqua, D. (2008). Sending In the Marines (to Recruit Women). *New York Times*, p. C1.
- Rathbun, B. C., Kertzer, J. D., Reifler, J., Goren, P., & Scotto, T. J. (2016). Taking Foreign Policy Personally: Personal Values and Foreign Policy Attitudes. *International Studies Quarterly*, 60(1), 124–137.  
<https://doi.org/10.1093/isq/sqv012>
- Reese, S. D., Gandy Jr, O. H., & Grant, A. E. (2001). Prologue—Framing public life: A bridging model for media research. In *Framing Public Life: Perspectives on Media and Our Understanding of the Social World* (pp. 23–48). Routledge.
- Rich, F. (2003). Pfc. Jessica Lynch Isn’t Rambo Anymore. *New York Times*, p. AR1.

Rosenberg, M., & Philipps, D. (2015, December 3). All Combat Roles Now Open to Women, Defense Secretary Says. *The New York Times*. Retrieved from

<https://www.nytimes.com/2015/12/04/us/politics/combat-military-women-ash-carter.html>

Sasson-Levy, O. (2003). Feminism and Military Gender Practices: Israeli Women Soldiers in “Masculine” Roles. *Sociological Inquiry*, 73(3), 440–465. <https://doi.org/10.1111/1475-682X.00064>

佐藤文香『軍事組織とジェンダー: 自衛隊の女性たち』慶應義塾大学出版会、2004年。

Schaefer, T. M. (2003). Framing the US embassy bombings and September 11 attacks in African and US newspapers. In *Framing terrorism: The news media, the government, and the public* (pp. 93–112). Routledge.

Scheufele, B. (2004). Framing-effects approach: A theoretical and methodological critique. *Communications*, 29(4), 401–428.

Scheufele, D. A. (1999). Framing as a theory of media effects. *Journal of Communication*, 49(1), 103–122.

Schneider, S. K., & Jacoby, W. G. (2005). Elite discourse and American public opinion: The case of welfare spending. *Political Research Quarterly*, 58(3), 367–379.

Schnell, F., & Callaghan, K. (2005). Terrorism, Media Frames, and Framing Effects: A Macro- and Microlevel Analysis. In *Framing American Politics* (pp. 123–147). University of Pittsburgh Press.

Schoen, H. (2007). Personality Traits and Foreign Policy Attitudes in German Public Opinion. *Journal of Conflict Resolution*, 51(3), 408–430. <https://doi.org/10.1177/0022002707300180>

Schuck, A. R., & De Vreese, C. H. (2006). Between risk and opportunity: News framing and its effects on public support for EU enlargement. *European Journal of Communication*, 21(1), 5–32.

Segal, M. W., & Hansen, A. F. (1992). Value Rationales in Policy Debates on Women in the Military: A Content Analysis of Congressional Testimony, 1941-1985. *Social Science Quarterly*, 73(2), 296–309.

Shah, D. V., Domke, D., & Wackman, D. B. (1996). "To Thine Own Self Be True" Values, Framing, and Voter Decision-Making Strategies. *Communication Research*, 23(5), 509–560.

Sharpe Wessling, K., Huber, J., & Netzer, O. (2017). MTurk Character Misrepresentation: Assessment and Solutions. *Journal of Consumer Research*, 44(1), 211–230. <https://doi.org/10.1093/jcr/ucx053>

Shekhawat, S. (2015). *Female Combatants in Conflict and Peace: Challenging Gender in Violence and Post-Conflict Reintegration*. Springer.

Shen, F., & Edwards, H. H. (2005). Economic individualism, humanitarianism, and welfare reform: A value-based account of framing effects. *Journal of Communication*, 55(4), 795–809.

Sides, J., & Gross, K. (2013). Stereotypes of Muslims and Support for the War on Terror. *The Journal of Politics*, 75(3), 583–598. <https://doi.org/10.1017/s0022381613000388>

Sjoberg, L. (2007). Agency, Militarized Femininity and Enemy Others: Observations From The War In Iraq. *International Feminist Journal of Politics*, 9(1), 82–101.  
<https://doi.org/10.1080/14616740601066408>

Sjoberg, L. (2010). Women fighters and the 'beautiful soul' narrative. *International Review of the Red Cross*, 92(877), 53–68.

Sjoberg, L. (2014). *Gender, War, and Conflict*. John Wiley & Sons.

Sjoberg, L., & Gentry, C. E. (2007). *Mothers, monsters, whores: Women's violence in global politics*. Retrieved from <https://books-google-com.ezproxy.rice.edu/books?hl=en&lr=&id=MdIEqP3sz6kC&oi=fnd&pg=PA1&dq=beyond+mothers+monsters+whores&ots=e435ehb8x7&sig=l5abgH1ChIV2XU6ynHFnaRVwCbU>

Sjoberg, L., & Gentry, C. E. (2008). Reduced to bad sex: Narratives of violent women from the bible to the war on terror. *International Relations*, 22(1), 5–23.

Sniderman, P. M., & Piazza, T. L. (1995). *The scar of race*. Harvard University Press.

- Snow, D. A., & Benford, R. D. (1988). Ideology, frame resonance, and participant mobilization. In *International Social Movement Research: Vol. 1. From structure to action: comparing social movement research across cultures* (pp. 197–217). JAI Press.
- Snow, D. A., & Benford, R. D. (2000). Clarifying the relationship between framing and ideology in the study of social movements: A comment on Oliver and Johnston. *Mobilization*, 5(2), 55–60.
- Snyder, R. C. (2003). The citizen-soldier tradition and gender integration of the US military. *Armed Forces & Society*, 29(2), 185–204.
- Speckhard, A. (2008). The emergence of female suicide terrorists. *Studies in Conflict & Terrorism*, 31(11), 995–1023. <https://doi.org/10.1080/10576100802408121>
- Steans, J. (2013). *Gender and international relations*. John Wiley & Sons.
- Sullivan, P. L. (2008). Sustaining the fight: A cross-sectional time-series analysis of public support for ongoing military interventions. *Conflict Management and Peace Science*, 25(2), 112–135.
- Svedberg, E., & Kronsell, A. (2011). Introduction: Making Gender, Making War. In *Making Gender, Making War: Violence, Military and Peacekeeping Practices* (pp. 15–30). Routledge.
- Tickner, A. (2010). *Gendering World Politics: Issues and Approaches in the Post-Cold War Era*. Columbia University Press.
- Tickner, J. A. (1992). *Gender in International Relations: Feminist Perspectives on Achieving Global Security*. Columbia University Press.
- Tickner, J. A. (1997). You just don't understand: Troubled engagements between feminists and IR theorists. *International Studies Quarterly*, 41(4), 611.
- Tickner, J. A. (2002). Feminist Perspectives on 9/11. *International Studies Perspectives*, 3(4), 333–350.
- Tickner, J. A. (2004). Feminist responses to international security studies. *Peace Review*, 16(1), 43–48. <https://doi.org/10.1080/1040265042000210148>

- Tomz, M. (2007). Domestic Audience Costs in International Relations: An Experimental Approach. *International Organization*, 61(4), 821–840. <https://doi.org/10.1017/S0020818307070282>
- Traugott, M. W., & Brader, T. (2003). Explaining 9/11. In *Framing terrorism: The news media, the government, and the public* (pp. 183–201). New York: Routledge.
- Tversky, A., & Kahneman, D. (1981). The framing of decisions and the psychology of choice. *Science*, 211(4481), 453–458.
- Wilcox, L. (2009). Gendering the Cult of the Offensive. *Security Studies*, 18(2), 214–240. <https://doi.org/10.1080/09636410902900152>
- Yarchi, M. (2014). The Effect of Female Suicide Attacks on Foreign Media Framing of Conflicts: The Case of the Palestinian–Israeli Conflict. *Studies in Conflict & Terrorism*, 37(8), 674–688. <https://doi.org/10.1080/1057610X.2014.921768>
- Young, I. M. (2003). The Logic of Masculinist Protection: Reflections on the Current Security State. *Signs*, 29(1), 1–25. <https://doi.org/10.1086/375708>
- Youngs, G. (2006a). Feminist international relations in the age of the war on terror: Ideologies, religions and conflict. *International Feminist Journal of Politics*, 8(1), 3–18. <https://doi.org/10.1080/14616740500415409>
- Yuval-Davis, N. (1997). *Gender and Nation*. SAGE Publications.